THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿年　第五号

近刊豫告

明治闇黒史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歴史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、強者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗鬪せん時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黒史

紙數約四百頁

上巻 には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩臣と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤參議の慘殺より、愛宕事件を中心として、當時全國に蔓れる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奥羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲撃を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として、丸山作樂の朝鮮計劃あり

中巻 には、征韓論破裂より事を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件は、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の蹶起に全敗す。然かも之が前にしては、芝増上寺の燒拂あり、岩倉具視の要撃あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下巻 には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黑に陥り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いで起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

東京燒拂の暴動に驚ける世人、本書に就て、動亂の來る因由を探れ、本書は、斯くの如き變調に對して靜かに警戒と教訓とを與へつゝあり

發行所 東京本郷區西片町 反省社

中央公論第二十一年第五號目次



第二十一年
第五號
（二百六號）

伊藤山縣西園寺大隈諸氏の人物

其の朝に立つと野に在るを問はず、常に政界の雄として、寸時も世の注意以外に墜つることなきもの、一を伊藤博文侯とし、一を大隈重信伯とす、今や西園寺公望侯亦進んで之と相伍せんとす、玆に於て吾人は徐ろに此の三政事家を月旦するの頗ぶる趣味あるを感ず

山縣有朋侯は元帥の重位に在り、常に武辨を以て自任すと雖も、政界に於ける資望勢力彼の三氏者に超ゆるあるも讓るとなし、乃ち併せて之が評論を試みん

（一）

昔者水野十郎左衛門なるものあり、旗本中の慓悍放縱なるものを集めて、白柄組といふを組織し、大名を凌辱し市人を睥睨して任俠自から許し、苟くも己れに頼るものあれば假令極罪を犯せる兇徒と雖も之を曲庇し隱匿す、我が山縣侯は水野の如く放縱ならず、否嚴格自から持して容易に人を近けずと雖も、一び之を近くるときは、雞鳴狗盜の輩といへども尙ほ捨てず、叛きて我を去るに非ざれば、擁護到らざるなく、幾んど曲庇に類するに至る、故に牛溲馬勃敗皷の革と雖も其の用を爲さゞるなく、親近するもの死を以て之に事ふるに至る、其の門下に品川彌二郎子、野村靖子、芳川顯正子、桂太郎伯、兒玉源太郎子、淸浦奎吾男、内海忠勝男、曾禰荒助男、平田東助男、寺内正毅氏、大浦兼武氏あり、夜郎自大にして多く人に悅ばれざる靑木周藏子と雖も、矯々の氣を負ふて容易に他に屈せざる小村壽太郎男と雖も、亦敢て之れに趨くを制する能は

ず、彼の山本權兵衛男と雖も、亦時に然らざることを得ず、之に亞て伊東巳代治男、末松謙澄男、金子堅太郎男、都築馨六氏も亦侯と相叛く人に非ず、隨つて其の勢力の堅實なる、最も他に傑出す、或る人曰く、內閣組織の大命を拜するや否や、寸毫も他の異分子を加へずして咄嗟間に內閣を造り得るもの、唯一の山縣侯あるのみと、事實洵に然り、然れども侯若し其の勢力を恃みて、或は水野の如く放縱兇暴ならば、末路まで水野たらざるを得ざるべし、民間の政客多くは侯を藩閥の本尊と見做して、之を咒咀すること絕えざれば也

伊藤侯は智見餘りあつて他の短を知るの敏なるのみならず、好みて理義を談じ、討論を以て人に屈するを悅ばず、從つて清濁併せ呑むの度量なく、部下のために自から犧牲たる仁なく、善惡兩つながら貫徹せされば已まざるの執着心なし、故に多年重位にあり、識略群を拔くがために、官人間の資望極めて高きに拘らず、其の勢力漠然に過ぎて堅實ならず、僅かに井上毅氏あり、金子堅太郎、末松謙澄、伊東巳代治の三男ありて、世に春畝門下の四天王と稱せられしのみ、侯又眼識あり、能く人を拔擢す、是れ他の多く推服する處にして、近くは鶴原定吉氏を統監府の總務長官としたる其の一例なり、而かも其の習癖や、遂に所謂子分なるものを得るに至らず、思ふに兩侯互ひに長短あり、公論を以て之を判すれば未だ俄かに軒輊す可らず、其の所謂子分なるもの若し私黨ならば是れ天下の害なれば也、而かも政事家として子分なき、竟に能く成すと無ければ也

大隈伯また辯論の雄にして、剛愎尊大は稍々伊藤侯の上にあり、故に容易に他の短を見ざるが如く、所謂察々の明なきも、而かも大に人を容るゝ度量あるには非ず、動もすれば才氣自から用ゐて恣に獨斷し、其の率ゆる所の黨人をして常に窘迫爲す所を知らざらしむ、現に鐵道國有問題の如き、憲政本黨の多數は寧ろ之を贊成して世間の同情を得、併せて內閣及び政友會との關係を支持するの得策なるを信じたるも、伯が早

く非國有を絶叫したるがため、竟に餘儀なく國有に反對するに至れり、而して此の類特に多くして、黨員等頗ぶる伯を戴くに快からずといふ、憲政本黨が多年逆境に立ちて幸ひに解體せざる、思ふに伯の豪懷能く苦艱に耐ゆること與つて其の多きに居るべし、然れども憲政本黨をして常に逆境に立たしむるものも亦伯なる無らんや

　西園寺侯は伊藤侯の繼承者と稱せらる、伊藤侯に繼ぎて政友會總裁たるより視れば果して然るべし、侯の政友會を御するや、多く伊藤侯と異ならず、會員時に或は異説を立て、動もすれば衆議紛々たらんとするも、竟に侯の言説に服從するに歸着す、是れ政友會員等黨事に練熟して能く首領の指令を奉ずるが故乎、抑もまた侯の明識能く衆を服するに足るものある乎、思ふに兩つながら之あらん、今や侯内閣の首班に立ち、外は政友會を基礎とし、内は山縣侯系の擁護を得、薩派の同情を繋ぎて、貴族院にも惡しからず、又大同俱樂部の賛成を有す（此俱樂部が山縣系の管轄たる事實今や蔽ふ可らずなれり）其の地位頗ぶる鞏固なるが如きも、實は進退を共にするもの唯だ内務大臣原敬氏と司法大臣松田正久氏あるのみ、之に次ぐ或は文部大臣牧野伸顯氏か、少しく奇なるは故陸奥宗光氏に近接せる人々が伯の死後多く侯に歸せること也、原氏は則ち其の一人也、侯が名門の出を以て生れながら悠揚迫らず、加ふるに頭腦の明透なるありて、群心に献酬し衆客を駕御する、夫れ或は天成の資實乎

（二）

　松方伯財政の局に當ること二十年、富巨萬を重ねたるは世の驚嘆する所也、井上伯は頗ぶる計算に長ぜるがため營利に敏なりと稱せらる、然れども其の貯ふる所、舊寺古刹より寄贈したる古書畫幅類を主として其の價計る可らざるのみ、資財に至ては却つて少しといふ、大隈伯は食膳に珍羞を絶たず、豪奢を極めて他を傲睨する丈け、其の生財の道は世の疑問たるを免かれず、或は伯の手屢々株式市場に現はるゝと稱する者あり、吾人素より之を信ぜずと雖も、伯を以て財利に淸

き人なりとは到底信ずるを得ざる也

山縣侯は伯たり侯たり中將たり大將たり元帥たるに於て、各相當の面目を保持せざる可らずと做し、之がため相當の財產を積むといふ而かも敢て利殖を計るにも非ず、必らずしも財利に淡なりといふ可らざるも、亦不淨なる形迹あること無し、然れども目的のために手段を擇ばざるは侯の特質なり、屢々黃金政略を用ひ、甚だしきは政界を溷濁せしめて天下淸議の指彈を蒙むることあり、大隈伯すらも時に熱烈に之を攻擊するに至る、侯は自から淸くして政事家たる乎を問はざるものか

最も財利に淡泊なるは伊藤侯也、其の伊皿子の邸を賣り小田原の家を賣れる、皆負債のためにして、日淸役に得たる十萬圓の恩賜金を以て、辛ふじて負債を完濟し、且つ今の大磯の宅を保つを得たりといふ、侯の淸廉なるは、侯の最も尊重さるゝ所以にして、如何に侯を嫉視するものと雖も、此の一事乃ち侯に推服せざるを得ず

西園寺侯に於て吾人未だ多くを聞かず、唯だ不淨の說の曾て傳はらざるに徵すれば、侯も亦伊藤侯の亞流なるべし、侯の人格より視て吾人は然かく直覺す

（三）

婦人の目より之を視れば、政事家も亦奇なるものなるべし、井上伯頑健人に過ぎて、七十餘歲の今日尙ほ水浴を絕たず、『老人の冷水』なる邦諺をして其前に全く無意義ならしめ、三冬常に外套を用ゐずして幌馬車を驅るが如き、見る人の驚ろく所也、伊藤侯亦健康人に過ぎ、酒盃を手にせざれば止らずシガアを手にし、少しく疾むも大抵荒療治にて手療す、大隈伯も剛壯群を拔き、片脚を喪ふも曾て老衰の色あらず、彼等の英雄たる、其の健康の千萬人に優さること能く之を證すと謂べし、然れども此の獸的身體の那邊にかまた獸的慾情無き能はず、自から星亭氏と相比して婦人に淨きを誇れる大隈伯と雖も、侍婢を妾とせること一二に止まらず、井上伯は今尙ほ妙齡の妓を携へて時々花明柳暗の西部に出沒す、此の二伯の衰へたるを嗤ふ伊藤侯に

至つては、悪口の記者が綽名して狒々侯といふに見て其の甚だしく濫なるを知るべし、西園寺侯は、所謂巴里育ちの貴公子にして、英名曾て新橋の南北に躁ろき、婦人のためには曾て顯爵を視ること實に敝履の如くなりき、山縣侯に至ては嚴肅自から矜持するも、芽城臺の本邸奥深き所に阿嬌を蓄へて、這個裏老侯の面上自から皺伸び白眉開くの妙を見る、此の阿嬌は彼の紋妓歌吉なるものと情死せる吉田某の第二女にして、姉と共に籍を教坊に掲げ、姉は益田孝氏に贖はれて今茅場町に蓄へらる、元帥陸軍大將にして而して樞密院議長たる老侯には、乃ち斯の如き艶史あり

彼等の理想は東洋豪傑流なり、東山の妓を携へたる謝安なり、而かも未だ一の名妓の配するものあらず、艶道萎靡して紅拂、高尾の輩あらざる乎、抑もまた政事家等卑俗にして其の佳人に遭遇する能はざる乎

（四）

松方伯は豊富なる骨董家なり、而してまた有名なる買物家なり、井上伯は多く絶妙なる佛畫を藏す、凡そ畫を賞する、花鳥人物より終に佛畫に至て最上最高とす、井上伯の畫に於ける、他漫りに企及す可らず

然れども我が伊藤山縣西園寺の三侯に至ては、文雅の稱するに足るもの少からず、假令骨董家ならざるも、古畫を藏すること極めて稀なるも、風格は乃ち遙かに高し、蓋し長人には多く天縱の雅才あり、彼の熱烈矯激に過ぎたる品川子が、屢々絶妙なる俚歌を吟出して才人に舌を捲かしめたる、高杉東行の如き武邊一偏の士が、尚ほ時に風流韻事を傳へて其短生涯に趣味を添えたる、久坂、木戸の諸豪の殊に文事に富みて、吟咏揮灑、總て人に優たるの妙ありたる、其の一證也、之を先輩とせる伊藤侯は詩を善くし書を善くし、醉時龍蛇を紙絹に躍らすの技あり、山縣侯國詩を好み、また筆札に老練し、共に一種の風格あり、伊藤侯の誇とする滄浪閣中の圖書室は、單に一の裝飾物に非ず、侯の讀書癖は能く侯をして名を世界に馳せしむ

西園寺侯俳句を好み、時に絶唱を傳ふるとあり、書は典雅温潤にして氣品頗ぶる高し

獨り大隈伯詩歌の才なく、少しく讀書するも幾んど手に筆を執らず、然れども園藝を好み、珍卉名華を蒐集して其の美を帝都に誇り、又雞豚を飼ひ、養雞家を驚嘆せしめて得色あり、最も談論を好みて今や文藝をも評論して臆することなし、故に其の嗜好多方面に渉るも、却つて總て淺薄を免かれず、蓋し伯の腦は健啖家の胃の如し、有らゆる客を引見して其の談論を聽き、大抵一び我が腦裏に容れて更らに之を他に説示す、其の甲より聽く所は之を乙に、乙より聽く處は丙丁に傳へ、而かも自家の消化に依て多少の色彩を附加す、故に多角多方面にして且つ架々盡くることなきも、自から淺薄なるを免かれざるのみ

（五）

概して之を評するに、人物の風格超邁なるは西園寺侯を第一とし、伊藤侯之に次ぎ、大隈伯更らに次ぎ、山縣侯を其の殿とす

理義に明晰なることは伊藤侯、西園寺侯、大隈伯、山縣侯の順序なるべし

剛斷果決に至ては、唯だ西園寺侯あり、亞で大隈伯あり

群心に献酬して妙を盡し、順逆を以て其の意氣を變ぜざるの豪放は、僅かに大隈伯あり、

老熟にして機略に富むは、伊藤侯乎、而して山縣侯之と伯仲の間にあり

若し夫れ成功の一因たるウヰクネスに至つては、山縣侯其の首たるべし、他は遙かに之に及はず、西園寺侯は其の尾に位ゐす

吾人の見る所斯の如し、政事家として誰か最も偉なりとするや、吾人は姑らく之をXとして解答せざるべし、然かも讀者は惑ふことなかるべき也

活ける教訓

陸軍の凱旋を表彰すべき大觀兵式に次いで、海陸軍戰死者を追祀し、引續いて靖國神社大祭を行はせらる、是れ活ける教訓なり最上の實物教訓なり

人に貴ぶべきは、一身を犧牲として他衆のために盡すを第一とす、基督が眞理を宣傳せんとして到る處迫害せられ、竟に虐刑に慘死したる、釋迦が衆生濟度のために九五の王位を捨て、十年の難業を積み、終生法を說きたるは千載の下尚ほ幾億の人々に渴仰崇拜せらるゝ所以にして、共に一身を大なる犧牲としたるの結果也

日露戰役は我が國有史以來の大難なりき、元兵十万筑紫に入寇したるに幾倍せる國難なりき、若し我れ不幸にして敗軍せんか、滿洲と韓國とは悉く露國に屬せざるを得ざりしならん、否壹岐對馬は必らず我が有ならじ、或は九洲を奪はれ、千島北海道を取らるゝと亦必無なりしとす可らず、事茲に至らば我が皇の宏謨は沮敗し、國礎動搖し、國民の意氣は挫折せん、是れ日本國の獨立を失ふ也、日本民族の自存を危くするなり、故に戰ひ已に開かれたる以上、我れは必らず勝たざる可らず、日本國と日本民族の獨立自衛のため、國焦土となり、民孽遺なきに至るまで奮鬪するの決心を以て戰はざる可らず、此の時に方つて我が壯丁の兵となれるもの、一び召集の命下るや、槌楨を捨て鋤犁を抛ち、一家生計に苦み糊口に窮するを顧みず、父母妻子の恩愛を捨て、哀別離苦の情を一擲して軍陣に赴むけり、是れ君國のために一家一族を犧牲としたるなり、而かも陣に臨むや、熾くが如き炎熱を意とせず、骨を刺す奇寒を避けず、飲食住居の粗薄なる苦痛に耐えて一意敵を破らんと欲し、砲火劍尖の間に出入して万死の危きを恐れず、屍を踰え血を蹀みて苟しくも敵に背を見せず、勇戰猛鬪、紛骨粹身して斃することなし、是れ君國のために一身を犧牲としたるなり、而して終に病傷し、而して終に戰死す、而かも君國のために曾て惜み哀みの情あらず、其の智德の宏大なると素より釋迦基督に及ぶ能はずと雖も、心事の高尙にして純潔なる乃ち毫も異なること無し、忠誠義烈、何ぞ區々たる人爲の勳位爵祿を以て其の万一を表彰するに足らんや、之を人間以上の神として祀ること洵に當然也

飜つて思ふに、彼等の多數安怡に田園に老ひ、工場に終らば、竟に碌々たる平凡の農工者のみ、其の名素より現はれず、其の事また永く傳はらざるべし、然るに國家の大難に殉じ、君國のために一身を犧牲とするや、神として祀られて畏くも至尊の親拜を享け、國民の崇仰を受けて長へに清廟に血食す、其の遺族亦鄕閭に重んぜられて都鄙到る處に優待せらる、彼等地下の英魂にして知るあらば、必らず快然として瞑目せん、而して後の風を聞きて起つもの亦永く絕ゆるとなかるべし

蓋し此の神は、國家護衛の名譽ある明神として、永く日本民族の子々孫々を指導すべし、彼等の子々孫々は、一旦君國の難あるや、また直ちに之に赴き、一身を犧牲として彼等に倣ふべければ也、常に彼等の遺風を欽慕して第二の彼等たらんことを期し、造次顚沛も之を忘るゝとなかる可ければ也、何ぞ況んや彼等と同一の血液彼等の子々孫々に流れ傳はりて、長く絕ゆるとなかるべきをや

是れ活ける敎訓なり、然り偉大なる實物敎訓なり、万卷の書を敎ゆるよりも、尙ほ有力なる活ける大示現なり

排哲學論を評す

金子筑水

近來一班思想の動搖につれて、各種の懷疑又は疑惑の風潮盛に社會の各方面に瀰漫し來たれるものゝ如し、各社會の各方面の事態の動搖につれて、世人は最早在來の確信又は權威に絕對の信を措く能はず、あらゆる事物に對して狐疑逡巡、疑惑懷疑の態度を取來たれる、むしろ自然の趨勢とも謂ふべきか、斯くの如き多種多樣なる懷疑的傾向のうち、今の思想界及び文藝界には、一種奇異なるしかも輕卒に看過すべからざる一種の懷疑的傾向あり、他なし、一班知識就中哲學に對する懷疑これなり、すなはち文藝にたづさはれる者は動もすれば公言すらく、哲學は迂遠なり、煩瑣なり、人生に關して能く何事をか敎ひ得べきぞ、藝術は直接

に人生の眞相を示す、哲學には左る力なし、哲學は之れを缺くを得べし、藝術は缺くべからず。哲學は人生の活ける生命を斷片零碎に破壞し盡して、吾人に何等人生の眞相を理解せしめず、人生の姿を活けるが儘に直示するものは獨り藝術のみ、哲學は藝術の敵なり、迂遠なる腐儒の事のみ、藝術家は哲學を學ぶの要なき者なりと。また一部の自然科學者は哲學を無用視して曰はく、哲學畢竟空想ならずや、眞の知識は自然科學の與ふる經驗的知識に限らずや、世に絕對的知識といふが如きものなし、哲學の如きは世の好事家の無用の辨、世間有爲の青年の學ぶべきものにあらざるなりと。更にまた宗教的態度に在る者は叫びて曰はく、人生の實相は能く哲學の教へ得る所にあらず、安心立命と哲學と何等の關係かあらん、蓋し哲學は吾人の安心に何等の貢献する所なく、却りて吾人をして煩瑣なる理論の迷岐に惑はしむるに過ぎざる也と。

卒然論者の主張のみを聞かば、其のうちには確實なる眞理あり、一見動かすべからざる主張なるに似たり。

そもそも哲學に對する斯くの如き反動は如何にして起こり來たれるか。予輩の觀る所によれば、これ在來の主智的傾向に對する反動に外ならじ。明治維新以來最近五六年前に至るまで、我が思想界の主なる傾向は、言ふまでもなく主智的なりき、一切は理的に解釋し盡されて餘蘊なかるべく、理的にだに解釋せらるれば、一切は旣に其の目的に達せるものと觀ぜられき。故に前年に於ては、理知は吾人の高貴なる精神活動の全分にして、哲學は精神活動の唯一最高なるもの、哲學をだに研究せば、一切の安心滿足は立ちどころに得らるべしと觀ぜられき。しかるに豫期は實際と異なり、知識は吾人に充分なる滿足を與へず、哲學は極めて難解煩瑣にして、しかも其の學說には統一なく、世人はやうやく一班の學術に對して不滿を感じ來たりぬ。此の際恰も人類の精神活動は理知一邊のものにはあらで、更に其れより複雜深奥なるものあるに想ひ至りぬ、心の主情的解釋又は主意的解釋これなり。此に於てか世間は、俄に在來の主智的傾向に對して反動の

氣勢を示し、すべて知識を蔑視し、理知を嘲り、延ひて哲學を無要有害と斷じて憚らざるに至りぬ。歐洲十八世紀末に勃興せる主情派の詩人宗教家が在來の獨斷的哲學に反對の氣勢を示したるにも似たらんか。これ今の思想界及び文藝界に散見する一種の傾向ならずや。

予輩は此の種の反動を絶對的に排斥する者にあらず、予輩も亦理知は高貴なる精神活動の全分とは見ず、むしろ情意活動をこそ精神活動の中樞機軸と觀ずる者なり。理知豈万能ならんや、哲學の與ふる知識豈絶對的ならんや、理知を萬能と信じ、哲學を宇宙の絶對的眞理を示すものと觀ぜるは、單純なる昔人の美はしき夢に過ぎず。有限なる小さき人智が爭て宇宙人生の絶對的眞理を觀破するを得べきぞ、哲學爭て不變不動なる絶對的眞理を示すを得べきぞ。元來哲學はしかく過重視せらるべきものに非るなり。さもあれ、單に此の理由もて哲學を排斥せんとするはまた既に極端に失せずや。斯ばかりの理由もて哲學を排斥するは、餘りに輕躁に失せずや。理知は假令吾人に充分なる滿足を與へずとも、又哲學は假令吾人に絶對的眞理を示さずとも、尙一班の學術並びに哲學は、其の正當なる領域内に於て、尙人生に相當なる貢献を致すべきものにはあらざるか、其の相當なる價値までも沒却して、一概に之れを無益なり有害なりとして排斥し去るの理由何處にか在る。予輩は恐る、今の文壇の哲學を排斥する者は、眞に哲學の精神に通じ、哲學の本領を解し、哲學の正當なる價値を認めて、然るにあらずして、反動の餘勢に驅られて、輕卒にも淺薄にも、漫然として排哲學の聲を高うするにあらざるかを。予輩は恐る、今の哲學を排斥する者は、哲學の相當なる價値だも辨へずして、徒に流行の浮華輕佻なる氣勢に驅られて、漫然他に附加雷同するにあらざるかを。識者は斯かる浮薄なる言のために迷はざるべし、たゞ恐る、思想未熟なる世の靑年の、相率ゐて此の浮薄なる言説に迷はさるゝことを。請ふ少しく哲學のために辯ぜんか。

先づ文藝家の排哲學を以て初めん。古來文藝に從事せ

る者が、動もすれば哲學に對して不滿を公言し、甚しきは排哲學の氣勢を漏らしたる例は、げに列擧するに遑あらざるべし。シレルがカント哲學に熱中せるに係らず、ゲーテが、嘗に時の獨斷的哲學に反對せるのみならず、また一班の分析的知識に對して慊焉の情に堪へざりしは世人の熟知する所、又詩人レナウが一切の科學を罵りて之れを非科學と名け、哲學を罵倒して、これ腐儒の囈語に過ぎずと呼べる、斯くの如きは古今の文藝家に於て敢て珍しからざる事實なり。されど、世界の大詩人文豪と言はるゝまでの者が、一班の學術並びに哲學に對して不滿を公言したればとて、直に之れを根據として、文藝のみはひとり保存し發達せしむべし、一班の學術並びに哲學は一切之れを排斥すべしと言はゞ、誰か其の言を狂とせざらんや。今の文藝に從事せる者が、動もすれば排學術排哲學の態度を取るには、今一層深き理由なくんばあらず。

思ふに今の文藝界に於て、排學術排哲學の傾向を取る者は、先づ文藝と學術との價値を比較し、文藝の價値を遙に學術並びに哲學以上のものとなし、因りて學術を排斥し、因りて哲學の如きは文藝家に取りて無要有害と斷ぜんとする者のごとし、すなはち曰はく、知識は畢竟事物の形骸を冷やかに觀察する事に過ぎず、其の精神に觸れ靈氣に感ずるは、能く知識の爲し得る所にあらず、科學や哲學や、宇宙人生を攻究すといふも、畢竟は之れを分析解剖して、其の斷片的形骸を概念的に考察するに過ぎず、分析解剖によりて其の生命精神は疾に逸し去らずんばあらず。科學や哲學や、到底宇宙人生の實相を如實に、活けるが儘に、具體的なる眞實のまゝに直示する能はざるなり。且夫れ科學や哲學や、經驗的知識を基として、論理的に秩序正しく、徐ろに宇宙人生を攻究するに過ぎず、其の方法や煩瑣、其の進歩や遲々、容易に宇宙人生の神秘に到達し得るものにあらざるなり。藝術に至りては之れと異なり、人生を活けるが儘に直示す、概念の手段によりて間接に其の形骸を探らんとはせず、情をもて情に逼り、神をもて神に逼り直接に人生の生命を感得するを

藝術の本領となす、而して藝術に於ては、煩瑣なる理知の迷路に頼ることなく、單に空想の翔に頼りて、直に宇宙人生の神髓に逼るを得、これ吾人が藝術を貴びて學術に滿足せざる所以なりと。

これ學術の短所を指摘し、藝術の長所を擧げたるもの、予輩も亦大體に於て此の主張に同意せん。されど斯くの如きは排學術排哲學の理由とはならず、哲學がさる短所を備へたればとて、若し他に相當の長所を具備したらんには、而して假に其の長所が學術の價値に及ばざるを遠しとするも、そは決して哲學排斥の理由とはならざるべし。辯ずる者ありて、下の如く曰はゞ如何。文藝は主として情のことなり、哲學は主として智のことなり、人は單に情一邊の動物にあらず、同時に亦理性的動物なり。故に人類は單に宇宙人生を情的に感得せるのみにて滿足する者にあらず、必や之れを理的に明瞭に理解せずんば已まず、理的に明瞭に之れを理解するにあらずば、充分確實に之れを捕捉し得たりと感ずる能はざるなり。文藝は感情的なるだけに、其の教ふる所は、假令深遠なりとも、茫漠散漫に失す、明瞭に精密に微細に吾人を教ふる能はず。明瞭に精密に確實に事物を教ふるは、學術の本領にして、若し學術的知識を缺かんか、文藝のみが吾人に教ふる所は、極めてファンタスチックなるものならん。故に學術なき文藝は、猶理知を缺ける情のごとし、人生は到底文藝一邊のものにはあらざるなり。且夫れ理知によりて訓練せられざる情は粗野なり、理知によりて開發せられざる精神活動は盲目なり、人類の精神活動の貴き所以は、單に情意作用あるがためにはあらで、理知にありて訓練せられたる條理ある情意活動あるがためなり、然るに理知の發達を杜絶して、人生を徒に盲目なる情意の活動に任ぜんか、人世は如何に荒唐奇怪なるものに變り行かんぞ。古來偏藝術主義が、如何に多大の弊毒を損へるかを思へ、偏藝術教育が、如何に世の子弟を世に流布せるかを思へ、理知の訓練を經ざる情意作用ほど世に危險なるものは非るなりと。これ藝術の短所を擧げて、學術の長所を指摘せるもの、大體に於て

何人も此の意見に異議を挿むを得ざるべし。藝術には藝術の本領あり、學術には學術の本領あり、互に相並びて人生の發展に貢献すべきもの、其の價値に於て、二者孰れが優れるかは、容易に決すべからざる問題なり。人生を活けるがまゝに寫出だして、直接に其の靈氣に觸れしむるは藝術の特長、此の點に於ては、藝術は確に哲學の上にあり。人生を教ふることの靈活さと深さとに於ては、哲學は到底藝術に及ぶべからず。且夫れ學術は學ぶべきものにして、藝術は樂むべきもの、學術は理知の煩瑣なる手段を要して、藝術は普く何人にも賞翫せらるゝもの、範圍の普遍なる點に於て藝術は優に學術以上なるべきや勿論なり。されど精確に人生を理解し、明瞭に人生を解釋する上に於ては、哲學は明らかに藝術に優る。哲學は直接に人生其のものを感得せしむるの力を缺くと雖も、合理的に情操を陶冶することによりて、人生を正しく感得せしむるの素地方針る與ふるものなり。すなはち哲學は、直接に人生を味はしむるものに非ずと雖も、吾人をして精確に之れを味はしむるの用意となり準備となるもの、人生の經驗の高等なる豫傳門とも謂ふべきものなり。されば哲學の價値を假に藝術以下のものとなすも、尚哲學は藝術と相並びて、藝術の能くせざる所を能くし、藝術の缺點を補ひて、相當なる貢献を人生に致しゆくもの、藝術と相並びて人生の發展を飾りゆくもの、決して一時の反動の餘勢に驅られて、漫然排斥すべきものに非るなり。若し人生を飾るものは獨り藝術のみにして、すべて學術といふもの世に存せざりせば、人生は如何にファンタスチックなるものに變らんぞ。

一班の學術並びに哲學は、假令直接に人生を味はしむるものに非ずと雖も、尚情操を合理的に陶冶して、精確に之れを味はしむるの準備となるもの、隨ひてまた哲學は藝術家に取りて全然無關係なる事にあらず、少なくとも眞の藝術家たらんと心がくる者に取りては、哲學は正しく其の修養の一方便たらずんばあらず。哲學は直接に藝術に資する所ありとは言ふべからざるも、尚ほ藝術家たらんとする者をして、精確に人生を味は

しむるの準備たらずんばあらず。藝術家は盡く哲學を學ぶべしとは言はず、哲學を學ばざれば藝術家たる能はずとは言はず、されど、今後の藝術家たらんとする者は、少なくとも其の修養の途次に於ては、哲學を學ぶの要あるべし。近代の大詩人大文豪と稱へられし者にして、少なくとも其の修養の途次に於て、誰か全く哲學を學ばざりし者ぞ、一班の哲學に不滿を感ぜるゲーテすら、尙スピノーザに私淑して、得たる所少なからざりしにあらずや、ヲーズヲースは如何、シレルは如何、バイロンは如何、乃至ワグナーは如何、近代の大文藝家は皆其の修養の途次に於て、一應哲學の指導によりて、正しく人生を感得するの準備を怠らざりしにあらずや。假令其の修養せる哲學が豫期せる滿足を與へずとも、他山の石、之れに賴りて自家の人生觀を磨くを得ば、これはた修養の一方便にあらずとせんや。

轉じて、自然科學と哲學との衝突に就きて一言せんか。これ西洋に於ては、最も古き問題の一にして、就中十九世紀の後半期に於ては、最も熱心に研究せられし問題なり。玆には此の問題の、詳細にわたりて論述するの餘地なし。現今の哲學の意義は、件の自然科學と哲學上との關係問題に依りて、在來の哲學の意義とは其の面目を一新し來たり、一たびは哲學の存立をさへ否定せる自然科學者も、今は自然科學と哲學との調和の不可能にあらざるを見て、次第に哲學の必要を感じ來たりぬ。人は個々の、自然科學の與ふる知識のみにて滿足する者にあらず、全體の科學的知識の成立する根本に想ひ至り、更に此等科學的知識の統一に想ひ至り、又更に此等一切智の成立し來たる微妙なる心作用に至れば、吾人はおのづから哲學の領域に進入せずんばあらず。固より哲學の研究組織には至大なる困難伴ふべし、昔人の夢想せる如く、人智は絕對的のものに非ず、又哲學は絕對不變の眞理を直示し得るものにも非ず、普通の科學的知識の最高統一、やがてこれ哲學に外ならざるが故に、其の研究組織には幾多の障碍、幾多の誤謬、幾多の危險は山の如く橫はれり。然も人類は其の當時の知識の進步の度合に應じて、宇宙人生

に關して科學的に推究し得る最後の判斷を下す、是れはた人類の理性に自然なる徑路にして、しかも亦吾人々類の誇りとする所にあらずや。而して斯かる意義の哲學は、單に理性の道樂三昧のみにはあらずして、吾人をして精確に人生を會得せしむる上に多大の稗益を與ふるもの、故に、哲學の研究は人類に自然にして又必須なるものと謂ふべき也。

然るに我が國に於ては、眞の哲學の本領並びに其の價値は未だ普く認められず、就中專門の自然科學者中には、哲學に對して一種懷疑の態度を取るもの多し、本誌前號所載丘博士の「藝術としての哲學」を讀めるものは、同博士が如何に哲學を輕視せるかを知るを得べし。同博士の論旨はほゞ下の如くなりき、曰はく、人類の理性は、哲學者の想像せる如く宇宙人生の絕對的眞理に到達し得るものに非ず、絕對的知識と云ふが如きは、哲學者の空想夢想に過ぎず、具體的に實驗し得らるゝ自然科學の知識には信賴するを得べし、徒に袖手傍觀、絕對を夢むる哲學者の所說は空想に過ぎじ、哲學を一種の藝術（空想三昧に成れる藝術）として觀察すれば多少の妙味あらん、されど學術としては殆ど何等の價値なし、知識論を學ぶ者哲學を研究するもの、皆これ空想三昧に耽るに外ならずと。

哲學に對する斯くの如き駁論は、西洋に於ては既に幾度か返へされ、現今の哲學者は、おほむね斯かる駁論に抵抗して立てるもの、否、更に有力なる駁論の試煉に堪へたるものなり。哲學的知識を絕對となし、哲學を絕對的眞理に到達し得るものと解せるは、古き獨斷的哲學者の言、吾人は今や幸ひに斯かる謬見の上に哲學を組織するを要せざるなり。丘博士は知識論の研究も空想三昧なりと言ひ放ちて、何故其れが空想三昧なるかの理由を示さず、故に予輩も亦茲に、知識論の研究は空想三昧にあらずと斷言しおくに止めん。更に同博士は哲學全體を総括して、之れを空想に成れる藝術と呼べり、予輩は曰はん、哲學は必ずしも藝術にあらずと雖も、從來歷史上に現れたる哲學就中獨斷的哲學は、一面藝術の色を帶びたり、從來の哲學が或は宗教

或は藝術の色を帶びて、未だ純粹なる學術の境に發達せざりしは爭ふべからず、しかも現今哲學思想の大勢は、在來の藝術的若くは宗敎的の境を脫して、漸次純粹なる學術に進化せんとしつゝあり、將來發達すべき哲學をも併せて、一概に之れを藝術と見做すは、餘りに速斷に失せずや。丘博士は哲學の研究を懷手式と名けて、極めて痛快に哲學的空想を罵倒せり、されどラボラトリー式のみが獨り眞理の研究法には非ず、懷手式はおろか、沈思瞑想、他の一切を忘却して當面の事相を專念熟慮する、またこれ眞の學術研究の方法にあらずや。

最後に宗敎と哲學との關係に就きて一言せんか。今の宗敎的態度を取れる者は、屢〻公言すらく、哲學は吾人に何等の安心、何等の宗敎的確信だも與へず。哲學者は宇宙人生に關する眞理を敎ふと公言す、然るに吾人は哲學を學びて、何等人生に關する最後の安心を得る能はず、却つて哲學は吾人を導きて煩瑣なる理路に惑はしむるに過ぎず、煩瑣なる理路に迷ふ限りは、吾人はとこしへに宗敎的安心の境に進むを得ざるべし。されば、吾人は須からく先づ哲學を放擲すべし、先づ斯くの如き宗敎的安心に何等の裨益だも與へざる迷妄を斷絕すべし、哲理の研究と云ふが如きは、畢竟理性の無益なる業に過ぎざるなりと。

哲學に對する斯くの如き駁論は、これまた宗敎と哲學との本領を混交し、哲學もて宗敎に代へ、宗敎的安心を哲學に賴りて求めんとする者、未だ哲學の眞價を知らざる者の言なり。宗敎的安心は主として情の働の上に成立す、宗敎的態度は主として情の事なり、理知は宗敎的信仰を造るものに非ず、純粹なる宗敎的態度の者に取りては、理知は何等重大なるものにあらざるなり。純粹なる宗敎的意識は、主として情の感激的態度の上に成立す、口もて能く之れを形容すべからず、理もて能く之れを說明すべからざる所謂言語を絕せるの境、これ宗敎的意識の至極なり。故に宗敎の生命は哲學とは何等の關係もなし、哲學上の學說は如何に動搖すとも、宗敎の生命はとこしへに絕滅する時なかるべ

し。宗教の生命又は宗教的精神は理知の上に成立するにあらざればなり。されば、哲學に依りて宗教上の安心を求めんとするは、恰も樹によりて魚を求むるのたぐひ、初より哲學を誤解せるものなり。哲學や、宇宙人生の實相に關して立論すと雖も、直接に宗教的情操を造るを目的とはせず其の直接目的は、飽までも宇宙人生の精確なる判斷に過ぎず、而して哲學の進步は、其の當時の科學的知識の進步に順ず、是れ哲學が容易に宗教的意識を滿足せしむる能はざる所以ならん。

哲學は宗教上の安心を與ふるものに非ず、宗教的意識は哲學に依りて造出ださるゝものにあらず、然らば、哲學は宗教的意識とは何等の關係無きものなるか、哲學は間接にだも宗教とは何等の關係もなきものなるか、哲學は宗教家に依りて絕對的に排斥せらるべきもの、宗教的意識には無用有害なるものとして一概に擯斥せらるべきものなるか、何ぞさる理由あらん、哲學豈全く宗教に無關係なるものならんや、哲學は直接に宗教的情操を造出だすものに非ずと雖も、間接に精確なる宗教的意識を養成するの力あり、哲學は直接に宗教的精神を造るの力無しと雖も、間接に人を正しき宗教的意識に導くの力あり。哲學は迷信を破壞す、哲學は世のすべての僞なるものを破壞す、精確なる宗教的意識は、間接に哲學に依りて涵養せられずんば非ず。夫れ哲學の直接目的は、宇宙人生の精確なる判斷なり。されど其の窮極目的は、宇宙人生の實相を解釋して、人類生存の目的を明示するに有り、人生の歸趨は果たして何處にあるか、人類最後の安心地は果して孰れの境に存せるか、此等を精確に判斷するが哲學の窮極目的なり。たゞ哲學は主として理に就きて談ず、假令智的に人生の歸趨を理解すとも、そは未だ宗教的意識其の者に非ず、されど斯かる精確なる判斷は、少なくとも吾人を精確なる宗教的意識に導く上に於て、多大の力あるものなるや爭ふからず。世の宗教家動もすれば、哲學は宗教を破壞するものとなす、是れ誤解なり、宗教的生命は決して哲學の爲めに左右せらるゝものに非ず、哲學はたゞ迷信を破壞し間接に吾人を精確

なる宗教的意識に導くに過ぎざるなり。

哲學は啻に吾人を宗教的意識に導き入るゝのみならず、又宗教的意識の發展に多大なる助力を與ふるものなり。夫れ純粹なる宗教的精神は情の感激の態度なり。理知の事にあらず、されど、人は情一邊の者に非ず、一面に於ては理性的生物なり、故に、純粹なる宗教的精神は、單に情の感激的態度のみには止まらずして、必や何等か理知の衣を藉りて外に表白せられざるを得ず、而して斯く外に表白せらるゝことに依りて、宗教的精神は一層精確に吾人に把持せらる、宗教的情操の諸の標象、宗教的教典、宗教的理論等は、斯くの如くして必然的に世に現れ來たる。斯かる宗教的意識の發展に際して、哲學的識見は之れに何等の關係も無かるべきか、哲學は宗教的意識の發展に秋毫の關係も無かるべきか。吾人は正當に下の如く言ふを得べし、曰はく、哲學的識見は、宗教的信仰又は宗教的精神を精確に言ひ現はす上に於て、必須にして缺くべからざるものなりと。

以上予輩は今の文藝界、科學界及び宗教界に散見せる哲學反對の傾向を指摘せり、而して斯くの如き傾向は、主として今の一班思想界の動搖に際して、あらゆる方面に瀰漫せる小懷疑に基づきて起こり來れる、必然にして避くべからざる傾向ならんも、而かも孰れも深き根底なき淺薄なる壞疑的傾向にして、更に交ふるに輕佻浮薄なる氣風を以てせり、或は哲學の本領を誤解し、或は己が好める處に偏し、或は全く哲學の何者なるを知らず、或は漫然他に附和雷同して以て自から高しとなせる等、全體の風潮が著しく輕佻浮薄にして、甚しく直率眞面目の態度を缺けるは、決して喜ぶべき現象にあらじ、一にも大國民、二にも大國民を以て自稱せる國民が、斯くの如く淺薄輕佻にして、精勵刻苦自信自重の態度を缺かば、我が思想界及び文學界は、何時を期して大國民としての思想文學を産出するを得べきぞ。

男女學生の交際に就て

下田次郎

男女學生交際論は、此頃頗る囂しき問題なるが、此題名は、語樣何となく露骨にして好ましからずと稱する人あり、予も亦然りと信ずるものなり、そはともあれ、之に就きて諸家の意見も少かざられど、先づ大體に於て左程の異見あるべきにあらず、要は其實行如何に在るのみ、今暫く問題の範圍より推究せん、

日本にては、廣く交際に就きて注意すべきものあり、例へば男子と男子、女子と女子、若くば青年と老人の間の如き之にて、由來我國は青年と老人とは餘り交際せざる傾あり、青年といひ老年といへば其間甚だ阻隔し居りて交際なるもの多く成立し居らず、故に苟も交際論として研究せんには此青年と老年者との關係の如きは皆問題となるべきものにて、社會改良といふ上よりも、如上の何れも皆必要なるべしと信ず、此等を暫く措き、扨て男女交際といふは由來何を標準とするかと言ふに、想ふにそは主として中流以上、特に都會に在るものを指すなるべし、下等社會にては女子とて因循踏躇し居るものにあらず、男女共に勞役に就き自由に交際を爲し居るなり、田舍に在りても都會の如く隔絶し居らず、鎭守の祭等には青年男女も互に招き招かれもし、多少の弊はあるにせよ、兎に角交際は行はれ居ればなり、然らば問題の範圍は自ら如上の如く制限せらるべく、更に他の點より考察するに、世には往々男女交際の十分に行はれざるを以て、因を女子敎育の不足、特には其智的敎育の不備に歸するものあれど、そは敎育ある人に就きて言ふべき交際論にて、あらゆる社會を通じての議論にあらず、敎育なきものに在つては、智的同情といふとも、既に男子自身に缺け居るところ特更ら女子に就きて云爲すべきにあらず、故に若し智的同情を言ふときには、其交際論の意味する範圍は此方面よりも一層の制限を見ざるべか

らざるなり、更に男女交際の議論となる點如何と顧るに、一は交際より生ずる危險を避くると、他の一は交際より來る利益を得ることなるべきか、而して今前者に就いて考へんに、危險の生ずる恐あるは重に未婚者と未婚者との間に限り、其孰れかゞ既婚者なるときには先づ弊はなしとして可なるべく、從て危險といふ方より見ての男女交際論には更に未婚者といふ一の制約を加へざる可からざるなり、こゝに主として論ずる男女學生交際論は實に此範圍に在り、而して此論の提起せらるゝ以上は、男女交際は暗默の間に既に是として決せられ居るものなるべく、それをしも究めずして突如として此の論の現るべきにあらざればなり、然らば男女學生交際論は其可否の點に於て既に決せるものとして見んに、其處に又二ヶの問題は來るべし、曰く絶對的に利益あるか、曰く比較的に利益あるか、といふにそは勿論後者に屬す、故に男女學生交際には初より害を豫想せざるべからざるべく、而して最後の問題は如何にして其害を減じ如何にして其利を增さんかに存するなり

害を恐るとは露骨に言へば、貞操を汚すといふことならずや、更に言はゞ姙娠を恐るゝことならずや、然れども由來人間は皆情の動物なるに、特に青年時代は性慾に關する情尤も強く、之を滅ずるは難きところ、且つ此性慾を減ずることは、人類に取りて得策とすべきか、否らずとすべきか、又一ヶの問題なるべく、或る意味にて健全なる性慾は人類の繁榮を來すもの故、性慾は徒に殺すべからず、一時之を撓め置きて唯其力を暫く他に向くるを可とすと信ず、之には運動最も可し、空しく室内に在りて思慮に耽れば、妄想も從て生ずれど、去つて屋外に出て體軀を運動に勞せんか、頗る性を撓むるに力あるべし、之は生理的方面よりの工夫なるが、更に精神的方面に移らんに、先づ情の刺激余りに性慾を誘發する如き小説等を讀まざるを勉め、正しき書に向つて精神の集中を圖らんか、自ら他の劣情を惹かざるを得べく、好しや一心不亂とまでは至らずとも、多少其害に捕へらるゝの境に至れば可なり、今の

書生の、左まで勉强もせず、又運動もせずして、或は胃を病み室内に悠遊し居るが如きもの、何時しか妄想の惡しき方に進むものなり

次には浮浪少年の處分なり、今や惡書生の都下に浪遊するもの幾何なるかを知らず、此等を警察にて嚴に取締り、或は有志家の努力に由りて改善せんことも禍根を塞ぐ一方法なるべし

斯く一面に注意すると同時に、劣情を誘起することなかるべき、安全なる方法を撰びて男女學生に交際の機會を與ふるを要す、之には前と同じく運動を最良案として勸むるものなり、蓋し對手として互に樂まんには運動に優りて罪なきものあらざるべく、此機會を多く作りて男女相集りて運動せしめんこと最も望ましきことなり、勿論運動といへばとて、彼のゲームの如き類を指し、散歩を意味するに非ず、散歩とて一概に排するにはあらざるも、そは多人數相集ふならばまだしもなれ、一人々々にて相携ふは一考すべきことなるべし、彼の西洋とても、特別の事情ありて許さるゝ中ならば知らず、兩々相携へて散歩するが如きは未婚者には無きことなり、そを西洋とし言へば極端に自由なるが如きの感をなすものあれど、事實に於ては案外六かしきものなりとす、

更に進んで兩學生が接近して、而して弊の憂ふべきものなからしめんとするには、女子の敎育を高むること其一手段なるべし、由來今日の婦人なるもの男子の談がたきとなるものにあらず、語りても更に通ぜしむること能はず、今少し精神上の友たり得る敎育を與ふる必要あるべし、今男女相會して交際すといふ、交際して何をかする、固より下らぬ事なるべし、美術や文學や、こは男子に取りても難かるべきも、女子に取りては更に一層なりとす、總じて女子には智的同情なく、男子の經營するところ、その何をなしつゝありやを知る能はず、之れ甚だ憾とするところなりとは人の普くいふところなるが、こは固より理あり、之と同時に予は更に情的同情までも無しと信ずるものなり、感情は誰にもあるべし、然かも智に高下の差あるが如く、

情にも亦教育の有無如何によりて差異の生ずるを如何せん、教育あるものゝ同情は細かにして高し、教育なきものゝ同情は粗くして卑し、今彼等を評して智的同情は缺くるも情的同情は存すと稱するものあるも、予は後者までも併せて無しと信ずるもの、勿論生理的同情や家庭的同情はあるなるべし、而かも予の所謂細かなる同情に至りては全く缺け居るを疑はざるなり、故に眞に能く男女交際の眞諦、即ち精神上の交際を成立せしめんと欲せば、是非とも女子の智育情育を高めざるべからざるなり、說き來つて此の如くなれば、交際の爲し得ざる、罪は獨り女子の上に歸するの觀あるが、事實は然らず、男子にも亦幾多の要求なかるべからず、抑も青年男子は何を目的に交際を爲し居るかといふに、忌憚なくいはゞ、究竟最後は精神的にあらずして身體的にあらずやと思はる、實際は然らずとするも、思想上何となく身體的に女子を考へて交際するにて、更に其上に精神的よりも交際を求むといふは稍善き部分に屬するものなり、こは極めて不可なり、今一層女子を高きものと見、精神的に同等のものと觀て、然る後交際を始めざるべからず、之を見ること翫弄物の如く、唯交るを以て面白しとすべきにあらず、又其交際は學生期間に限らず、一生を通じて保續すべき意味のものなるべきに、今の彼等の考ふるところ、交際といふも單に學生時代と限り餘は如何にてもといふが如きもの多きが如く、從つて其の交際は極めて眞面目なるを得ざるなり、斯る侮蔑、斯かる翫弄は、婦人の方にても之迄の如く甘受し居るべからず、己れ輕んじて人又己れを輕んず、婦人は此際十分自重し行かざるべからざるなり、婦人にして自重の念あり、此處に始めて男子の劣情を防ぎ、完全なる交際をなし得べきなり

さはいへ交際は、事實に於て左まで多數の人となし得べきにあらず、音樂會や、教會やにて一寸相談るが如きは、そは交際といふべきにあらず、唯相會するのみ、唯相見るのみ、故に眞の交際なるものは極めて少數者の間に成立するものと思ふ、斯かる意味ならば家

庭に知人を集めて、一月に一回若くは二回、講話會などを催し、終りて茶話に快を取るも可ならずや、斯かることは啻に爲し得べきに止まらず又頗る興味あることなりと信ず、要するに社會も社會なれど、退いて家庭にて交際の機會を作ること可ならずとせんや、

更に他の方法は男女共學のことなりとす、男女共學すれば、自然交際も出來ることにて、實際異性が幼時より知り合ふは可なるべしと思はる、即ち小學に在つては少くも尋常科にて共學を試むるが如き、恐らく男女孰れにも益あるべきなり、中學時代の共學は日本には未だ行はれず、又奬勵する要もあらざるべし、女子には別に高等女學校の設あればなり、進んで高等の學校に至れば、女子には之に相等する學校なき故、男子の學校に女子の入學を許す制度を設くべしと信ず、本來女子を以て高等教育を受け得ずとするは極めて根據なきことなりとす、婦人の頭腦の秀てたるは却て平凡の男子に優りて高等教育を受くるに堪え、中には大學に入りても中位以上に行くべき婦人もあるべきを、唯婦人なるが故を以て入學せしめざるなり、思ふに教育なるものは、男女によりて決して制限せらるべきものにあらず、人々によりて定めらるべきものなりと信ず、又實際人間の精神的所有物なるものは、人類即ち男女共同の遺産なる故、古人は之を男子のみに味はしめんとにはあらで廣く人類に殘さんとせしを、唯婦人のみが、人間製作物中の最も良き部分を味ふを許されずとは、餘りに人間の權利を蹂躙したるものにあらざらんや、

門戶一たび開かるれば、之に入るもの有るべきは當然なるも、今假に大學の門戶開かれて而も一女子の入學するものなしとせんも、女子も男子と同じく高等教育を受くるを得、大學にも入り得とせば、婦人の品位を高め、婦人の自信を强むる上に於て其効果如何ばかりぞ、即ちそは品位上の問題となり來るなり、昔西洋にては奴隷なるものありて、奴隷は如何に偉才あるも生涯奴隷の境界を脫する能はず、斯くて非常に彼等をして失望自棄せしめたるが、そは詮ずるところ奴隷とす

るには益都合よきこととなりしなるべし、女子が高等教育を受け得ざるは、恰も奴隷のそれと同じからずや、此點は是非とも打ち破りて女子を男子と同一視し、高等教育の門戸を開かざるべからず、斯かる曉に於て、始めて今日よりは一歩深く精神上に踏み入りたる男女交際を爲し得るに至ることとなるべし、

學生といふにも年齢あり、學校にも亦種類あり、一概には言ひ難し、例へば中學生と高等女學校生といふの關係もあらん、大學の學生と高等女學校以上の學生との關係もあらん、或は私立學校の生徒特に醫學校の生徒或は官立諸學校生徒等、學校の種類、性質等により學生の氣風も異なり、諸多の度合も生じ來らん、唯それ大學の學生などに至れば、現在の位置もあり、他日の希望もあり、從つて自重心あり、責任も感ぜられ、位置も省みられ、前途も想はるゝ故、無思慮のことは爲さゞるなり、夫の情死に痴名を謡はるゝものにも、醫學生、私立學生に多くして大學生には耳朶に觸るゝものなきにあらずや、之れ何に因るぞ、種々の點より考察し來つて自重心の確立するに至れば、男女學生の交際なるものも思ふよりも容易に果し得べしと信ず、即ち自重心を啓發することは實に交際上重んずべきことにて獨り女子に言ふのみならず、又男子に向つて痛告せざるを得ざるものなり、

男女學生交際論は現下教育界の一大問題也本誌は每號大方諸大家の高論を紹介し、教育家及學生諸君の參考に資す。

▲第二十年第九號（九月發行）	竹越與三郎氏
▲第二十年第十號（十月發行）	三宅雄次郎氏
▲第二十年第十一號（十一月發行二百號）	安部磯雄氏
▲第二十年第十二號（十二月發行）	村上專精氏
▲第二十一年第一號（一月發行）	下田歌子女史
▲同　上	海老名彈正氏
▲第二十一年第二號（二月發行）	登張竹風氏
▲第二十一年第三號（三月發行）	寺田勇吉氏
▲同　上	青柳有美氏
第二十一年第四號（四月發行陽春號）	浮田和民氏
▲同　上	鎌田榮吉氏
▲同　上	中島德藏氏
▲同　上	成瀨仁藏氏
▲同　上	井上哲次郎氏

右は既に掲載せり、本號の下田次郎氏が所論と併せ讀まば更に得る所多かるべしと信ず。尙次號には　建部遯吾氏、野口米次郎氏の意見掲載せらるべし。

悲觀樂觀に就て

三宅雄次郎

世に悲觀するものあり、樂觀するものあり、悲觀樂觀混淆するものあり、而して悲觀最も人の注目を引く。折角此世に生きつゝあるを生き甲斐なき樣に說くもの、人をして異樣に感ぜしむるは事の當然なり。悲觀の多寡は國により、人によるが大抵考ふると活動するとの比例に依るが如し。見よや尤も活動少くして割合に考へ勝なる印度にては悲觀的傾向多くして、之に反して最も活動するアングロサクソン種の英米に在りては、悲觀は全く東洋のとと定め置ける程にあらずや。人々新運命の開拓に務め、退いて冥想に耽る暇なければ、從つて悲觀に陷る憂もなからん。歐大陸は之に比し活動の少き方にて、從つて冥想より悲觀に陷るもの少からず。特に獨逸の如きは、分裂久しく、國家としての活躍を爲し難かりし爲、國民は外に向つて働くよりは寧ろ籠居潛思するに傾き、悲觀者を出せしと少しと爲さず。

斯くて生れたるショーペンハウエル、ハルトマン等の悲觀說が獨逸文學と共に英米に傳はれるや英國は久しき間の秩序あり、新奇の事物に動かさるゝこと少く、悲觀說は傳はるも、流行とまでには至らざりしも、米國にては働くものは非常に働き、突進することも遙に英人の上にも出づると同時、失敗も亦多く、機會の多き反面に於て生活難を感ぜざるを得ざるなり、ショーペンハウエルの說の何たるを究めず、其書の一部にも觸れざるものまで、之を口にするの有樣となり、國民の多くが悲觀に傾きしといふべからざるも、一時は悲觀といふか流行語なりしとして妨げなし。

啻に國民としてのみならず、之を個人に見るも、活動するよりも多く考ふるものは悲觀に傾き易く、特に少壯血氣の身にて一圖に深く考へ込み、全意識之が爲にアプソルブせらるゝ如きものに然るを見る。斯かる際には身體の不健康も伴ふものにて、そが確かに一原因を爲すことなるも、健康を傷はざるも動もすれば悲觀に陷ることあり。ショーペルハウエルの如き、ハル

トマンの如き、少時より大思想をと憧れしが、彼の如き學説を案出するには、頗る多大の思想を一方に注がざるべからず、斯くして自ら世界を描き出だし、移りて現在の世相に對す、何んぞ能くその我意に合するを見ん、宛かも自ら先づ堅く一個の主義を持して政界に出づるものが、多く其の亂離の樣に驚き且つ失望すると一般、早く思想を纒めて世は大概さるものなりと定むるに當り、之れに反する世相の續出するを見ては如何んぞ晏如として安んずるを得ん、特に况んや沈思の餘、身體の衰弱を誘起して、更に其衰弱より世の困難に對し得ざるに至るをや。

伊太利のレオパルヂの如きは眞に天才なり、幼少の時より優れたる詩を作れり、希臘語羅甸語にて作れるものは、其記名を欠かば何人の目にも最古の作と映じたりと言はるゝ程なりき而かも最も大なる悲觀に陷り、ショーペンハウエルと並び稱せられて、永く二大悲觀者の如く認めらるゝもの、餘りに一事に潛念したるに因るべく、更に身體の衰弱を招きたると、從つて家計の困難を來したるとが、遂に萬事に不快を感ぜしむるに至りしならん、唯死の際に至りて始めて悲觀が和ぎ來り、世間及び朋友を懐しく見たりしといふこと、今猶ほ奇とせらるゝなり。

されどライプニッツの如きあり、思想の雄大を以て鳴りつゝも、而かも亦樂觀者の巨擘を以て稱せられ、大に樂觀の説を唱へ、樂觀の書を著したるは何ぞといふに、之には多樣の事情あり、一を以て掩ふべきにあらざるも、氏は爾く腦力の發達し居るに比しては絶えず活世間に活動し、且つ思想の統一に熱心ならざりしなり。所論多趣に亘りそれ〲一家の見を示しゝに拘らず、而かも最も重なる哲學上の議論すら自ら統一したることなく、餘りに斷片的なる爲、後のそれを試むるものをして、幾多の困難を感ぜしめ居るなり。其一に偏せず、專らならざりしこと、凡てに手を觸れて特に大なる結果を見ざりし所ならんも、それだけ世に對する立脚地を誤解するに至らざりしなり。損益は兎まれとして、彼程の腦力を有しつゝ而かも悲觀に陷らざ

るを得しは、一に一事に潛念することなかりし彼の性質によるとならん、國も、人も、活動多くして冥想の暇なければ悲觀に陷るの少かるべきと以て推すべし。

　されど活動とて無限に續くものにあらず、種々の事情よりして止めざるべからざることあり、或は他の壓迫によりて伸ぶる能はざるあり、或は不幸の奇禍にて業務に從ふ能はざるあり、さらぬも齡傾きては壯時の如く働き得るものにあらず、又最も活動する國、最も活動する人に在りても、時として默ひて考ふといふ事あり、唯それ從來活動に慣れし民族に在つては哲學的冥想に陷るを得ず、ショーペンハウエルを口にするも、其思想を消化するが如きは極めて少し、之に代りて勢力を占め得たるは佛國寫實派の小說なり。その主とするところは人物事件を有るがまゝに現はすにはあれ、大概書くところは暗黑面にて、人間は斯くまで惡事を爲すものか、斯くまで悲境に陷るものかを、端的、眼前に映出し、斯かる社會の如何になるべきか、是にか非にかは一に讀者の推斷に委して顧みざる底のもの、社會は斯ゝるものなりけりと觀念するものに取りては蓋し好個の讀みものなるべし。

　相應に活動し、相應に財産を作り、相應に遊ぶを得るものは、唯世は斯かるものなり、別に何といふべきものにあらず、唯斯くして死し了るものなりと、斯くいふまでにて、敢て悲觀にもあらず、敢て樂觀にもあらず、時としては之を混視し、時としては孰れにも從はず、而かも此中、何處にか不足を覺え缺歉を感ずるもの少からざるは事實なるも、そは今の宗教にて如何とも爲し難きところ、彼等は之に拘らざるなり、實は之を通過し居るなり、儀式的に寺院に趣くことありとも、其胸裡には寧ろ前途全く不明なりとなし居るなり、唯世は斯かるものなりとして、別に大なる光明を認むるにあらず、活動力の強く意志の強きが爲に強て制して靜に終を待つといふまでの如し。此に類する狀態は我國にもありき、一休狂歌問答と稱する類も、多くは斯ゝる諦めの樣を言ひしものゝみ、「世の中は食ふてはこして寢て起きてさて其後は死ぬるばかりぞ」といふが

如きそれなり、唯それ諦めの中に一種の滑稽趣味を含み居り、世を茶にしたるところあるのみ、十返舍一九の辭世の如きも亦能く世を茶にしたるものなり、彼の寫實派及び其書を喜ぶものは斯かる茶にすといふ趣味を味ふに至らざるに似たり。由來日本を稱して滑稽文字に乏しとなすも、そが人生觀に現れ居る如きは聊か以て奇とすべきにあらずや

貴族院と政黨內閣

田中穗積

今期議會に入りて特に注目を値するは貴族院の態度なるべし、鐵道國有問題の如き、一たび政府案のまゝ衆議院を通過したるものが、貴族院にて非常なる修正を加へられ、三十二會社買收が十七會社買收となり、五ヶ年の買收期限が十ヶ年期限となれるが如き、衆議院通過案は殆んど根底よりして改正せられぬ、又一般人民に直接の利害關係を有する關稅問題の如きも、衆議院にて通過したるものを貴族院にて修正を加へたるが如く、貴族院の勢力や侮るべからず、動もすれば衆議院は其勢力下に壓迫せられんとするものゝ如し、玆に於てか或る論者の如きは說を爲して曰はく、政黨內閣を建設し、立憲政治の名實を擧げんとするには、斯かる現象は甚だ憂ふべく、元來貴族院は、衆議院にて議決せしものを大體に於て贊成するか、或は否決するかに止むべきものにして之を英國に徵するも、人民の利害に直接の關係ある豫算問題に關して、貴族院は唯贊否孰れかを決するに止まるのみ、斯くてぞ立憲政治の實は擧るべきを、我國の現況は全く此れに反せりと說くものあり、予も此の說に一應は理ありと信ず、衆議院は國民の選良を集めて、直接人民の利害を代表するもの、されば直接人民の利害に關する問題は、政治上の德義としても、貴族院は衆議院に讓步せざるべからずといふ、其處に聽くべきの條理はあり、されど孰れの國に於ても立法部に上下兩院の設けあるは抑も何の故ぞ、此れ即衆議院の突飛に流れ輕卒に走

るを止めん爲なり、衆議院は動もすれば急進に走り、貴族院は動もすれば保守に赴く、兩々相制して此處に一道の調和あり、始めて議會なるもの丶圓滿なる効果を擧ぐべしとせば、衆議院の議決を貴族院が修正するに何等の不可なきのみならず、之を批判し是正するこそ寧ろ兩院制の目的に合すべきなれ、故にバーデン、ツーテンバーグ、伊太利、瑞典等の小邦に於て下院は豫算問題に關して上院に比すれば優越なる權利若くは勢力を有するも、之に反して英佛及米の如きは、制度の上より兩院全く同一の權利を有す、我日本の如きも、既に第三議會に於ける陛下の詔敕によりて明なる如く、上下兩院豫算の議定に關して同一の權利を有するもの毫も怪むに足らず、既に理論上及實際上兩院設備の必要ある以上は、衆議院の議決を貴族院にて修正するを得べきは必然の道理にして、若し上院が勢力あるに於ては、到底憲政の眞を發揮し、それが有終の美を成す能はずといふが如きは、蓋し迂者の見なり、而して英國の實際に於て、上院は豫算問題に關し下院の議決を全體に於て否決するか可決するかの一方に止り、千八百六十九年、紙税に對する關税廢止の場合の如き、上院は下院の廢止せる紙税を復活せるが爲に、パーマーストンの如きは大に憤りしとありしと雖も、こは上院にさる權利なきに非ず、單に二百年來殆ど之を使用せざりしと云ふに止まり、斯かる事實を見て、直に英は云々なり故に我も云々といふに至ては輕薄も亦極まるものにて、先づ英國にて下院の議決を上院が修正せざるに至りたるは抑も何によるか、否下院が上院を制する傾きあるは如何なる原因に由れるかを究めざるべからず、予は此點に關して全く上下兩院の人物關係に職由すと信ずるものなり、即ち下院には常に多士濟々たるに反し、上院には人物比較的缺乏せるものあり、從つて人物多き下院は人物少き上院を壓し、そが既得の權利までも失はしめたるものなることは、直に歷史より知らるべく、十九世紀に於て有數の政治家、ピール、パーマーストン、ビーコンスフヰルド、グラッドストーン、ソールスベリー、更に遡つてはピットの如き、當時屈指

の人物は盡く下院を基礎としぬ、勿論ビーコンスフヰルドや、パーマーストンやソールスベリーの如き、爵位を受け上院にも列したれど、そは後年のことにて當初は孰れも下院を基礎として立たざるなし、然るに上院議員に至りては、皆先代の勳功によりて、爵位を有し財產を有し、位置を有す、斯くも順境に長ずるものには自から奮發心銷磨し、從つて人物の出づること少く遂に上院と下院とは人物の權衡を失するに至れるは免れざる勢にして、既に下院は人物の淵叢となれるに反し上院は人物甚だ乏しとせば、由來文明社會に於て優者の地位に立つものは智識ある人物にして、野蠻時代には腕力、文明時代には智力、これ爭はれぬ理數なるが故に、人物の有るところ勢力を見、然らざるところは既得の權利すら振ふ能はざるに至りたるは亦見易き理にあらずや、然るに飜て我國狀を顧みんに、議會開設以來年を重ぬる十有六、其間諸方面の進歩著しく、教育といへ軍事といへ、將た商工業といへ、普く人の認むるところなるが、獨り在野の政治家のみは之に伍するを得ず、往年の政客は頗る古武士の風あり、國家の爲には身命を犧牲とするの概あり、又比較的に新智識をも有したれども、其價値は年々歲々下落の一方にて、今日にては唯運動の結果に待ち、究竟、運動上手が議員となり得て其力量の如何は問はれざるに至りぬ、之を英佛其他諸國の議員と比較し來るに於ては遺憾ながら著しき徑庭ありと云はざるを得ず、然れども此の如き現象を呈するに至りたる所以のものは畢竟我國在野の政治家なるものが依然として政權に近くことなく、議員は國政に參與すといふ、其名は美しきも、唯政府より提出せられたる問題に對して贊否を表するに止まり、議會開設以來十六年間始終一貫して逆境に處し未だ順潮に向ふ能はざるに職由するものにして、政客の大部分は落魄して轗軻流離し、偶々手腕あるものは方向を轉して坐に運命を開拓し、或るものは實業界に入り或るものは獵官し得たる後は死守して動かず、斯くて殘るものは、一種の野心家一種の道樂家のみとなり其大部分は所謂運動屋なるものにて、勿論多數政客の

中には眞誠に國政の献替に當るに足る人もあるべきも、そは僅に小部分に限り、滔々たる大勢は年一年に政客の價値を下すに至れり、之れ即ち他の諸方面の進歩に比して政治界は寧ろ退歩を示したる所以にして、甚だ悲むべき現象ならずや、されど想へば過去十六年間全然逆境に立たざる可らざりしとすれば、之れ亦已むを得ざるべし、人の世に立ちて活動する、漸く三十年長くして四十年、而も其半は如上の如く逆境に處し未來は亦茫として光明を認めずとすれば、之に向ひて來るものゝ少く、才氣あるものは全く入らず、野心あるものは相次て遁走するは當然なり、故に予は此を時代の罪と云ふ、時代が議員の價値を落し議員たる職に人才を吸集せざるに由らずんばあらず、然るに轉じて貴族院を見るに、そは有爵議員、勅撰議員、多額納税議員即ち所謂る長者議員の三要素より成り、此中有爵議員は、父祖の勳功等により爵位を授けられ、位置、財産兩ら具有しをるものなり、大英傑の果してさる人々の中に存するや否やは知らざれども、我邦は近く三十年の昔大革命に會ひ、一地方の君主として權勢を專にしたるものが、忽ち四民平等の聲に呼び醒まされたるが爲めに、有爵議員にも炎々の活氣あり、特に貴族院の少壯議員にありては其多數は議院に椅子を占むるに先立ち、準備の爲に洋行したるものも少からず。次に勅撰議員は、深邃なる學識を有するもの、國家に功勞ありたるもの等にして、其中には大臣たりしもあり、次官たりしもあり、縣知事たりしもあり、有數の教育家たりしも實業家たりしもあり、稱して此を日本人才の淵叢といふも爭ひ難かるべし、最後に一部分を占むる長者議員は、いふは氣の毒なれど他の有爵議員若くは勅撰議員より見れば先づ殆ど眼中に無き有様、さはいへ退いて地方に在らんか、優に勢力の他に擢するものあり、啻に金力のみにあらず、識見に於ても、之を多數の衆議院議員と比較して毫も遜色なし、然るに此等長者議員が貴族院裡にありて重視せられざるに至つては、如何に貴族院が智識の府なるかを反映するものにあらずや、貴衆兩院議員の價値既に此の如し、然らば即文明社會の競爭

に於て最強の武器たる智識に於て優る所ある貴族院が衆議院を壓迫するは必然の勢にして、更に國家の利害より打算するも、智力秀づる貴族院が、智力に於て劣れる衆議院に支配せられざるは慥かに有益なるに相違なし、故に衆議院の勢力を伸長せんとせば先づ衆議員に人才を網羅せざるべからずと雖も、斯る希望は果して近き將來に於て達するを得べきか、過去十六年間逆境に逆境を重ね而して前途又容易に光明の認め難きに想到するに至ては予は所謂日暮れて途遠き感を抱くものなり、思ふに從來政黨の首領たりし、板垣伯といへ、大隈伯といへ、伊藤侯西園寺侯といへ、將た又西郷侯や品川子と云へ、政黨を組織するに當りて唯思を衆議院にのみ凝らして、貴族院には及ばず、智力の劣れる衆議院に思を凝らして智力の優れる貴族院に及ばず、何ぞ其處に政黨内閣の成立を全うするを得ん、逆境に立つも亦宜ならずや、見よ伊藤侯は明治三十四年、政友會を基礎として衆議院に過半數の議員を有しながら、議一たび豫算案に及べば忽ち大反抗を貴族院より受けて困却したるにあらずや、更に大隈伯を見よ、二十年來一日の如く、野に在りて、僅かに一たび政權を握れりと見る間に脆くも五六ヶ月にして倒れ了りぬ、爾後今日まで復び政權に近づくを得ず、將來にも亦望なしといふに至りては、甚だ悲むべしと雖も此の如きは、要するに衆議院にのみ重きを置き、貴族院を閑却したること其主因なるべく、伊藤侯の如き、大隈伯の如き、政黨を組織する初に當りて能く注意を貴族院に拂ひたらんには、遠く七八年の過去に於て鞏固なる政黨内閣の基礎を作るを得たる明かなるも、惜いかな大隈伯伊藤侯の智を以てして猶ほ玆に思ひ至らざりしは千歲の恨事と云ふべく、又更に西園寺侯が今現に政黨の首領として朝に立てるも、侯の地位名望を以てして、一たび衆議院を通過し得たる議案が、殆んど貴族院にて骨拔きにせられ、此骨拔きの議案をも是認して、更に衆議院に贊成を強ふべく餘儀なくせられたるにあらずや、こは最々奇なる現象にして、英國の如き憲政の發達せる國にありては見ること能はざる所にして西園寺侯が力

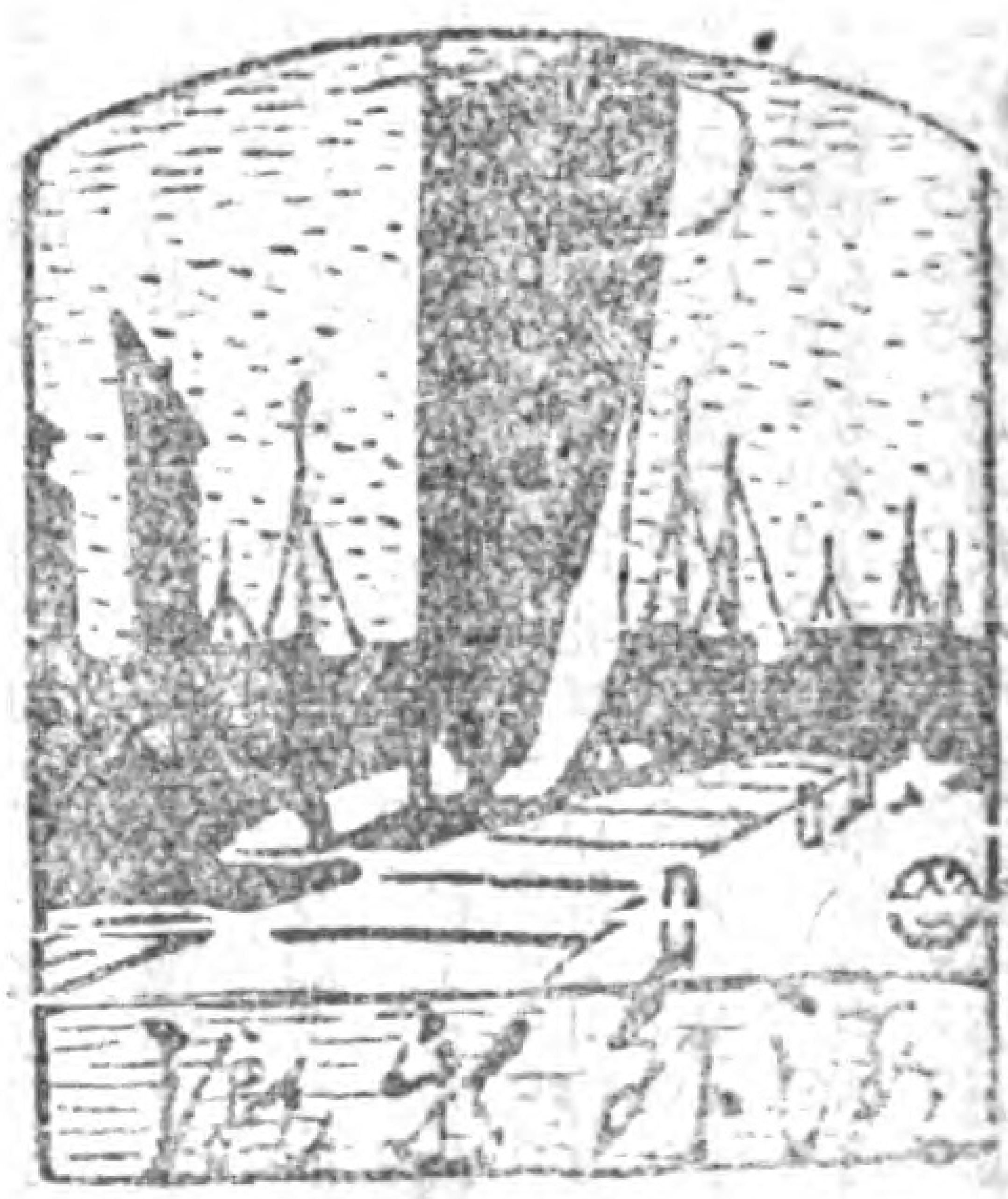
能く貴族を動かすに足らざるを示すものにあらずして何ぞ、予は望む西園寺侯は、此新なる苦き經驗によりて手を貴族院に伸ばさんことを、然れども若し不幸にして侯が此用意を怠りたりとせんか、早晩貴族院に逼迫せられて意外の難境に陷るは明かにして、如何に下院に勢力ありとはいへ、必ならずも去らざるべからざる運命に接せん、故に今日の急務は貴族院議員を網羅して一大政黨を作るにありて、此事成らざる限りは責任內閣も議院政治も先づ空望なるべく、而も今日迄の狀況にては甚だ望み薄く、大隈伯の如き老來意氣益々旺盛なるものあるが如きも、如何にせん既に頹齡に屬す、能く貴族院を籠罩して一黨を組織し得べき丈の餘命を有するや否や、西園寺侯も亦能く這般の勇氣あるや否や頗る疑はし、而して大隈伯、西園寺侯等によりて貴族院と衆議院とを結合して一の黨派を樹立し難しとすれば、先以て近き將來政黨內閣の樹立は望なしと思はざるを得ず、更らに觀察點を轉じて若し此を今日の儘に放任せば其結果は如何なるべき乎、予の思考する所にては此の場合に於て早晩貴族院內自ら黨派の旗幟分明となり、衆議院は正に貴族院の附庸たらんのみ、其結果內閣を組織するものは必ず貴族院の首領たるべく、閣班の一二位、或は衆議院に與へらるゝとありとせんも、大部分は必ず貴族院の占有に屬せん、故任の極は是のみ、英國の如く下院の首領グラッドストーンやカメルバーナンが內閣を組織するが如きは、容易に日本には望まれずと信ず。

而して政黨內閣の將來を觀測するに當て、尙ほ茲に一事の考量に加へざるべからざるものあり、軍人勢力の強大之なり、予は貴族院は人才の淵叢、先づ內閣を占むるものは之ならんと言ひたるが、軍人の勢力一方に強大なる以上は、之さへも近くは覺束なかるべしと信す、軍人勢力の強大今日あるを致せるは、言ふまでもなく千軍萬馬の場に馳騁し、身命を捧げて軍國の爲に盡せるにあるべく、こは別に怪むを要せず、戰勝の軍人が勢威を振ひしことは、遠く羅馬の古より今日にまで毫も異るとなし、加之陸海軍には一般に人才の集れ

るを見る、想ふに明治の初年に外より耐ゆべからざる凌辱を受け、之を一掃するに國家の武力を强大にせざるべからざる必要に迫り、最も力をそれに集中するに至り、勢の然らしむるところ、才力あるものは競ひて陸海軍に集る、斯くて國力稍や强きを加ふるや、次て支那より絶えず脅迫を受け、國民は軍備の爲に重税を拂ひ、政府も孜々經營するところありて軍事上には驚くべき進歩を致せり、斯くて日清戰爭には全勝を贏ち得たるも、端なく三國干渉の爲め遼東を奪還せられ、更に支那に優れる强大なる露國の勢力に壓迫せられ、此れと拮抗するが爲めに、爾來心を潜めて、陸海軍備に非常の勢力を竭盡したり、これいやが上にも人才を陸海軍に集めたる所以、要求の有るところに人才の集中せるは論なき所にして、如何に人物の養成に努めたるかを見るに、獨逸に於ける我陸軍の留學生は約十數人に達し、英にも佛にも亦その多くを見る、獨逸には、哲學、文學、法律政治、經濟等多くの我國留學生あるも、能く專門別にして、一科十人或は二十人の數を有するものなし、斯くも陸軍に於ては多數俊秀の士を送りたる爲、今日軍人部内樞要の位置に立てるものにて、一たび歐米の地を踏まざるものなく、語學の如き、能く學者と稱せらるゝものにて、二ヶ國以上に精通するは乏しきに拘はらず、軍人内には敢て此を珍となさず、即ち此の如く學問才識ある士が、極力其職務に盡すことゝて、假令、戰爭なしとするも勢力の他を抽くは當然なるに、更に百戰百勝の功あるをや、今は如何に言ふともフロッコート黨はサーザル黨を壓する能はず、軍人が政治に容喙するは少くも十年以内は免れざるべく、或はそれ以上に及ぶやも知れず、これ軍人の罪か、然らずこれ社會の罪か、然らず、幾度か反覆する如く、社會の競爭は智力にあり、智力のあるところには勢力あり、已むを得ざるのみ、然れども平和にして今後二十年間持續するものとせよ、自然のまゝに、軍人は政治に容喙せざるに至るべし、蓋し軍人は一朝有事の日國家の干城たるも平和の際に於ては殆んど其必要なく從て平和にして繼續すれば軍人の勢力は

自から滅し、始めてフロックコート黨の勢力を増すべきなり、故に若し不幸、平和にして屢々攪亂せられんか、軍人の喙を政治に容るゝ期間は長かるべし、然らざる限りは勢力は早晩政治家の手に歸すべく、其時に當つて兩院何れか先づ政權に近づくかといはんに、今日の狀態にして左までの變化なき限りは、言ふまでもなく上院は其最先位に立つべしと信ず。

次號の本欄には
上田萬年氏
河津暹氏
の論文必ず掲載せらるべく、其他例によつて諸大家に寄稿を約し置けり



露國極東の干城

（ノーオエ　ウレミヤ所載）

露國著名の評論家メニシコフ氏は二月二十日のノーオエ　ウレミヤ紙上に「極東の番兵」と題して新任極東軍總司令官グロデコフ將軍を送る論文を掲げたるが露國の軍人社會に對して容赦なく評隲を爲すと共に極東軍の總司令官に對する希望を論述したるものにして有力なる露國政治家の意見として大に注意すべき者あり

極東に於ける露國無能の罪過を修補す可き重任を託せられたるグロデコフ將軍の赴任に臨て吾人は一言の送辭を述べざる可らず同將軍の使命は甚だ重大困難なる使命にて寧ろ氣の毒に堪へざる任命なり獨逸の俚諺に一人水に石を投ずれば十人の智者も之を引き出さずといへる言あるが極東に於ては豈只一人が一箇の石を暗夜の如き眞黑なる太平洋の海底に

投じたるのみならんや偉大なる艦隊を海底に沒すると共に昔時は威望ありたるも今は光榮を滅失せる露國の劍たる我が千苦の干城をも海底の藻となしたるに非ずや有を無に歸するは如何に至難なるか羅馬人の言へる如く諸神の威力を以てするも是を爲すは難し

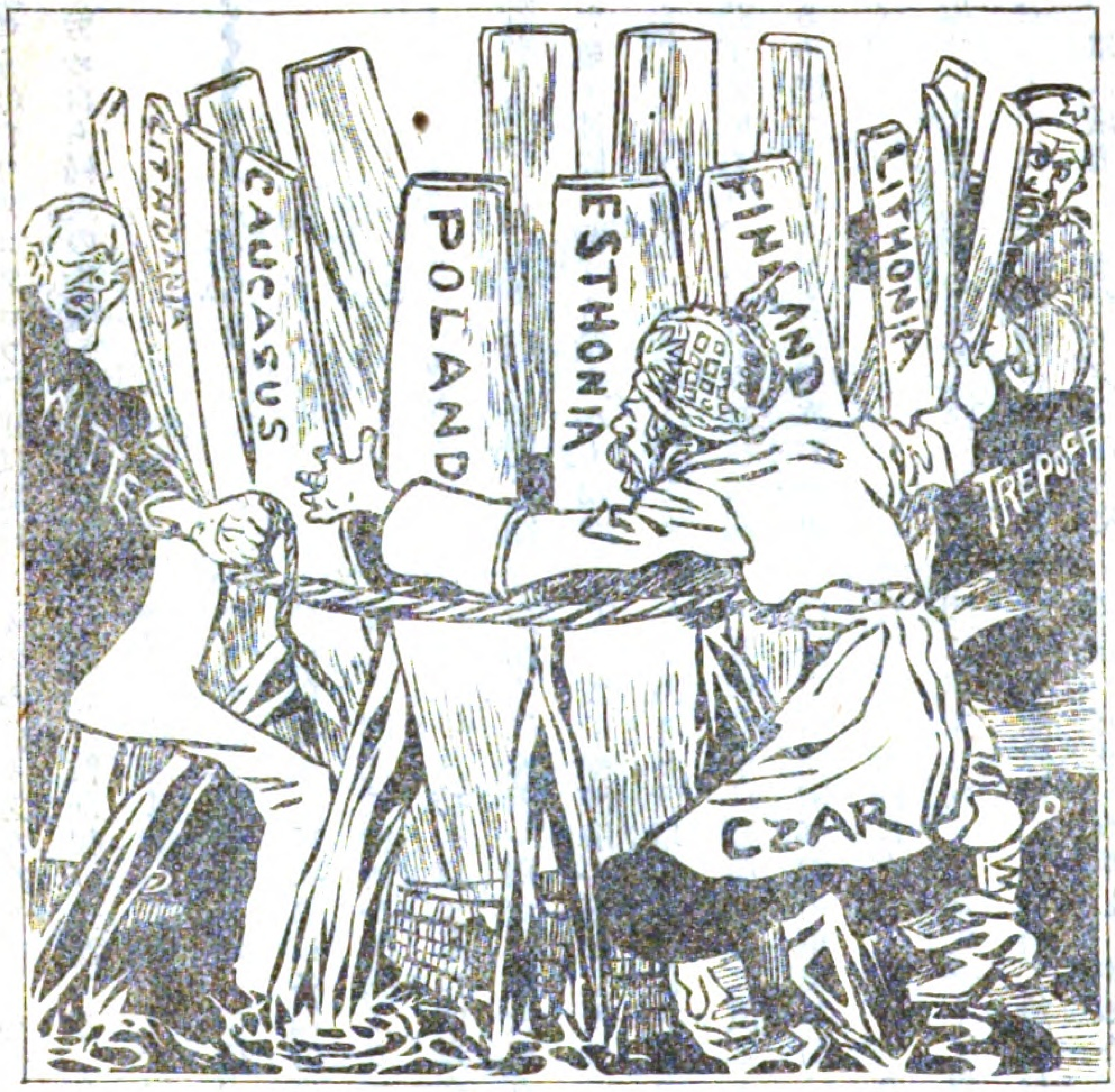
クロデコフ將軍は如何に天才に富み經驗ある將軍にせよ露國は決して過分の希望を將軍に屬せざる可し吾人はクロデコフ將軍の前任者に對して過分の希望を屬したるが爲に却て失望を招きたり前代未聞の我が國辱は吾人に敎ふるに謙遜なる可きを以てせり威嚇せられたる吾人は可能と信ずる希望を縮少せざるを得ざるに至れり故に吾人はクロデコフ將軍に對しても敢て過分の望みを屬せざる可し然し若し同將軍は萬難を排しても困憊したる露國の消滅せんとする國威の一部なりとも恢復するを得ば祖國は將軍の功を忘れず是を永久に感謝す可し

我が言語に絕する程に著名なる極東出征の諸提督、總督、司令官、守備將、總司令官等海陸の指揮官は平然として幸福に歸還し既に到着しつゝあり彼等の或者は東京に於て城下の盟を爲さしめて凱旋せんと約したりしが彼等は此事を爲す代に日本より我が全軍俘虜となりて歸還せり—全軍悉く敵の仁惠を依賴して降伏するといふ如きは我が祖國の歷史に絕えて例類なき事柄なり老將軍等は必ずしも皆卑怯者に非ざる可きも彼等の彼得堡に歸り來る樣は恰も竊盜にても爲したる者の歸來の如き樣なり彼等が元帥となり遼陽伯爵となり關東侯爵或に滿洲侯爵となりて名譽の負傷と月桂冠を身に付けて凱旋する代りに平凡なるクロパトキン、リネウイチ君として歸り來れり彼等の胸に輝く十字章と勳章とは今や寧ろ奇怪の感を惹起さしむるに過ぎず

敗將が現役の職に在るは我が一般將校の徳風を破壞するの甚だしき者ならざるを得ず若し戰場の敗北は恥辱に非ずとせられ始終の敗退が勝利同樣に視做されたらんには如何にして戰征を敎へ如何にして祖國の爲に忠死する義務と能力との宗敎を養ふ可きか我が軍の戰敗は是よりも更に一層恐る可き道德上の侮辱を招致せり即ち其結果として敵に後ろを見するを得べしといふ思念と勇氣を失ふも不名譽に非ずといふ思念を懷かしむるに至れり戰場に未だ敗を取らざりし我が軍の精英なる一部の將校は敗北、投降、軍旗喪失、兵器要塞の遺棄並に我が軍は敵軍よりも不良なり彼に敵對するを得ずとの滅亡的思想の感化に對して宜しく是を防壓せざる可らず斯の如き畏怖心と自ら侮る心と勝利の確信なき心は一箇人に取りても國民に取りても最も恐る可き者なり是れ實に死の豫言者なり全露國の精英なる軍隊は宜しく斯の如き惡感化と戰はざる可らず是れ實に全露國に通じ特に極東に對して必要とする戰鬪なり

玆に最も明確にせざる可らざる事實あり即ち今回の日露の大戰爭は其實只これ中止せられたるのみにて決して終了せられたる者に非ざる事これなり俘虜より歸還せる者も敗北せる軍隊より歸り來れる者も彼等が一般に感じ居る所に依れば三五年乃至七年を經過せば再び戰爭起るに相違なく到底是れ避く可らざる者なる事を確信せざるは無し戰爭は再び起る可し最初は是れが好個の誘因たる可き淸國の方面より起る可し然し一層

確かなるは彼れ自身よりする誘因にて日本は今僅に外征の叙事詩の發端に在るのみにて過去十年の間に斯くも光榮に淸露の兩大帝國を破りたる日本は如何で僅々臺灣關東と樺太の一部を得たる位の事にて滿足す可きや征討的なる行軍を始めたる勇武なる國民(日本)は其力の有らん限りの事を爲さゞる間は決して中途に止る事なかる可し日本は恰も奈翁時代の佛國と同樣に必ず其勝利を確實にして何等かの偉大なる企圖を擴張し是を完成せん事を期するに相違なし戰爭終了を告ぐるや否や日本の兵力を莫大なる增加即ち軍費の歲計と陸軍は八割の擴張をせられんとする飛報は來れり然るに如何なる國も日本を脅す國なかる可きを以て日本の新なる軍備擴張は是れ實に國防の要求に出てし者に非ずして進擊の爲めなる事明かなり其直接なる目的をいへば敵が未だ伏し倒れて起つを得ざる中に又列國の事情が日本の爲に然かく好都合なる中に敵に對して更に一大打擊を加へんとする者に外ならず



RUSSIAN COLLAPSE.
"Hold fast or the cursed thing will fall to pieces!"
—*Kladderadatsch* (Berlin).

且それ凡そ事の成功程よく友誼を牽引する者なきは明かなる事なるを以て喧しき戰捷の呼聲は唯り日英同盟を强固ならしむるのみならず更に日獨協商の觀念さへも喚起せらるゝに至れり我が外交官が位階勳章にありつかん事を想像し居る間に日本と獨逸とは歐亞の兩戰捷國として互に露國の上に握手せんとせり我が兩隣邦―日出國と日沒國とは西東に在て我を覬覦せり若しそれ是等の諸事が斯くも可能的なりとせば極東軍の意義とクロデコフ將軍が完成を託せられたる其功とは大なる者と云はざる可からず彼は敵に粉碎せられたる兵力を恢復し其勇氣精神を復興せざる可らず是れクロデコフ將軍の大なる使命なり

今や耻辱なる敗戰の根本原因は即ち我が軍の不良なりしが爲めなりし事は甚だ明瞭になれり願くは隣國を欺く手段なりとの口實の許に吾人は自ら欺く事をせざる可し我が軍の不良なりし事は唯り軍事新聞と通信員と之を書するのみなら

ず全世界は此事を認むるなり我が軍と日本軍とを比較すれば我の缺點は日本軍に比して武士的性質の尠なき事なり總司令官を始めとして全軍悉く敵よりも武士的性質の乏しき事暴露せられたりクロデコフ將軍は特に極東軍に對して此武士的精神の修養を努め自ら極東の干城を以て任ぜざる可らず

日本と清韓

アーチバルド・コルクハウン

アーチバルド・コルクハウンは支那通を以つて知らる、夙に清國に關する多くの著述あるのみならず、又た屢々清國に關する論文をも物せり、頃日又た倫敦モーニング・ポスト紙上に『大國民の醒覺』と題する論文を掲げ、蒙古民族の將來に就き論ずる所あり、但だ日本及び韓國に就きて論ずる邊り、肯綮に中らざるの憾なきに非ざるも、亦た一說として聽くべきの値なしとせず、曰く、

吾人の觀る所を以てすれば、近かく清國に生ぜし幾多の改革變化の中、特に最も重要にして且つ最も汎く及達せるものは、交通機關の改良是なり。而も吾人の玆に交通機關といふは、單に鐵道——唯だ不完全なる交通機關を爲すに過ぎざる鐵道——のみを指して謂ふに非ずして、寧ろ郵便電信事務の發達及び出版物の普及を意味するなり。而して郵便電信事務の發達は、英人の事業として見るべく、出版物の普及は日本人の盡力に負ふ所多かりしものなるが、此の二つの發達が政治上及び教育上に及ぼせし影響の如何に大なるやは、當時に於ける孤立の狀態を記憶せる人々のみ能く之を察知するを得べし。當時清國の各地方は全然孤立の狀態を成し、彼此相ひ交通すること殆ど絕無といふも不可なかりしが、今や當時の狀態は總べて改まり、書翰、書籍、新聞、雜誌は國內僻陬の地方にまで遍く配達せらるゝを得、且つ現に配達せられつゝあるに因り、必然の結果として次第に各地方の間に蟠まりし人々の境界を打破し、更に眞個の國民的精神を涵養するなるべし。

日本の成功を以て單に西洋文明の制度を採用せるに因るとなし、却て成功の眞原因が爲せし國民固有の性能あるを看過せしは、從來日本に對して幾多の誤解を來せし所以にして、又た日本を模範とせし者の數々失錯を招きし所以なり、日本人の忠君愛國の誠心に富めると、順從にして上長の命令に遵服するに慣るゝと、封建武士の階級存在せるとは、日本に於ける國家再造の事業を助けて大に効ありし所、而して日本の大成功は主として玆に存すと爲すべきに、清國には此等必要なる性能の其國民間に存するなく、却て全く反對なる勢力の存在するあり、何ぞや、腐敗せる官廳政治の下に最も放縱なる民主主義の成立せること是なり。故に清國の官廳を改革し、腐敗を一掃し、施政を純潔ならしめんか、乃ち其處に民主主義の殘存するを見るべく、他日國家再造の機會到るの時、民主主義を叫ぶ聲の他を抽んでて一層高きを聞くなるべく、而して此時に當りて運命を支配するの手は、博識溫雅なる北京廷臣にあらず、又た諸

開港場に於ける經驗ある富商にもあらず、即ち頑强執拗なる一般人民にあるなるべし。

今や清國を通じて或る感情の一般に長じつゝあるは疑ふべからざる所而して斯かる感情の一般に長じつゝあるは、決して當時に於けるが如く民心挑發を目的として發せし勅諭の結果に非ざれば、又た日本人の爲せる蒙古人種統一の宣言に歸すべくもあらず、將又た往時に見たりしが如く全然國外の事情に通ぜざるに因るにも非ざれば、或る恐慌的畏怖心よりするにもあらず、蓋し清國人が海外の事情に通曉せる今日の如きは未だ嘗て有らざりし所にして、清國人の感情を察知するに易きこと今日の如きは亦た未だ嘗て有らざりし所なればなり。即ち此かる結果の由りて生ぜしは、一には清國人が、新精神の發生せると共に當時に於ける自己の無智蒙昧なりしを省察せしに因り、又た一方には如何なる高價を拂ふとも必ず外國の干渉より脱却せんとの決心を生ぜしに因る。現に日本か清國に對して周密愼重なる政策を施こしつゝあるに拘はらず、清國は依然外國を以て日本を目し、其の清國の爲めに露國と開戰せしに對して曾て一言の謝辭を陳べたりしことなく、又た何等感謝の意を表したりしことなきは何人も知る所、伊藤侯の如き周愼なる政治家さへ小村大使が日本の清國の爲めに盡くせし功勞に就きて清廷より何等の得る所無かりしを云々したり。實に近く締結されし日清協約に就きて眞の利益を得たる者は即ち北京朝廷にして、該協約の結果、滿洲は商業の爲めに開放されたりしも、其の世界商業と外人移住の爲めに開放されたるは、占領の實權を握りし日本に依りてに非ずして、清國彼れ自身に依りてなり。要するに清國は、其の先進國たる日本が西洋文明國の實力的影響を受くること無くして巧みに能く其の發達を遂げたる如く、己れも亦た日本の優越的勢力を利用しつゝ自己の獨立的精神を涵養せんことを計れり。



JUMPING ON YOUR UNCLE SAMUEL.
A very popular game in China just now.
—Morgan in the Philadelphia *Inquirer*.

今ま若し清國人の實際に醒覺せることと絕大なる自動的能力を有せることを確知せんと欲するならば、近來日本の清國に對する態度の專ら謹慎的且つ宥和的にして、其の韓國に對すると全然反對なるに注視すべきを要す。日本の其隣大國に對して親善なる關係を維がんとするは、全蒙古種族を統合して自ら其の覇權を握らんとするにも因るべしとはいへ、清國との談判を開始するに方り其の露國に對して得たる勝利の結果を全然遺棄したるは、清國の將來を察するに就き非常に趣味ある徵候として目せざるを得ず、何となれば今日の清國は既に千八百九十五年（日清戰役の當時を指す）の清國に非ずして、日本が露國と連戰して連勝を得たるの後、再び此の打ち勝ち難き大勢力（清國を指す）の前に叩頭したるは掩ふべからざるの事實なればなり、而して日本內閣、即ち世界史上に於て最も光榮ある戰勝を收めたる日本內閣は、實に平和の克復されし後に至りて更迭し、日本國民に固有なる剛毅と沈着とを以て講和條件を承認したりしとはいへ、其條件の日本に不利益なりしは彼等の決して忘れざる所なるべし。

日本の次いで爲さんとする事業は、韓國をして英國の埃及に於けると同じからしめんとすることにて、日本現代の最大政治家たる伊藤侯は、統監なる名の下に韓國に行きたりしが、實は韓國の統治者たると同じき權力を有せり、但だ東洋人の通性たる他に對し慇懃なると體面を重んずるとによりて、能ふべき丈け眞事實を掩はんとし、乃ち嚴恐の府たる韓廷と不能力なる皇帝とを存して依然虛位を擁せしめたるも、而も韓人は能く此の眞事實を曉察せり。由來韓人は溫和從順なる人民にして、其の優美なる體格と容貌とは內部の精神と全く副はず、故に若し日本人にして敢て彼等を刺戟挑發し若くは虐遇壓迫する如きことあらざる以上は、自ら好みて日本人を困却せしむる如きこと無かるべきなり。而して伊藤統監は此かる傾向の韓人間に存せるを察したるよりして、韓人に對しては特に親切と謹愼を旨とすべきことを命じたりき。或る外國觀察者の中には韓國に於ける日本の行動に就きて甚だ有利ならざる解釋を爲す者あり、日本人の果して韓國に成功すべき資格を有するやに就きて多少疑を挾むの態あれども、こは寧ろ大なる誤想たるを免れず、日本人の能く此かる資格を有せるは、其の臺灣に於ける先例に徵して知るべし。日本人の臺灣に於ける統治は、其の初めに當りて動もすれば成功を期し難きの觀あり、特に該島は西班牙人、葡萄牙人、清國人の相ひ接ぎて交る々々統治を誤まりし處にして、常に惡漢の巢窟となり蠻人の逃避所となり、良好なる治績を舉げんことは頗る困難事たりしに拘らず、六年の星霜を經る間に能く秩序を立て、治安を保ち、寬猛併せ施し、恩威駢び加へて遂に全島を平和靜謐と化せしめたるのみならず、更に經濟的繁榮を加へしむるに至れり。吾人は此に徵して、日本が韓國に於ても亦た臺灣に於けりしと同一の成功を舉げ、且つ滿洲に得たる租借年限の經過し若くは日英同盟條約の消滅するに先ちて能く滿洲に於ける日本の利益を發達せしむべきことを信ずるなり。

要するに日本は自己の利益よりして清國が西洋列國の餌食と爲らざら

んことを望み、同時に又た自己の利益を增進し且つ自己の地位を鞏固ならしむるまでは、清國の餘まりに速く醒覺し餘りに速かに發達すること無きを望むなるべし

モーレーの讀書觀

一日に一時間半づゝ著名なる良書を讀めとはジョン・モーレーが「クリチック」誌上にて述べたる處なり、氏は更に語を續ぎて曰く、其の讀書は小說なる可らず、唯だ普通の文學書にして、世には名のみ知られて、內容を知られざるものなるべく、之れを讀了せる結果は著るしきものあるべし。

之に就いてある者は云ふべし、一日に一時間半の讀書は普通の職務ある人にあつて殆ど六づかしき期待ならんと、されど斯く云ふ人あらば、其の人こそ恐らく平生最も時間を空費しつゝある人なるべし、よし人にして一時半の讀書時間を得ずとするか、去らば三十分にてもよし、人は一時間半に於て、パークの歴史五十頁より二十頁まで讀み得べく、或はウォルズウォルスの傑作の一つを讀み得べく、或は飜譯にても可なり、イリヤットの三分の一を讀み得べし、



JUSTICE—"I shall strip the mask from this fiend and reveal his identity,"
—Morris in the Spokane *Spokesman-Review*.

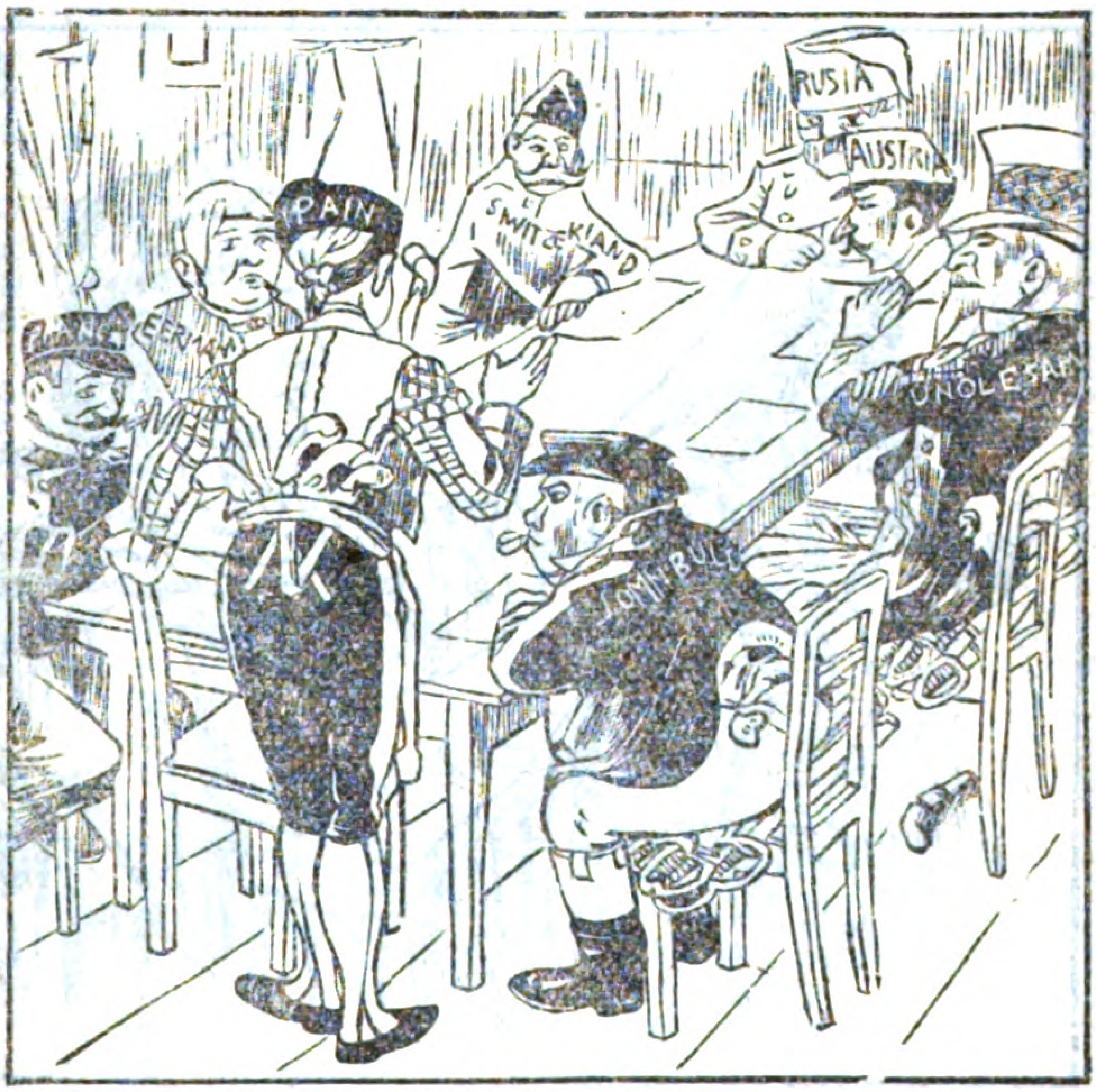
人は一時間半に讀み得べき處の分量を測定せよ、しかして三百六十五を以て三十分を倍算せよ、さらば人は一年の終りに於て、いかに貴重なる價値を贏し得たるべきか、人は之によりて如何なる幸福、如何なる忍耐、而して如何なる智識を其一生に對して與へられたるべきか。

ある書籍を所有するとは、確かに極めて必要なるべきとなり、予は若年の間政治上の演說の爲、或は上中流社會の間に社交をなさんが爲に、洽れく英國を巡遊したるとあり、其間丁寧に予を款待し呉れたる可成りの紳士の家庭にて、其の書棚を見る毎に、予は其の極端なる虛飾に絶えず驚かされざるを得ざりき、人は沙翁、ミルトン、ベーコン、ロック、ベ

ーク等に就きて口にする處多けれど、如此絶えず唇頭に上る文豪の著書の、普通其家に所造せらるゝものは幾何かあるべき、恐らく其藏書は予等の期待する四分の一にすら滿たざるべきや必せるなり。

詩歌に對する趣味は何人にも自由に與へられざれども詩歌を喜ばず、詩歌によりて感興を動かされず、慰藉を與へられず、興憤されざる人も、之によりて趣味の生活に導かるゝとを得べし、予は人の詩歌を讀まんとするや、先づ其の詩人を見て、其の順序を選擇せんことを望む、然れども誰人をも除外せんとにはあらず、若し予にして如何なる詩歌より始むべきやとならば第一にバイロンを可とすべし、バイロンは素より最大なる詩人と云ふべき部類にはあらざりしならんも、其の勇敢にして精力あり、歴史の意味を解するに、總て其僞善と形式とを憎むこと太だしかりき、去れば渠れは十九世紀の初めに於て、歐洲大陸に於ける、民主政治を鼓吹すべき、非常なる勢力の大中心となれることあり、民主政治にして其の讀書力を腐め、今日の事實、必用、要求より離れて、詩歌の上に其鼓吹を委ぬることあらば、バイロンは再び舊日の勢力に立歸ることを得べきなり。

（日本人）



THE MOROCCO CONFERENCE.
Passing the ordinance against smuggling weapons into Africa.
—*Kladderadatsch* (Berlin)

獨逸小説に於ける基督

「リテラリー、ダイジエスト」

ホーリー、ランドなる一部の小説、こは今より四年前に、ヨールン、ウールの一著作、忽ち名聲を世に知られたる、前の牧師フレンセン氏の著なるが、當代獨逸に於ける重なる神學的感想を傳ふるものとして稱せられ、其書一度店頭に現るゝや、僅々數閲月、既に一萬部の上を賣れり、されど其注意を引ける此の如きは文學的方面にはあらずして實にその下に横はれる神學に存す、それは宗教的不安の狀態にある現代に、多くの根本的神學上の觀念を形成した

るものなり、その最も興味ある點は、氏が自ら稱してハルナツク、ホルツマン、ロウセツト諸氏の如き各大學の代表的人物の研究に基けりとせるクリストの描寫に在りとす氏は稱して此救世主の傳記は獨逸革新の基礎なりとせり、

氏は此短篇を先づクリスト時代までの人類の歷史的發達の記述より始めぬ、曰く、人類は徐々に暗黒と荒漠とより發展し來りたるものなり、向上は過去幾十萬年の時代を領せり、過去幾十萬年間、人類は動物の爲せる如く、又動物と異なるを知らざりしが如く、寸樹なき陸地に狐の如く穴居したりしなりと、

更に進める方法により猶太教の發展を歷史的に考察したる後、著者は愈よクリストの描寫に入れり、曰く、海と大洋との間なる國の北部に於て、一平原に二人の夫婦住めり、男はヤコブの子ヨセフ、女はマリーとして世に知らるゝものなり、二人共に純粹なる猶太人の後裔にはあらざるべく、恐らくは猶太人とジエンチル人との雜種兒なるべし、夫は老壽を保ち得ざりしが如きも妻は長らひてその子供の生長するを見得たり、かくて此偉人の母がその子の偉大なる點を認め居らざりしは、最も注目すべき確乎たる事實なりとす、夫婦の間には五人の子供あり、相應の生活、境遇の下に養はれたり、結婚の後初めて擧げたる子をイエスと曰ひ、いたく明快にして澄徹せる眼を有し、深刻に且つ眞摯に彼の人民の過去及び未來を透見するを得、斯くて實際、宗教的性質の感銘には擁受力を有したりきと、



The Delegate　　The Newspaper Man　　The Reader of the News
HARMONY AT ALGECIRAS,
—*Ulk* (Berlin).

左れど彼が自ら救世主なりとの信念に達したるはバプテスト、ヨハネに依りてなりき、彼は洗禮を受けて後家路に向へる途すがら斯くいへり、予は明日家に歸らん上は、直に公衆の前に立たざるべからず、予は、此怯懦にして且つ沈默なる予は、斯くて人々に向つて言はざるべからず、汝が生活と汝が心とを共に淸淨ならしめよ、天國は來るべければなりと、彼は疑惑の幾階段を通過し、氣も心も搔き亂れて荒漠の野邊より歸りたるが、而も凛たる勇氣あり、一切の疑惑を克服したりと、眞にイエスの奇蹟として福音書に見ゆるところのものも、氏の所說によれば、實際病を治したるにはあらず、病者にあらずとの信念は、彼が宣傳する、天國に入るに必要なりとなし、病者の意志に與ふるに唯催眠術的感化を與へしに止りしのみと、

さるにも拘らず、猶ほ氏がクリストを以て罪の救濟者とするところ尤も留意するに堪えたり、彼は之をば天刑病者シモンの家に於ける罪ある婦人の怪奇なる描寫と關連して記せり、此處にはイエスは不幸なるその婦人に對して次の如く言へりとあり、「天に在す神は汝の父なり、而して又汝を愛し玉ふ、左れば汝も亦彼を愛せよ、好しや汝は汝が現在の罪より免れ得ざることあるも猶ほ神を愛することを止むるなかれ、いざ行け、泣くなかれ」と、

重なる獨の保守的敎會の新聞紙は此節に就いて評して曰く、誠に此見に從へばイエスは、一般吾人が望み居る如き、好個の罪の救濟者なりと、

イエサスに對して起れる人民の反對に就いては、氏は神を驚かしたるべきものとして記せり、彼の苦痛に就いて下の如く言へり、彼が心裡に懸せしところは何人も知らず、又語り能はず、彼は疑もなく瀕死の際まで決して此杯酒を神は呑ましめんと強ゆるにあらずといふ一閃の希望の光を有したりき、さはれ十萬の天使は來らざりき、否一人も來らざりき、彼の信賴せる弟子等も事實に於ては逃竄せしなり、彼は十字架上に掛けられて幾時間か苦痛に惱みたる後、血液の泄出と氣息の逼迫との爲に死せり、これぞ彼が臨終の樣なりきと、

復活に就いては、氏は大體に於て下の如く言へり、彼は、此世に歸るべきこと及びその第三日に於て彼が神の力を授かり得たることゝを信じ、之を弟子等に語りたりき、弟子等は彼に虛言なきを信じ、必ず彼が來るべきを思へり、ペテロとヨハネとは彼を再び見ずして止まずと言ひ、終に彼等は彼を見なせしと想像せり、此風說一たび村より村へと流布するや一面又彼等と同じく彼を見んものと憧れ居し人々の風說と打混じて事實とせられぬ、即ち彼等は信仰より來る胸悅によつて彼を見たり、斯くて此信仰によりて最初の敎會なるものも建てられしなりと

氏は論ぜり、此る樣にて、イエスの復活は歷史的事實にはあらず、想像、幻覺、及び彼の弟子等が自恍の念の上に存するなりと、氏はかくて結論に於て、イエスが近時の人に對して有る、又た有らざるべからざる點を總括して言へり、曰く、予は歷史的四圍の事情及び其事情の誤謬により今日猶ほ彼に纏綿し居る、即ち精靈や、奇蹟や、彼の肉體の復活や或は近き天國の降臨やを承認せず、更に彼の道德上の敎訓にても、如何にそが唱道せらるゝにせよ、彼が當時より全然異なれりと思はるゝ時代の產兒と結合せらるべきものにあらず、吾人は又ペウル及び諸福音書の筆者等をも含める多くの人々の神又は他の問題に就いて作れる一切の敎條を排す、吾人は又三位一體や、罪にの墮落や、神の子や、更に彼の血に依つての贖罪や、並に其肉體の復活やを排す、何が故に吾人は此いる事實を信ずるか、今に於ては全く用なし、此かる事實は悉く除去すべし、今猶ほ此等の事實を信ずるものは無智者ならざれば僞善者のみ、救世主よ、汝の姿は實にも慕はしく又懷しからずや、汝が信仰は如何に容易にして又稚趣あるよと

勿論各大學に在る近世神學の諸大家が少くも一部分に於て、フレンセ

ン氏の以上の解釋を正しとせざるものあるを付言す、左れど多くの保守的新聞紙は當然根本的大學派神學の結果、之を彼等が信仰にあらずして、不信仰なりと呼べる所のものとして認めぬ、フレンセン氏の書は慥に時代の記號にして其現在の發賣高は以て氏が多數人民の思想を語り、且つ顧みたるものたるを示すべし。

日露戰爭に於ける人命の損害

「リテラリー、ダイ、ジエスト」

日露戰爭に於ける統計表は、日露兩國共に紛雜し、或は紛雜しつゝありしが、遂に兩國政府の概算表は發表せらるゝに至れるものゝ如し、諸新聞紙の説明並に批評に依れば、此等は正確にして信憑するに足るものなり、セントピーターズブルグ市のインヴアリツド紙によれば露國が此戰役に於て、滿州にて失へる總數は、死者、負傷者、失踪者に合して十一萬を計上すといふ、又ロンドン市のスピーカー紙によれば、日本陸軍省の作成に係る、日本戰時の損害報告は遂に發表せられたるが、好果を收めし近時の軍隊が疾病によりて失へる數並に激戰に於て死せし員數とを示して信憑するに足ると、同紙に曰く、戰爭の終結に至りて、日本の病院及び衛戍病院制度の甚だ精巧なるより、疾病による損失の比較的小なるを知るに至れり、左れど吾人は猶ほ平時の如く、病の犧牲となるものが戰の犧牲となるものより多く、又其超過率は甚だ小なりとにいへども、戰時は平時に比すれば優れりとす、玆に掲ぐるは死者、負傷者、及び失踪者の統計なり

戰死者	四万三千二百十九人
戰傷者	十五万三千六百七十三人
失踪者	五千〇八十一人
不時の負傷者	一万六千四百五十六人
計	二十一万八千四百二十九人

戰役中、日本陸軍省は死傷者の姓名を發表せず、而して其發布せる統計表も殆んど信憑するを得ざりき、今も猶ほ戰死者の數は疑はしきまで少きの感あり、恐らくは失踪者とある大部分は死者の中に加へらるべきものなるべし、不時の負傷者中には、馬に蹈まれたる、車に轢かれたる、靴の擦過にて足を損ぜる、峨岩の上に落ちて負傷せるもの等を含む、此戰死傷者、負傷者、失踪者の全數に更に疾病によりて死せるもの或は兵役免除となれるものゝ數二十二万一千百三十六人を加へざるべからず、斯くすれば總計四十三万九千五百六十五人の損傷者を計上するなり、二十八万一千五百八十七人の兵役免除者が本國へ送還せられたるは、精細なる報告書の調査に依りて知るを得、戰地にて死せるものゝ數は殆んど六万を算すべし、日本の病院まで送致せられし兵役免除者中十三万六千七百人は回復して八月の末に除隊を命ぜられ、三千六〇一人は病院にて死しぬ、戰傷者並に病者の中三十九万一千二百六十五人は、或は復務し、或は、日本陸軍省の用語に從へば白骨と化したりきと



巣林子の詩論

附元祿の活劇派

佐々醒雪

日本にも古くから歌學といふものはあつたが、其實は詩歌の本體の論といふよりは、寧ろ其の形式即ち修辭の論であつて、音韻の調和不調和、比喩引喩の用法などが主要なものであつた。連歌時代の歌論も大體同樣で、俳諧時代になつても、まだ久しくこの樊籠を脫しなかつた。貞門派と談林派との花々しい論戰の間には流石に修辭のみではなくて、俳諧其ものゝ本質にも論及したものはあつたが、其の議論はとかく倫理道德を混同して居つて、神佛を誹謗したがすまないとか、不忠不孝の句であるから宜しくないといふの類で、美そのものは、事實に於ては、認めもし、諳ひもしてゐながら、議論に上ることは稀で、かの鬼貫の獨言(ひとりごと)のやうに、比較的嗜味の多い俳論ですら、誠の外に俳諧なしといふ結論であつて、其誠といふ意味が、やはり道德的の意義を離れない。例へば、不孝の心が起つた時は、親といふ字を前句にして、これが附句を誠を以つて作つて見れば、直に本善の性に復ると說いた類で、畢竟はまだ俳諧の眞意を知らなかつたのである。

比較的に學者が多く、議論が盛んであつた歌俳の道ですら、この通りであるから、小說や淨瑠璃などに關しては、更に甚しい。足利期以來の注釋家は悉く佛敎儒敎を以つて古の物語を說かうとした。それのみならず、架空の物語に對しても、必ず、實社會の出來事として研究する、否な寧ろ附會することを能事としてをつた。つまり、ある種の敎義とか、事實とかいふことの外には、文學の價値は認められなかつたのである。或は認めてはをつたかも知れぬが、議論としては、單

なる美だけでは滿足しなかつたのである。

我々が、この作り物語に關して、まことの詩論らしい詩論を見ることを得るのは恰も元祿の交であつて、門左の說が、殆んど破天荒であると信ずる。門左の說といふのは、僅かに、難波土産の緒言中に見ゆる、簡單な聽き書きに過ぎないが、これを其の著作と對照して見ると、實に堂々たる大議論である。

その一條は事實を詩化し美化する所以を論じたものであつて、小むつかしい術語こそなけれ、意味に於ては、今日の所謂る美は詩學などいふものと其の致を同じうしてゐる。

淨瑠璃の文句、皆、實事をありのまゝに寫すうちに、又藝になりて實事になきことあり。近くは女形の口上、多く實の女の口上にはえいはぬこと多し。これ等は皆藝といふものにて、實の女のえ言はぬことを打ち出して、いふ故、其の實情があらはるゝなり。此の類を實の女の情に本づきてつゝみたる時は、女の底意なんどがあらはれずして、却つて慰にならぬ故なり。さるによつて藝といふところに氣をつけずして見るときは、女に不相應なる氣疎き詞など多しとそしるべし、然れども、この類は藝なりと見るべし。此外、敵役の餘りに臆病なる體や、道外樣のをかしみをとる所、實事の外藝に見なすべき所多し。此故に、是を見る人其のしんしやくあるべきことなり。

批評的眼孔を具ふなどゝ稱する詮索屋は、動もすると、全體としての印象如何を忘れて、箇々の事柄の自然不自然のみを論ずるといふ傾向は、作者から見ると、今古同嘆であると見える。門左の作（ことに時代物）には、箇々としては不自然な事柄が多い。太鼓を打つて敵を擊退するといふ話もある。塀を越え、塀を越えて味方の兵を敵城内に投げ込む勇者もある。投げ込まれた兵隊は、打身にも惱まず、悠々城門を開いて味方の軍を麾くといふ不死身である。九死の病人も、身請けの金を見ると、立つて舞ひ始める。天皇樣が御所の塀を一つ越えて、直ちに山里へ夜逃げをなさる。まこと

に氣樂千萬なカラクリてはないか。だが、當時の見物人がこれに喝采したのは、箇々の不自然を認める遑がなかつたのてある。全體の印象の爲には、箇々の不自然をも敢てする所が近松の見識てあつた。要は「慰になること」、即ち全體として詩美の約束にそむかないことが主眼てあつた。詮索好きの批評家に對して「しんしやく」を要求するのは、確かにその權利てあつた。かく、彼は寫實の外に詩美のあることを認めたのみならず、單な寫實は美てないといふことも知つて居つた。

ある人の云、今時の人は、よくよく理詰の實らしき事にあらざれば合點せぬ世の中、むかし語にある事に、當世請とらぬ事多し。さればこそ、歌舞伎の役者なども、兎角その所作が實事に似るを上手とす、立役の家老職は本の家老に似せ、大名は大名に似るをもつて第一とす。昔のやうなる子供だましのあじやらけたる事は取らず。近松答云、この論尤のやうなれども、藝といふ物の眞實のいきかたをしらぬ說なり藝といふものは、實と虛との皮膜の間にあるもの也。成程今の世實事によくうつすをこのむ故、家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとはいへ共、さらばとて、眞の大名の家老などが、立役のごとく、顔に紅脂白粉をぬる事ありや。又眞の家老は顔をかざらぬとて、立役がむしやくしやと鬚は生なり、あたまは剝なりに、舞臺へ出て藝をせば、慰になるべきや。皮膜の間といふがこれなり。虛にして虛にあらず、實にして實にあらず、この間に慰が有るものなり。是に付て、去る御所方の女中、一人の戀男ありて、たがひに情をあつくかよはしけるが、女中は金殿の奥ふかく居玉ひて、男は奥方へ參る事もかなはねば、たゞ朝廷なんどにて、御簾のひまより見玉ふもたまさかなれば、餘りにあこがれたまひて、其の男のかたちを木像にきざませ、面體なんども常の人形にかはりて、其男に毫ほどもちがはさず、色艶のさいしきはいふに及ばず、毛のあな迄をうつさせ、耳鼻の穴も口の内歯の數迄寸法もたがへず作り立さ

せたり。誠に其男を傍に置きて是を作りたる故、その男と此人形とは、神のあるとなきとの違のみなりしが、かの女中是を近付けて見給へば、さりとは生身をすぐにうつしては、興のさめてほろぎたなく、こはげの立つものなり。さしもの女中戀もさめて、傍に置給ふもうるさく、やがて捨てられたりとかや、是を思へば、生身の通りをすぐに寫さば、揚貴妃なりともあひそのつきる所あるべし。それ故に、畫そらごととて、其像を描くにも、又木にきざむにも、正眞の形を似するうちに又大まかなる所あるが結句人の愛する種となるなり。趣向も此如く、本の事に似るうちに、又大まかなるところあるが、結句藝になりて、人の心の慰となる。文句せりふなども、此の心入れにて見るべき事多し。

「實と虚との皮膜の間」といひ、「虚にして虚に非ず、實にして實にあらず、この間に慰あり」といへるなどは、實に千古不磨の名言といふべきであらう、かの理想化といひ醇化といふ勿體ぶつた語も必竟はこの意義を出てない。ことに、毛穴まで寫させた人形がほろぎたないといひ、生身の儘を寫し盡すならば、揚貴妃でも「あいそがつきる」と斷言したのは、かのゴールスミスが所謂る、埃塵までも寫さねば承知しない寫實家を、愧死せしめるに足ると思ふ。

「正眞の形を似するうちに又大まかな所がある」といふのは、最も穩當な主張て(實は、近松の時代物は、この以外に逸してをるが、これは、專ら、當時の見物の耳目に近い者、即ち世話物中の事物に就いての立論であらう)、かの形象と理想化との關係をも詳にしたものといつてよからう。

元來、この時代前後の俳優などの中には、自然主義或は寫實主義(或は當年の活劇主義)といふ風の傾向が著しかつたようで、耳塵集や、あやめ草などにも多く寫實の注意を說いてをる。だが、自ら其間にも卓見がないではないので、あやめ草にも次のやうな說がある。

十次郎申されけるは、女は右の膝をたて、男は左の膝を立てる、歩み出しも同じ事とぞ。弟子に敎へ

られしも、其通りなるを、吉澤氏（初代芳澤あやめ初め吉澤と記す、女形の名人なり）ひそかに意見せられけるは、それは其通りなれども、見物衆の方へ向ふ方の膝を立てず、又見えによるべし、理屈ばかりにては歌舞伎に非ず。とかく實と歌舞伎と半々にするがよからんとぞ。十次郎もそれより見え次第にせられしなり。

「實と歌舞伎を半々にする」とは、「虚實の皮膜」といふと、必竟は同じ意味であらう。但し、あやめは元來が寫實主義で、所作事を第二として、地の藝を專らとした人であつたやうで、この一條の外には、この種の説は見えないのみか、女形は貞節を守るべしと説いて、貞操なき女形に扮することを忌むべしなどといふ、奇怪な辯説も混じて居る。

坂田藤十郎は寫實派の最もよい代表者であらう。「ほめられんと思はゞ、見物を忘れ、狂言を誠のやうにまんろくに致したるがよし」といつたのは、一面の眞理てはあるが、其の身振即ち舞臺上の形を説いて、

身振りのよしあしを吟味する藝者（役者のことなり）あり、尤、見物に見するものなれば、あしきよりは良きはよからん。予は吟味なし、身振りとて作りてするに非ず、身振りは其心のあまりにして、喜び怒る時は、自ら其心、身にあらはるゝ。然るに何ぞ身振りとて外にあらんや。（耳塵集）

といつて居る。あやめの考とはまるで正反對ではないか。同じ耳塵集に、この人と嵐三右衛門とを比較して「三右衛門はうそらしき狂言の仕様にてしかも名人なり、藤十郎は誠にして同じ名人なり」といつて居るから、藤十郎は活劇派の泰斗と目せられた人と見える。して見れば、こんな奇矯な放言も相當なことではあらうが、その嵐三右衛門即ち非寫實派の「うそらしい狂言と目せられた人までが、やはり、實際のまゝを演じやうとした逸話があるのは、頗る奇異の感がある。

古嵐三右衛門ぬれ口舌などの狂言の仕組に、相手の役人をも[illegible]内へ呼寄せ、本より酒ずき成ゆゑ頓て盃を出し、[illegible]性に懇して居る子どもあれども、それには目

もかけず、外の子供につぶやきさゝやき、或はほゝずりつけざし、後には醉て正體なし。元より若衆は悋氣して様々のゝしれば、同子ども立役あいさつに入、中を直し盃させり。此時は藤十郎親坂田市左衛門、眞野屋勘左衛門座本にて有しゆゑ、其座へ藤十郎來り、是は〳〵そう〳〵敷事かな。初日も近日ぞや、若衆と口舌所にては有まじき事、はや〳〵けいこをせよと笑ひ〳〵申されしかば、三右衛門我も左様に存じ、最前より稽古を致したりと、初て盃を出せし時より、今なか直しの盃まで若衆のりんき、人々の挨拶にいたるまで、こと〳〵く皆覺え、是替り狂言の稽古也と、其通に仕くみたり。いづれも役人、こはいかにといへば、作りたる事はわろし實よし。その義をおもふが故に、日頃は稽古の場へ盃は出さねども、此度は替り狂言のせりふ付のため盃をいだし、若衆が是非悋氣をせねばならざる樣に仕かけかくのごとし。いづれも舞臺にて唯今の樣にいたされよといへり。是又よき思ひ付なり。古人はかほど迄心をつくせり。

思ふに、元祿頃の劇界に寫實的傾向が甚しかつたのは、多少の理由があることとて、荒唐無稽な古淨瑠璃や、歌舞伎即ち踊りを主とした芝居ばかりの後を承けて、新らしい世話物が今發達しようとする革新時代としては、前代の反對として、極端な寫實論があらはれるのが至當であつて、又時弊の矯正にも必要であつたのであらう。だが、其間にあつて、さらに醇化の必要を忘れなかつたあやめや門左は、眞の偉人ではなからうか。

話がやゝ岐路に入つたが、かういふ意味に於ても、元祿は實に我が文藝の覺醒期であつて、前代の所謂る純夢幻劇から眞の劇に移る過渡期である。近松の時代物は、譬へば嵐三右衛門であつて、前代の夢幻的のものに新らしい生命を加へたもの、即ち、うそらしい狂言の名作であらう。其の世話物は譬へば芳澤あやめである、當代の世相を美化し醇化して、こゝに新らしい元祿の誇を大成したのである。

純寫實に近い西鶴は、坂田藤十郎の亞流であらうか、惜いことには、西鶴の小説論は毫も聞くことが出來な

い。僅かに殘つて居る俳論も、唯斬新なれといふ主張のみて、事實と文藝との關係には、全く論及してゐない。

門左の今一つの詩論といふべきものは、その主觀論てある。かの難波土產に、

近松云ひけるは、總じて淨瑠璃は人形にかゝるを第一とす。されば、外の草紙と違ひて、文句皆働くを肝要とする活物なり。……されば、地文句、臺辭事はいふに及ばず、道行なんどの風景を叙ぶる文句も、情をこむるを肝要とせざれば、必ず感心のうすきものなり。詩人の興象といへるも同事にて、例へば、松島宮島の絶景を詩に賦しても、打詠めて賞する情をもたずしては、徒らに書ける美女を見るが如くならん。この故に、文句は情をもとゝすと心得べし。

これを、一片の修辭論と見るのは、當を得たものてない。抒情的叙事詩から進むて、殆んど劇詩を大成した門左は、純客觀詩の價値は認め得なかつた。よし認めたとしても、それは、その抒情的叙事詩には必要てなかつたのだ。所謂る「働くを肝要とする」といふのは、修辭上の流動（ムーブメント）の義とも解する人もあらうが、單にそれのみてなくて、靜止した客觀又は自然は、詩の本領てはない、それが主觀に映じて感情となつた時に、初めて詩美となると信じたものてあらう。

描ける美女の中にも、文藝の逸品があらう。だがそれは彼が本領たる抒情的叙事詩には不用てあつた。かく、主觀主義を主張してはをつたが、ロケーションを遺却した印象派の弊は、又夙にこれを認めてをつた。

「淨瑠璃は憂が肝要なりとて、多く哀れなりなんどいふふ文句を書き……あはれなりといふ時は、含畜の意なうして、結局其情うすし、あはれなりといはずして、ひとり、哀れなるが肝要なり。譬へば、松島なんどの風景にても、ア、好き景色かなと譽めたる時は、一口にて其の景象が皆言ひ盡されて、何の詮なし。其の景色を譽めんと思はゞ、其の景の模樣どもを、餘所ながら數々言ひ立てれば、好き景といはずして、其景の面

白さがおのづから知るゝなり」と。だから「これは〳〵とばかり花の芳野山」といふ風の、純感情的又は主觀的な描寫は、その好む所でなかつた。かの詩材の主觀論と描寫法の客觀論とが結合して、こゝに主觀的客觀詩即ち、抒情的敍事詩が出來上つたのである。

喧靜錄

浩々歌客

友情と宗教心

人を經ずして神無く、人を待ちて宗教ありとは、わが常套語なり。

人無く我(われ)無くて、神を奈何せん、宗教を奈何せん。見神の說、自覺の論、信仰の問題、まさに當面直下に解決せらるべくして、未だ容易に權利とすべきもの見えず、諸智識の筆舌多くして中樞の力無きは、なほ衆星爛々たる天上に、獨り夫(か)の北斗を尐(か)きたるの觀あり、こは說論の足らざるにあらず、信仰の力足らざればなるべし。

靜夜、天を仰いで星を觀る、星や遠し、その光耀の何ぞしかく近きや、神は近し、吾人の方寸にあり、信仰の消息見易からざるにあらず、吾人の眼前にあり。

吾人は、諸家の甚深高遠なる見神說に依らずして、何人にも見得べき人々(じんじん)相互の情誼信愛の上より、神に對する信仰の消息を說かんと欲す。

聖書(バイブル)に、神はそのおのれに象(かたど)りておのれの像の如くに人を造りたりと說けるは、即ち神を解するに、人を以てするの捷徑たるべきを示す。

吾人は、友情の上に宗教の生命なる信仰の小照を見る。

「友情は此世に於ては十分實現せられずして常に豫言的なるもの、われ若し靈魂不滅論を書かば、友情を以て第一の題目となすべし」とはエマルソンの言、此翁が「友情論」を著したるの意を見るべきと共に、吾人はまた友情の深味が殆ど神秘の境に詣(いた)るの消息を覯ぜずばあらず、十分實現せられずして豫言的なりと謂ふ

ものは、神秘に之けばなり。」彼はまた曰へり「此缺點多き人生に於て友情といふ美しきもの存するありて、人と人との間の高貴なる神聖なる純潔なる關係を表彰するは誠に喜ぶべく讚美すべき事なり」「友情は戀愛よりも純潔神聖なり」と、その美しきといふは、即ち知己の觀なり、所謂無我の愛なり、相信相依の機微なり。

知己は得易からず、莊子の「相識はまさに多かるべし親朋はまさに少かるべし」と言へる親朋は即ち知己の謂にして、至美至誠のものなるが故に、その少かるべき筈なるを說けるなり。

知己は、同心異體なり、相見ずして相疑はず、未だ相逢はざるの人に神交の義あるに見ても知るべし、管鮑の故事、斷琴の先蹤、最も陳りたる知己の例にしてしかも最も顯著なる確證ならずや。

未だ神を知らざるものも、造次顚沛なほ相信じて相疑はざるの知己あるべし、此知己の或は即ち宗教信仰の小照なり。

宗教の信仰は、神と知己たるにあり、基督教徒は、神の子と宣りたる基督の知己となりて輙ち得べし、佛教徒は、唯我獨尊と宣りたる釋迦の知己となりて輙ち得べし、孔子の知己たらば儒教以て立つべく、モハメットの知己たらば回教以て保つべし。

既に友と相信じて知己たり、友が一切の行爲に疑を闕くべし、彼若し盜みたりと報ぜらるゝも必ずまさに盜まざるべきを信ずべし、少くとも盜むべき筈無き理由はその胸中に確立すべしそはなほ聖書の解說は如何に進步するとも、基督教徒は究竟奇蹟復活を信ずべき理由を帶び將ちて、而して之を信ずるが如く然り。

吾人は、宗教の信仰、見神の實驗の消息を論議し疑ふものに對しては、必ず先づその人が、友人を有するかを問はんとす、兩心相信じ相許して、彼我一切の行爲相疑はず、爾汝の交、水魚の親、他人之を割くこと能はざるの知己ありや否やを問はんとす、彼若し知己友情の義諦を解せば、やがて神を見、神を信ずることを得べければなり。

吾人故に曰、友情知己の觀は見神信仰の小照なりと。

繪畫の分類

一

梅澤和軒

繪畫には、色々種類がある、日本の分け方も、科學的でないが、西洋のも、亦非科學的だ。何等もきちようめんな西洋でも、習慣上如何ともしがたいのか、繪畫の分類は、科學的でない許りでない。人に因つて分け方も、餘程違ふやうだ。

日本畫では、人物、花鳥、山水佛畫と、支那流に大別してある本も見えるが、此頃は、歴史畫、風俗畫と云ふ名目も見える。然し此れは、支那傳來の名稱でなうて、西洋流である。此の外に、支那にない者に、繪卷物、浮世繪等がある。なほ手畫、自描法、一筆がき、燒畫、水畫、吹繪、墨流し、あぶり出し、雲母繪、等あるけれども、此等は眞正の繪畫の分類中には、入れ難い。唯だ鳥羽畫は、滑稽畫(キヤリケーチユア)のことだから、此れは一分科とすべき者だ。漫畫と云ふ中に、風俗畫と戯畫とある。

更に精しく云へば、人物畫の中に、傳神、寫照の二別がある。傳神とは、人物の神韻を寫す者、賢哲、武人、韻士、美人等を、其の行事、詩歌、文章に因つて、氣品のある所を考へ、其の特色を寫すのであるから、空想的、想像的の肖像である。寫照とは、又肖像とも云ふ。其の人又は寫眞或は成圖に因つて、眉目口鼻の人相より、服裝色澤等、眞に迫るやうに描く者。前者を主觀的肖像と云ふを得べくんば、後者は客觀的又寫生的人物と云ふことが出來る。

山水にも二大別がある。一は寫意山水で、他は寫景山水である。寫意は、胸中の雲煙を寫す者、眞山眞水でないのだから、此れを空想的又想像的山水と云つてよい。他は即ち實景で、富士なり松島なりの眞景を寫すものだ。前者を主觀的又理想的山水と云ふを得べく、後者は客觀的又寫生的山水と云ふべきものである。一は形似より精神に入り、他は形似に停まつてゐるのだ。色彩上よりは、寫意山水は水墨を、寫景山水

は淺絳、青綠、金碧の法がある。

花鳥とは、花と鳥に限つてゐるのでない。花鳥と云つても、獸魚昆蟲の類をも描くのだから、鳥花は植物、動物の代表。植物畫動物畫と云ふと同じなのだ。

佛畫とは、佛敎的の繪畫、神仙道釋の類、之れを宗敎畫と云ふべく、神話畫も、此の中に包まれてある。

歷史畫とは、畫題を過去の史中に求めた者、過去の風俗畫、人物畫と、交涉する一面がある。風俗畫とは、現代のも過去のも、共に風俗を現はした者、元祿風とか、桃山風とか、明治風とか云ふ類。種々の時代、階級にわかつ者、浮世繪などは、德川時代の一面の風俗畫て、繪卷物は、平安鎌倉の殿上の風俗畫なるものもある。中には緣起や畫傳の如き種類もあるが。

二

日本の分類は、大凡右の如しとして、さて西洋はと云ふに、人に因つて少々づゝ分け方が違ふ。或人は、歷史畫、風景畫、ジャンルと分け、歷史畫の中に、所謂歷史畫と、宗敎畫と、神話畫、寓意畫、肖像畫をも網羅して居る。而して風景畫即ちランドスケープ(Landscape)に對して、海景畫(シースケープ)(Seascape)と云ふを取り出てたのもある。ジャンルは、風俗畫と譯したり、浮世繪など譯す字引學者もあるが、此れは其の內容を知らぬと誤られることがある。ジャンルとは、市井の瑣事、日常生活に關する者、家庭的、逸話的、文學的、戲曲的の畫題を始め、花、鳥、果物、靜物、狩等の各種を包めて、極めて大風呂敷を擴げてゐる。ジャンルとは、本來は、宗敎畫、歷史畫、山水畫以外のものを指す、極めて廣い文字て、佛語の「種類」と云ふ意味の字てある。かるが故に、以上の分類以外の、各種を總稱するのてある。日本の風俗畫など云ふよりも、餘程廣い意味がある。

又或學者は、歷史畫、肖像畫、山水畫、動物畫、遊戲畫、靜物畫、果物畫、花鳥畫と云ふ風に分類して居る。歷史畫の中に、肖像畫以外、前に陳べた者を入れて、山水の外に、やつぱり海景畫(Sea-views)と云ふ字を使つてをるのもある。靜物畫とは、動物でない者、

例へば、家具、樂器其他靜止物を總稱する。動物畫の中に狩獵(ハンチング)畫を入れてある。

以上の如くであるから、繪畫は、左の如く分類したら。ほゞ和洋共通の分類と爲る。と思ふ。

- 繪畫
  - 自然界
    - 動物畫 ─ 狩獵畫・花鳥畫
    - 植物畫 ─ 花鳥畫・果物畫
    - 鑛物畫
    - 風景畫 ─ 山水畫・海景畫
    - 靜物畫
  - 人間界
    - 神話畫
    - 宗教畫 ─(神仙道釋)
    - 歷史畫
    - 風俗畫 ─(浮世繪繪卷物)
    - 寓意畫
    - 人物畫 ─ 傳神畫・肖像畫
    - 滑稽畫 ─(諷刺畫)
    - 雜

雲南省城に於ける江部文學士よりの消息

六號子

左に掲ぐるは雲南省城高等學堂教習として彼地に渡られたる文學士江部淳夫氏が上田万年、白鳥庫吉兩文學博士に送られたる書簡にしてもと是れ私信に屬すれども彼地の風俗に就て參考となるべき節少からざるを以て兩博士の許諾を得て讀者の一讀に供す。

謹啓。時下益々御清穆奉遙賀候小生十一月一日東京出發以來上海漢口武昌長砂より洞庭をわたり、武陵桃源を經、遡沆の中途に越年し、鎭南府より船をすてゝ轎子により峻嶺巍嶽之貴州省を貫行し、日本的山景野色の雲南に入り、無事住所に着し候は二月十六日にて此間費せる日子一百有八里に御座候

露に捷てる日本の影響夙く此地にも及び居り候にてか着早々大官等の來訪頻々此國人得意の訣辭をうけて應接に無遑候上學校の設備に繁忙、せめて道中の見聞をとも存じ候へ共目下の事態右の如くに候間乍勝手御報導申上候代りに御伺申上度候

a、貴州省城を距る約三百清里の一高臺に鳳頭鷄と

申す一族蔓延致居候、蓋し明末南京人の逃れて來れるものにてその女子の髮裝恰かも鳳頭に似たるより此名ありと申候が右は如何なる歷史的位置を有するものに候や、右傳說果して眞に候や

b、貴陽府附近の苗につきホージー氏は"3 years in Western China"に Hei Mias と斷じ Howa M. の不在を述べられ候が小生の見たる所にては髮飾と衣服とに立派な刺繡も有之、褶などにも施され如何にも花苗かと存じ候まゝ彼等につきて問ひしにホワミヤウと申候、何れが正しかるべきか、即ち若しホージー氏の新案が眞ならば黑苗花苗分別の標準なるもの聊か從來と趣を異にし來らずやと奉存候

c、到着早々にて一度省城より西百里旅行致候位なれば昆明の史跡言語に關し未だ何等の議をも思ひつき申さず候へ共一二の讀書人にきゝ候に雲南土語といふ全般的知識は知らず、こゝには一種の昆明語なるものあり、それは只四聲五聲の異なるのみと申候、上田先生がお話に相成候雲南土語とは漢人以外の蠻族が有せる土語の意と恐察仕候如何に候や、猶雲南省城の地は吳三桂が遺せる清語多く所謂北京語に近き由に候小生もとより省諸府州縣者その他涉獵可仕考に候へば幾分熟し候上別に御伺申べく候へ共兩先生に對し安着の御報導をかねて一二の疑義を具申し凡そ是等に關する參考書目を承り申上度右の如くに候

猶苗人に髮なし、これありとて市村先生と鳥居君との相互駁說有之候を曾て承り及び居り候が目擊の一二丈にて斷ずべくは小生は同先生に贊するものに候呵々

早々頓首

雲南の二月は恰かも東京の四月、異草奇木今芳香を發し居り候

淳 夫

上田先生
白鳥先生
玉梧下

怪物傳（四）

覆面冠者

啊呍鉢羅婆

十一

琉球より故郷に歸つた未來の世尊――西田和協は、天台宗の寶聚寺に入つて、郷黨を驚かしたが、之を見て最も驚いたのは、乃父の綸堂翁であつた。併しながら琉球より南清を經巡つて、世界の風を吸つた渠は、郷黨の打ち騷ぐも耳に入れず、超然として、一身を經典の中に委ねたのである。

然かも片足を佛典の中に投じた渠は、間もなく、寶聚寺を出て丶東京に上ぼつた。そして琉球て恩惠を受けた西村捨三氏が、土木局長の職に在つたのを機として、月給十幾圓の屬吏と爲つたのてある。渠の知人は、何れも其の變化の急激なるに驚いたが、渠自身は、例の勿體振つた態度て、平然と、土木局の腰辨當と爲つたのてある。

併しながら、土木局の屬吏と爲つたのは、柳川人としては、普通の徑路てあるが、一二年にして、著しき變化を示したのには、何人も驚かぬ者が無かつた。それは、土木局の一小屬吏てあつた渠は、紳某商の娘に慕はれて、其の婿と爲つたゞてある。某紳商とは、當時實業社會に羽振を利かせてゐた米倉一平て、長女の綾子といふに慕はれたのてある。曾て佛門に片足を投じて郷黨を驚かした渠は、屬吏に身を屈したのも眞個の瞬間、忽ち鋒鋩を露はして、富貴と戀愛を兩手に、一躍して紳商の婿と爲つたのである。

ア、啊呍鉢羅婆の人物は、此の屬吏時代に於て、既に世尊と爲るべき機才を現はしてゐる。今日傲然として、無師の獨覺を以て任じてゐるのも、紳商の母子を擒にしたのと異曲同巧。余は釋迦の再來を稱へて世人を掌上に弄してゐる今日よりも、一屬吏の身を以て、「富」と「戀」とを摑み得た當年の西田生に服する。

十二

斯くて土木局の一小吏は、米倉氏の周旋を以て、當

時創立せられた川越鐵道會社の取締役と爲つた。曩に卓子を駢べてゐた同僚等は、眼を聳やかしてゐたが、渠は過去の知人に一瞥だも呉れず、實業社會に入るや、家に在りては、猫を冠つて愛妻の意を迎へ、外に出づれば、種々の事業者と交つて、待合の出入に、その機才を磨いたように聞いてゐる。渠は土木局では平々凡々、何等の評判も無かつたが、川越鐵道會社取締役としては一種の剃刀漢として、相應に顏を賣つたので有る。

否、渠は取締役としては、傲慢て、不得要領て、一部には惡評も行はれたが、取締役の衣裳を脫いて、待合の人と爲れば、がらり變りて、何時も默然として、ぶつきら棒てある中にも、那邊やら如才なく、會社ては傲慢らしく見へる處も、鷹揚と言はれて、一種の尊敬を博したのも不思議てある。

と書いてゐる中に、水晶の珠數爪繰りて、端然と坐つてゐるアムハラバの模樣が、眼にちらつく。、、、、渠は、斯くの如く、實業家の群に入つて、紳商風を吹かせてゐると、走馬燈の如き渠の半生は、又もや意外の事變が生じて、その一身に一大變化を示した。それは、枕木の事からして、詐欺取財の嫌疑を受けて、獄中の人と爲つたのである。啻に嫌疑に止らず、裁判の結果は、重禁錮六ケ月、罰金二十圓、監視六ケ月の判決を受けて、正札附の、正眞正銘の犯罪者と爲つたのてある。

或時は琉球に巡査、或時は南淸に渡りて世界浪人、故鄕にては半俗半僧の偏物、東京に出づると、內務省の腰辨當、而して鐵道會社の重役——而して今度は、極端に走つて、監獄に落ちたのてある。

暫らく西田和協の一身に同化して、その半生を顧ると、その行路の是非は兎も角も、境遇の多故なる、頗る尋常を拔ひてゐるてはないか。然かも、監獄を出づると、更に異彩を加へて、他の極端に走つてゐたのてある。

十三

前の川越鐵道會社取締役西田和協が、監獄を出たの

は、血腥き日淸戰役も終りて、世は泰平に就いた明治二十九年四月。滿都の市民は、戰捷と櫻花とに醉ふて、わや〳〵と景氣立つてゐる時であつた。——若し渠にして、一二年前の西田和協であれば、此の出獄の時は、最も活動を試むるに恰好した時であつたのである。

が、今社會に出た西田和協は、琉球より故鄕の瀨高町に歸つた時とも違つてゐる。九州の一角より、滿腔の野心を懷いて東京に上ぼつた時とも違つてゐる。西田それ自身は、依然として、粧しい聲音の裡に覇氣を隱くした橫着者であるが、渠自身は「前科者」といふ、世人に侮蔑を以て迎へらるゝ身と變つてゐるのである。英雄心緖亂如絲——左樣だ、英雄ならぬ西田和協も、或半面は、亂れて糸の如きものであつたらうと思はれるが、如何した譯か、案外暢氣であつたのが不思議〳〵。

否。西田自身の胸中に入つて見れば、不思議でも何でもなく、獄中を出た西田和協は、新に一大抱負を懷いてゐたのである。

監獄は人界の闇黑である、が、また一種の智見を開く敎會である。熊本の中村六藏は、獄中に大圓眞理を發見して、社會に出た、辯護士の和田守菊次郞も、記憶術を發明して、世に現はれた、啻に矯激なる中村等ばかりでなく、盜賊は其の技術に就て、詐欺者は其の詐欺に就て、おの〳〵特種の智見を加ふるのは、出獄者の常態。——西田和協も、宗敎上の見解を提げて、獄中より出て來たのである。

渠は土木局の腰辨當であつた當時、すでに一字金輪如來の夢想を得、廓然として大悟したと吹聽して居るが、自分は必らずしも其の言を以て虛なりとはせぬが、其の人物に鍛錬を加へて、身を宗敎に委するに至つたのは、入獄の結果で、此の入獄一件は、渠の運命に新紀元を作つたものと言つて良いのである。であるから、吾徒一流の人物眼を以て、渠の身上を批判すると、渠の一身に前科者の名を附するのは凡俗の見解で、渠自身に取つては、前科者の名稱は、寧ろ宗敎大學の學士號とも爲る。

併しながら、無師の獨覺なりと稱してゐるにも拘らず、常に前科者の名稱を恐れて、之を秘密に附してゐるのは、余輩は窃にアムハラバの名に對して、失笑に堪へず。

十四

西田和協は、斯くの如くにして、宗教界の人物と爲つたのである。

然かも世路の辛酸を經來つた渠は、直に釋迦の再來を呼ぶとなく、獄を出づると、東京を去つて、叡山に上ぼつたのである。

叡山で一字金輪の佛頂法を攻めたのは、前號に記るした通りであるが、山を下ると、今日其處等に「豫言者」或は「救世者」を以て任じてゐる連中と同じく、俄かに、鼻高々と天狗を極め、窃に釋迦の再來を以て任ずるに至つた。青瀧院に櫻木谷大僧正を尋ねたのも、叡山より歸つた後の事、、、南葛飾郡砂村に閑居したのは、調度此時であつたのである。

日本橋中洲に、門戸を張つて、啊吽鉢羅婆の聲を揚げたのは、三十三年四月であつたが、叡山より歸つて、砂村に閑居してゐた當時は、その生活は極めて悲慘を示してゐた。岳父の米倉とは音信不通。其の日の糊口にだも窮した。左樣だ、渠は叡山で佛典を學んだが、砂村では有らゆる學問の根源たる「貧」といふ自然の大學問を遣つたのである。

* * * * *

啊吽鉢羅婆の略歷を擧ぐれば、あら／＼右の如し。宗教家としての渠は、他に幾多の消息が有るが、勿體振つた世尊の白衣を剝いで、赤裸々に、西田和協の經歷と言へば、右の如きに過ぎぬ。然かも、怪物として世人の注目を受けてゐるのは、啊吽鉢羅婆自身の人物よりも、渠の帷幕に參して、縱横の怪腕を弄した本莊堅宏の藝當で、啊吽鉢羅婆が、一時上流社會に勢力を收めたのも、此の本莊堅宏の智嚢より出でたのである。

本莊堅宏の外に、今一個の人物が控へてゐる。それは、故川上參謀本部總長に知られて、陸軍編修の職を

執つてゐた幸軒巽來次郎で有る。本莊は啊呍鉢羅婆を怪ならしむべく、布敎の實際に當つてゐたが、巽は專ら敎義の上に盡してゐた。一時聳然として勢力を張つたのも、此の兩人の學問と機智とが調和鹽梅して、怪人物啊呍鉢羅婆が出來上つたのである。

特に本莊堅宏の人物が、最も多く啊呍鉢羅婆の上に發揮せられたのである。

感興去つて、筆進まず、爰に一と先づ啊呍鉢羅婆の筆を擱くべし、帷幕に隱れて、啊呍鉢羅婆を操縱したる本莊堅宏は、今海豚島の經營に從事しつゝあり、而して本莊去りて、啊呍鉢羅婆の怪色俄に減じ、索然たり。

今更かの子の「今樣おかしき」は輕妙の筆を以て滑稽人の頤を解くべき材料を記述し、なか〳〵面白きものなれば本號雜錄欄內へ揭載したりしも頁數著しく增加したる爲め、遺憾ながら組置きとして之を次號に廻すことゝせり讀者其心して次號の出づるを俟たれよ。



現內閣と社會主義

『讀賣新聞』

前內閣は社會主義者に向つて最も慘酷なる壓迫を加へたるに反し、現內閣は之に向つて最も寬容なる待遇を以てするが如し、しかるにも拘らず、前內閣の時代に於ては、社會主義者の運動甚だ激烈にして、現內閣の下に於ては其の氣焰却つて大に揚がらざるものあるは、果して何の理由に本くか。

思ふに、物平かならざれば必ず鳴る、それ社會主義者は既に社會組織に向つて大不平を抱けるもの也、しかるに更に其の言論行動を過度に束縛して愈々其の平を得ざらしむるは、益々彼等をして咆哮せしむる所以なり、前內閣は之を爲し、現內閣は之を爲さず、これ近時に至つて社會主義の運動大に平穩に歸せるの一因也、しかれども其の根本原因は全く

其の以外に存すること嘗て余輩の略論したるが如し。

若し現内閣の對社會主義政策にして單に放任これ事とするに止まらば、本邦社會主義運動の將來は果して如何なるべきや、固より今日の如くなりと保證し難し、是に於いてか余輩は、現内閣が其の施政の綱領中に社會政策の實行を遺却することなからんを希望するの念切なり。

夫れ社會主義者その人と雖も、其の主張の實現は決して之を即刻直下に期待せるに非らずして、現時の政策としては全然社會政策の實行に贊同するもの也、只だ其の社會政策の怠慢なき實行を希望するにあるのみ、しかるに不幸にして歴代の内閣意を玆に用ふること最も少なく、竟に社會主義者を激奮せしめて、其の理想を刻下に實現せんとするが如き過激の言論を敢へてするの已むなきに至らしむるに過ぎず、夫れ社會の革命は或は短年月の間に期し得べしと雖、其の改善は決して之を急激に期待す可らざるものなれば、要は只だ其の理想に向つて直線的に漸進するの外なき也、しかるに往々にして或は左に傾き或は右に傾く、是時に當つて時弊を救ふの言論は、勢必らず或は左に傾き或は右に傾くを免れず、かの俄に實行すべからざる社會主義の理想が、刻下の政策として極端に主張せらるゝに至るは、必らずや政治の局に當るものが社會政策の施設を無視せるの時に限らるゝは、即ち此の理由に本く也、諸國の歴史を通覽するに、社會政策の實行遺憾なきに近からば、社會主義の主張は將來の理想として正當に理解せられ、社會政策の實行見るべきものなきに當つては、社會主義の主張は必らず即刻直下の實際政策として極端に誤解せらるゝに至ると、常に其軌一なり、現内閣たるもの深く之に顧みる處あつて可なり。

今や食なくして飢に泣くもの何ぞ東北地方に限らん、仰いでは以て父母に仕ふるに足らず俯しては以て妻子を養ふ能はざるもの到る處にこれあり、女工の虐待何ぞ嘗て埼玉縣下に起りしに止ると爲さんや、無智無學の勞働者不當の虐待に泣くもの到る處にこれあり、國に宰相たるものは此の國人を視ること、赤子を保つが如くならざるべからず、然らば所謂社會政策の施設何んぞ之を一日も緩ふすべけんや。

社會主義者の過激なる運動は、常に政府を驅つて社會政策の實施を已む能はざらしむ、今や本邦社會主義運動稍々平靜に歸るに及んて、現内閣たるもの若し其の刺激なきの故を以て爲すべき所に怠らんか、異日復た斯の主義を奉ずるものをして、已むなく過激の言論行動を敢てせしむるに至らん、これ斷じて我が國家の慶事に非らず、夫れ社會主義の理想そのものゝ是非に就いては自から別に論あらん、只だ其の主義者の行動をして常に平靜ならしめよ、而してこれ實に執政者の責なり。(河上生)

日米互惠條約

『東京朝日新聞』

我國に於て米國の麥粉并に小麥に對する輸入税を全廢し、其代りに米國をして我絹織物及び花莚に對する關税を約半減せしめ、以て日米兩國

間に互惠條約を締結すべしとは、吾人の夙に主張せし所。今米國に於ける互惠條約に關する過去の歴史を閲し、并に目下の氣運を察する時は、吾人は益其の必要を感ぜざるを得ず。米國は曾て伊佛等の諸國と互惠條約を締結せり。此條約は幸ひに批准に至らずして已みたれど、其の中には吾人の決して等閑に附する能はざる條項あり。假令ば佛米互惠條約中に、佛國は米國の農產物に對する關稅を減廢すべきを以て、米國は其の代りに佛國の絹織物に對する輸入稅を廢止すべしと規定せるが如き、即ち是なり。當時若し此互惠條約が兩國の批准を得たりしとせば、我國の被りたる影響は果して如何ぞや。我が羽二重は米國に於て佛國の絹織物の爲めに壓倒せられ、福井、石川、福島等の羽二重業者は今日の盛況を呈する能はざるは勿論、悽慘たる窮境に陷りたるや必せり。當時我當局者が斯かる重大事件に對して何等の手段をも取らざりしは、吾人の怪訝に堪へざる所なるも、兎に角此の條約が佛國にては農業者の反對を買ひ、米國にては製造家の反對に逢ひたるが爲めに、雙方とも批准するに至らざりしは、我國に取りて實に勿怪の幸ひなりき。然れども尙油斷すべからず。歐米に於ては近來稍保護政策に倦かんとするの傾向なきにあらず、殊に米國に於て互惠條約の希望者は目下實に侮る可らざる勢力を得つゝありて、何時之れが實際問題となりて現はるゝや測り難ければなり。現に昨年八月十七日米國各州に於ける農工商二百有餘の團體は、市俄高に於て互惠條約期成大會を開催し、是非とも其目的を貫徹せんとするの議を決したるとあり。出席者の中には紐育の物產取引所、紐育商業會議所、紐育貿易商組合の如き、東部の最も有力なる團體の代表者あり。米國各州の知事、市俄高駐在の各國領事等も出席せり。何れも米國の保護政策は內地の物價を高からしめ、且つ外國の復讐を買ひ、今や其弊に堪へざるを以て、成るべく速かに諸外國と互惠條約を締結せんことを大統領に向つて希望する旨の演說を爲し居れるが、中に就き米國元老院外國關係事務委員長セネタア、コロム氏は曰く「今後米國の關稅は佛國のそれの如く、最高最低の稅率を設け、米國の商品に向つて高率の輸入稅を課するの國の商品に對しては、米國も亦高率の關稅を課し、之に反するものに對しては低率の輕稅を課するととすべし。米國に於ては關稅を以て國庫收入の目的に供せんとするの政策は過去に於て屢失敗せり云々」。氏の如き位地の人より此の如き言を聞く。以て米國に於ける互惠條約の氣運を察すべきにあらずや。隨つて米國が更に又佛伊等に對して互惠條約の再交涉を開始するが如きとなしと言ふ可からず。而して其の再び開始せらるゝに於ては、其の目的は矢張り從來の如く米國の農產物と、佛伊の絹織物との間に互に關稅を減廢せんと欲するにあるべきや疑を容れず。果して然らば米國に於ける今日の氣運は我國の決して等閑に附し去るべき時にあらず。去りとて我國は米國と歐州諸國との互惠條約の締結を妨害するともなられば、吾人は我當局者が米國今日の氣運に乘じて、先づ我國と米國との間に前記の互惠條約の交涉を爲すを以て最も得策となす。米國に於ける互惠條約の希望は概ね歐州に對するものゝ如くなれど、我國に對しても道理は同一なり。結果は齊しく米國の農產物の販路

を擁護し、低廉なる綿織物を需用することとなる。我國にして之れが交渉を開始せんか、米國は必ず悦んで之れに應ぜん。吾人は當局者が此機會を逸せざらんことを望む。

輿論の力

『萬朝報』

去月一段落を告げたる米國の三保險會社事件は、吾人に取りて何等利害の關係なきも、輿論の勢力の大なることを示す點に於て大に吾人の注目に値ひするものあり

三保險會社と稱するは紐育生命保險會社、イクヰタブル生命保險會社、及び紐育相互生命保險會社にして、孰れも七八億圓の資産を有し、保險契約高は二十五億乃至三十六億圓に上り、啻に保險會社としてのみならず世界の諸會社中有數のものなりとす、又常に莫大なる利益配當を爲し、其株券は政府の證券の如く確實なりと認められ、其重役は數十万弗の年俸を受け、小國の帝王にも優りて羨望せらるゝ地位に在り、實に是れ黄金萬能力を示すに足るの大會社なり、若し金力を用ひて議會を買收し、政府を買收し得べくんば、此等の會社は充分に之れを爲すの力を有せるなり、否此等の會社は已に其の幾部分を實行して益す盛況に向ひつゝありたるなり、然るに昨年會社内に於ける權力の爭奪より會社重役の不正行爲端なく世間に暴露せられたり、此の不正行爲は敢て同國の現行法に違反するものに非らずと雖ども、輿論は之れに對して甚だしく激昂せり、而して會社の重役は道義上制裁を受くべきものなりとせり、是に於て會社は黄金の有らゆる威力を盡して輿論を沈默せしめんとしたるも、輿論は却て益す激昂し、紐育生命保險會社長マッコール氏の如きは終に此激昂に堪へずして頓死するの慘況を呈せり、此結果議會は上院議員アームストロング氏等を委員として此事件を調査せしむることゝなり、此程調査結了して報告を公にしたり、此報告は今後更に國法となるに非ざれば會社に於て直ちに之に服從するの義務なきも、會社は今や進んで自から之に服從せんとするが如し

以上は只僅に事の大要を記したるのみ、然れども是れ黄金の力終に輿論の力に及ばざることを明示するものに非ずや、而してこは最近の一例に過ぎず、實に此の如く輿論の勝を制したる例は枚擧に遑あらざるなり、黄金万能國と稱せらるゝ米國に於てすら然り、況んや英佛及び其他の諸國に於てをや、顧みて我邦の現狀を見るに近く三電車値上問題の如きは明に輿論の勢力を示したるものにして、聊か意を強うするに足るも議員買收、官吏買收の如き醜運動は公々然として行はれ、世人は之を冷淡に看過するが如し、豈痛歎せざるを得んや、數個月前大隈伯が演說して議員選擧に投票買收の行はるゝことを述ぶるや、外字新聞は日く、英國に於て伯の如き地位に在る一人にして斯の如き言を爲したりとせば輿論は忽ちにして沸騰し、失言として之を取消さしむるか、或は投票買收の事實を摘發せざれば已まざるべしと、此に反して我邦に在りては一人とし

て伯の首を云々するものなし、以て彼我人心の冷熱に雲泥の差あるを知るに足る而して社會的制裁より起る輿論は孰れの邦國を問はず、自然に其必要を感じ愈よ亢進の勢を兆せり、我邦と雖も此趨勢を免れざるべし、殊に國民が輿論の効果を認むるに於ては其來ること愈よ益す速かなるべし、吾人は已に電車問題に於て輿論の起るを見たるも、異日又他の問題に對して必ず輿論の勃興する機會あるを信ず、然れども輿論は常に誠實ならざるべからず、誠實ならざれば一致を缺き、輿論の効果を收むる能はず、故に吾人は輿論が社會を制裁するを望むと同時に、其輿論なるもの丶誠實にして且徹底貫通せんことを欲して已まざるなり。

現下の紡績業及び保險業

日比谷平左衛門

「活動之日本」

紡績は現今の狀態に在りて、需用供給の平均を保ちつ丶あり、否寧ろ需用に促さる丶の有樣にして、從て製造家は有利の地位に座すと雖も、更により大なる得意と利益とを逸せんとしつ丶あるを憂ふ、卽ち輸出すべき貨物を剩さゞるの結果、支那印度の如き一大市場を眼前に控えて、拱手傍觀の餘儀なき所以のもの何ぞや、元來紡績は我が輸出品中尤も有望なるものにして、而て製造家の頗く細心なる行動に出づるもの、之を諒とすべき事情卽ち彼等は日淸戰役後に巨利を博し得たるも、北淸事變卽ち三十三四年に至りて、供給超過の結果大なる損失を招きたるを以て、今に其苦痛の忘らる丶なく、再び此辛き經驗を嘗めざらんとて、小心翼々たるを知らざるに非ずと雖も、そは必竟無用なる過去失敗の回想として、より大膽に、より大規模に、努力一番を乞はんと欲す、抑も又日本商工者の未だ世界的なるを得ずして然るに在るか、大局に着眼し、數理的頭腦を以て打算し來らば、何んぞ啻に國內の需用に甘んずべき、云ふ迄も無く南淸は大日本の侵入すべき一大市場なり、地理的干係、歷史的緣故其他凡ゆる點に於て尤も親密なるべきの理にして、之を新參の英國又は獨逸に占領せらる丶ょらんか、又何の面目ありて世界の商業を談んずべき、就て想ふ、元來日本の商工業は一般に保守的なり、消式的なり、今や國家は面目を一新して世界的となり、戰後經營の事業にして民間の手に經營さるべき國民的生產の要求頗々たりと雖も、市場は更に其舊容を改めず、秩序と云ひ、道德と云ひ文明的商業の要素は依然沒却せられて、一致團結の思想に乏しく、我が利之れ圖るに急にして、國民的觀念の存するなく、從て民族的特色奕を貨物の上に發揮せん事所詮不可能なるもの丶如し、斯くの如くにして機運勃興せる對淸貿易の前途果して如何ぞや、吾人之を憂ふる事大にして、日本商工者の反省を乞ふや切なり、假令ば彼の商業會議所制度の如き、必竟商工者の機關として存在するものなるが故に、商工に關する凡ゆる問題は此所に於て討議せられ、政府法律案の如き、苟くも商工に關するものは此所に於て審査せらるべき道理と權利とを有せざるべからず、然るに彼等は之に對して果して幾何の

注意を拂ひつゝありや、大に疑ひなくんばあらず、是必竟大局に迂遠なるが故なり

日本保險事業に至りては、尤も慾服せざるもの〻一人なり、假令ば火災保險業者の如き、被保險者の家財を假値付くるに於て、紹體に誤謬に陷り、且つ甚だ幼稚なる思想を實現にす、卽ち彼等は火災の危險大なる賃居的住宅には寛く三十錢の保險料を以て甘んじ、安全なる工場に對しては敢て六十錢の高價を貪るは何ぞや、是住家は自個の居住所なるが故に、生命財產の自衞上自然に周到なる注意を以て取扱はれ、勢ひ火災の危險を排斥するに反し、工場は然らずとなすにありと雖も、是れ抑も迂濶なるものなり

元來工場主は工場に据付けられたる機械建物其他營業商品に重きを置くは勿論にして、而も之に保險を附する所以のものは、これ以上に重要視すべきもの〻他に存在するが故なり、他なし、燒失より來る後患としての營業停止之なり、此損害は實に商工業者の致命傷にして、事の輕重を論じなば、火災其物は寧ろ輕しと云はざるべからず。然るに日本保險業者は皮相の見を以てして、工場の燒失をのみ重要視し、工場主が所謂大なる危險の他に存するを解せず、從て周到なる用意を以て工場の建設せられたるを知らざるなり、卽ち今日の工場は普通の住宅とは事情を異にし、工場主を始め數千人の生命を維持する所の製造所なるが故に、凡ゆる危險に向うて十二分の豫防を具備し、防火具の如き完全に用意されつゝあり、其危險の度に於て普通住宅よりも一層安全なるものありて存す、何んぞ想はざるの甚だしきや

之に反して西洋の保險業は其發達大に見るべきの存して、彼等が工場を視察する上に於て、其慧眼なる、其周到なる實に驚くべし、且つ彼等は其缺點を指摘して、善良なる注意を與ふるの好意を有す、然るに日本保險業者の如き工場一般の智識をすら有せず、從て設備の良否を解せず、器械の價値を知らず、工場は是れ一の仕事場に過ぎずして、造作もなく、裝飾もなく、極めて簡便に建設せらる〻ものなりとの謬想を抱き退級なる行動と、誤れる計算に從事するが故に、遂に外國保險業者の乘ずる所となれり、然れども吾人は日本保險業者が自國の工場にすら其保險を附し得ずと云ふに至つては、啻に我が國經濟上よりして不得策なるのみならず、同時に又我が國商業者の恥辱として苦々しく感んぜざるを得ず、云ふ迄もなく今日の世は凡べて人にあり、人材に俟たざるを得ず、就中保險業者の如き、須らく適材を收容して其面目を一新すべきなり。

戰後に於ける我國の宗教如何

井上哲次郎

今や空前の大戰爭は止みて以て、平和克復の世となりぬ、この時に當つて吾人は先つ第一に、如何なるとを思慮し觀察し得べきとなすか。大戰爭は止みぬ、平和克復は成りぬ、然り而して吾人のなすべき事や多大なり、戰後の經營は古來世界の至難至大の問題なり、況んや今、有史以

來の空前なる大戰爭なりし、わが日露の戰役に於てをや。

人誰れか戰後に起るべき大問題に想到せざる者あらむや、戰後經營問題の甚大繁多なる、獨り交戰當國のみに係る所にあらずして、廣く全世界に其影響を及ぼし、且つ人生をして至大なる教訓を得せしめたるは炳然として見るべきなり。然かも其影響は之れにして止まらず、戰後の經營問題が、人生の一方面たる、即ち現實的方面たる或は軍備に、政治に、教育に、商工業に發達進步擴張を企謀せられむとする間に、他方面たる、即ち精神的方面たる思想界は如何。幾多の人心は共に永らく殺伐たる慘風悲雨、肉山血河の裡に呻吟しつゝありしにあらずや、於是乎、今や平和克復す、人心の赴く所、果して何れぞや、嗚呼果して何を求めんとするか。彼等が要求する所は、其軍備擴張よりも商工業發達よりも、必ず先づ精神の慰安にあるべし、之れ宗教問題の突如として先づ勃興せざるべからざる所以なり。

戰後の經營は實に緊急問題なり、緊急問題は實に宗教問題なり、今や我國に於ける宗教問題の如何に勃興せるかは、其多大なる現象を見て以て知るべきなり。余は本問題に關して下に少しく述ふる所あらむとす。

第一、戰後に於ける宗教問題の勃興する所以。日露戰爭は今や既に其翼ををさめたり、有史以來未曾有の慘劇は止みぬ。如是大戰爭の後に於て、繁多激專經營慘憺たる渦中に有りて、獨り超然其れ等に先ちて宗教問題勃興す、之れ果して如何の現象ぞ、翻つて顧へば戰爭は實に悲慘なる人生の出來事なり、そは獨り紅血の壯士、勇猛の健兒が砲煙彈雨、肉飛び骨散りて以て、果敢なく戰場の朝の露と消ゆるのみに止まらず、引いて以て國家の慘憺、社會の悲境等を見るに至る、如是にして宗教問題の興り來るべき必然の結果なり。加之千弋の殺伐たる、慘風悲雨打ち續いて、久しき間人心は或るものに對して、渴しつゝありしなり、即ち戰爭の殺伐たる光景止むと共に、その正反對たる心靈上の問題起るは當然なるべし、然り而して今これを別問題とするも、日露の戰爭は宗教上に對して自ら關係せるものなり。則ち彼れ露國は基督教國にして、我が日本は佛教國なり、日露戰爭は實に此の二異教國間に起りし所の戰爭たりき。然るに佛教國は基督教に勝ちて、武勇赫々の驍名を天下に轟しめたり、於是基督教國の人民は意外の惑に打たれざるを得ず、而かも尚之れが宗教上の觀念に變動を生じたるや明かなる所にして、之れ其以て宗教問題を起し來りたる原因なり。而して此の戰勝の結果、歐米人が日本に對する態度一變せり こは武士道の影響なるや明かなるも、斯く戰爭上にのみ表はるゝものゝ外、無形的に佛教儒教の如き教への陰に力ありしとを歐米人の認むるに至りしなり。

如是にして今や宗教問題は勃興し來らざるを得ず。日露戰爭は實に東西文明の統一調和の實行に一轉機を與へたり、則ち白人以外に白人と對等の勢力ある人種の存在は、歐米列國の等しく認むる所となれり。そが結果人類に對する觀念に、非常なる變化を與へしものなるが、この東西文明の統一を計るには先づ、その根底たる東西宗教の統一に考へを廻らさゞる可からず、是れ今日宗教問題の興り來りし所以なり。

第二、自稱預言者の現出。自ら余れは預言者なりと名乘り出づる者、近來續々として起り來れり、こは如何なる現象なるか、方今天下之れ變遷の渦中にあるの世、殊に思想界の亂調破爛せる實に過度期の極點たるべしとは、人の常に言ふ所なるが、今や世は其變調につれて、種々の異物を生じ、殊に又世の問題となれる自稱預言者なるものを産出するに至る、今此種の人物を驗するに、或は山師的のものあり、或は精神病的のものあり、或は又眞面目なるものもあるが、多少は皆病的ならむと思はる。宮崎虎之助、伊藤證信、河上肇諸氏の如き皆それなり。メシア佛陀と自稱する宮崎氏の云ふ所甚だ價値なし、又伊藤氏の無我愛の如き、彼れは新眞理の如く云ふも、實は佛耶兩教中に在るとにして、敢へて珍とするに足らず、如是は尙是れを論理上より云ふも、種々批評すべき點多きや明かなり。又綱島梁川氏の如きは見神の實驗を說く、彼れは眞面目の人たるや明かなり、而して神人の融會を實驗せりと云ふ、されどそが果して眞の神を見たるや否や、公共的に正しきや否や、そは病的ならざるや否や、これ問題なるべし。何となれば、氏は病人なればなり。氏の如く不治の難症に罹れば、終極の安心を急ぐ傾向を生じ、理性弱はり果て以て、萬事皆感情的となり、女々しくなるは、これ自然の結果にして、將又氏が見神の出來る所たらずんばあらず。近角氏は之に反して見佛せりと云ふ。見神と見佛!、嗚呼何れが眞なる乎、此見神と幻覺との別如何、而かも氏は之れを說明せず、又氏は神の子にして神の寵兒なりと云ふ、然れど何故に氏のみ獨り神の恩寵を縱にするを得たるか、神は何故かく不公平を行ひしか、何故氏は見神して見佛せざりしか、又何故氏は時々見神せしのみにして、常に神と一致し居らざるか。

之れを要するに自稱預言者なるものは、概して第一に佛耶兩教を調和せんとする傾向を見るなり。第二に彼等は史的觀念に乏し。第三に社會的事業との關係甚だ尠し。第四に彼等が將來に及ぼす影響に附ては毫も考慮し居らざるもの丶如し。此第二より第四の點を缺く時に於ては、宗教は個人の道樂と鬼り了らむのみ。されど此れ等の人々の輩出せしは、時代が宗教的情熱の高まり來りしとを示すものなり、而して日本人は宗教の善惡を判するに便宜の位置に在り、則ちその宗教的偏見のなき事その一なり。又東西の宗教を統一するに便利の位置にあるとその二なり。

第三、將來に於ける宗教の性質。余は將來勃興すべき且行はるべき宗教が、如何なる性質を具有せざるべからざるかと云ふに就ては、左の三條を出でざるものなるべしと信ず。(1)普遍的にして、全世界に應用し得るものならざるべからず、(2)倫理的ならざるべからず、(3)合理的ならざるべからず。是れ余が將來の宗教に對する意見の大要なり

井上博士の此批評に對する批評は本誌評論欄、默笑子の「見神に對する世評を評す」の一文に於て見らるべし(編者しるす)

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新小說

第拾壹年第五卷◉五月壹日發行 三

實價

壹冊廿五錢郵稅貳錢半六冊前金

郵稅共壹圓五拾九錢郵劵代用壹

割增

發兌 東京日本橋 春陽堂

脚本 瀧口入道

故高山博士原著

姉崎博士改作

治承の春に萠え初めし瀧口の戀、嵯峨野の奥に哀れを留めし横笛の誠。その戀物語を縫うて描かれし平家杜石の頽落、一門滅亡の哀史。花の盛りに始まりて六道輪廻の現相に終る。一篇の脚本は一瀧口の戀の中に平家興亡の跡を收めたり。

實價金 錢

郵稅金 錢

東京日本橋通

春陽堂發行

此廣告によりて御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

阪本四方太
高濱虚子 共著

寫生文集 帆立貝

▲△口繪彩色密畫三葉……淺井默語筆
▲△挿繪木版二十四葉……中村不折筆

▲本書は近時滔々として行はるゝ淫靡文學に反對す。
▲本書は淫靡文學に惱める人に最良の慰安なり、最大の福音なり。
▲本書は家庭の讀物として子女の健全なる文學趣味と品性とを涵養するに足る。
▲本書は清新なる寫生文を作らんとする人には唯一の模範なり。
▲淺井先生の口繪は輕妙にして雅馴なり。不折先生の挿繪は奇縱跌宕なり。
▲繪畫の多き其の數廿七葉に上ぼる、此の書を以て淺井中村兩先生の書帖とし見るも亦可なり。

クロース
正價金壹圓
郵税金八錢

伊藤佐千夫作

小說 野菊の墓

○○○○表紙……木村淡香書 中村不折書
○○○○口繪……中村不折書

増補訂正

總振假名
高尚美本

正價金卅錢
郵税金四錢

▲野菊の墓は曩に雜誌ホトトギス新年號の卷頭を飾れる小說にして、時流を拔きたる傑作として歡迎せられ、エノックアーデンの俤ありと推稱せられたる出色の文字なり。玆に更に增補訂正せられて一冊子をなすに至れり。
▲野菊の墓は其の名の示す如く、可憐なる、清新なる、田園趣味に富みたる物語にして、著者の悲しき實歷談なり。其の一字一句皆淚を以てものせらる。民子の哀れなる一生には何人も同情を禁じ得ざるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十五番地 俳書堂 （電話新橋二八八番）

書籍目錄（石膏十種目錄）無代進呈致候

二人畫工

（シエンキーウヰツ作）

魯庵生譯

第三回

取敢へず我輩はヒルシ男爵の引取値段で承諾する手紙を出した。尤もワルソウで今一回展覧會を開く條件を附けて。

て、手紙を出すにしても何にしても先立つものは金だから、會から若干か融通して貰う相談を掛けた處が、何も彼も故障なしにスラ〳〵と油のやうに運んだ。

「カイト」と「コーリヤー」の兩新聞に我輩の傳紀が載つた。出鱈目の虚誕ばかりで固めて一つとして眞實の事は無いが、オストリンスキーをして云はしめたら、這般な事は「我れ關せず焉」だらう。

此二大新聞は我輩の畫と肖像の寫眞を載したいと言込んで來た。何ても云ふまゝにさせてやるサ。金なんぞは既う澤山有りすぎて水同樣だ。

第四回

一週間經つとヒルシ男爵から手附金を請取つた。殘金は品物と交換に渡すといふ事で。

銀行は正金貨で五千法を我輩に拂出したから、生れて以來見た事の無い大金を駄馬のやうに脊負つてヒヨックラ〳〵書室に歸つた。

て、歸ると直ぐ、板の間一面に金貨をザラ〳〵と播いて、ツイぞ一度金の中に寢た事が無いから、一番試しに金の中に轉がつて見た。

其のあとからアンテックも金の中に轉がつた。丁度來合はした家主は喫驚すまい事か、此奴氣が觸れたんではないかと思つた。我々は恰で野蠻人みたいにわッ〳〵騷ぎちらした。

第五回

或時オストリンスキーがやつて來ての咄に、自分がカーヂャからペケを喰つたのは却て幸福だと云ふのは見掛けた山が中つて來さうだからと云つたが、渠奴めが何を云つてる乎、本と〳〵カーヂャは初めからオストリンスキーを振付けてるのだ。勿論カーヂャの兩親、殊に父親は全然オストリンスキーに惚つて了つて此難かし屋の新五左どのがオストリンスキーの前では全て權識を失くして了つた。だが、お氣の毒な事には肝腎の肝腎のカーヂャが生得蟲が好かぬと云つて、振つて振つて振拔いた。尤もオストリンスキーは嫌はれるやうに出來上つた男で、善く有る咄だが、我々藝術家や操觚社會には元來何が面白くてるのか一向合點めない不得要領の男があるものだ。オストリンスキーは恰も爾ういふ男で、唯

だ技術の出來るもの、殊に文藝の天才あるものを輕蔑して暮してる。几帳面に敏捷く惡狡猾く世渡りをして巧く社會に勝利を得てる男が人を馬鹿にするやうに矢張人を馬鹿にしてる。種々の公會や美術家文學家の集會や或は宴會で能く邂逅はす事がある。何時でも喋々しいおひやらかしを頭から浴せ掛けて、思想界では自分より十倍も勢力のある大家を冷詼かしてる。で、洒落やら理窟やら口から出放題にまくし立つて、上げたり下げたり、對手を狼狽さして得意になつてる。

アンテックは何時でも之を憶出すと、ムラ〳〵と癪に觸つて、オストリンスキーの腦天を打ちのめして呉れやうと寐床から叫りつける。だが、考へれば天才のある人間は兎角拔けてゐて、怯懦て、加之に茫然て、常識が缺けてる。誰も見てゐない獨自ぼッちの時だけ翼を伸して威張り返つてる。這般な閑があればオストリンスキーは呴々高鼾で寐て了う。影法師を對手に獨り喜りの天狗を云ふやうな事は決して無い。

人は誰ても相應に將來の空想を夢みて、勳章や位階や位地に憧憬れてるものだが、オストリンスキーは這般な事を屁とも思はないで心中笑つてる。將來なんぞは如何でも關はぬ。唯現在で他よりは重んぜられ、自分以上のものより却て餘計に對手にされゝば夫で十分滿足してるんだ。

第六回

爰に笑止千萬な沙汰がある。我輩の名が高くなり金も出來たに關らず、カーヂャの父親は意外にも我輩を相變らず馬鹿にしてをる。イヤ父親ばかりぢやアない、母親も親類も皆我輩を冷遇する。

父親のシュスローウスキーは這般な事を云つた。我輩が新たに位置を得たので渠を動かしたとか、或は我輩の名譽が急に高くなつたのに增長つて恩を被せるやうに思つたら夫こそ大間違ひてあると云つた。兒供の幸福の爲めなら隨分思切つて犧牲になつても厭はないが、併しイクラ可愛い一人ッ子だからッて親の權識まで棄てさせる事は出來ぬと云つた。母親は亦母親て、萬一かの時の隱れ家は娘も能く知つてる、厭になつたらイッ何時でも歸つて來いと云はぬばかりだ。カーヂヤだけは正直に我輩を辯護して、時折ブン／＼怒りつけても親達は我輩の言葉を一々押へつける。

時偶我輩が口を開かうもんなら、父親は脣を嚙占めて母親と顏を見合はして、宛も『斯う來るに違ひないと思つた』、といふやうに頷き合つた。這般な言草を會う度每に聞かされてゐた。

が、口先ばかりて、實を云ふと矢張我輩を網に取込まうといふので、言葉のドン底には我輩の一萬五千法を覗つてるのが見え透いた。であるから其心持てこそ違へ、此一萬五千法が果して取れるか取れないか心配してるのは渠等も我輩も同樣てある。

這般な行き方で待遇されるから、終には我輩も自分の書て金牌を得たり、一萬五千法を得たりしたのは何か狡猾手段を廻らしたんぢやないかと思ふやうな氣がした。

今度は少し用事があつたから、短かいが之だけて御免を蒙むる。此あとが面白い。波蘭詩人の特色が十分に發揮されてゐる。願くは讀者そのお積りて――譯者識

雲の姿

小川未明

自分は枯れた芝生の上にどつかりと座つて、愁へに重い眸を眠と耕してゐる百姓の輝く鍬に移した。吹く春風に波立つ麥の若葉が白銀色に光つて、又してもそよ／＼と波立つのが傷ましげに種々な記憶を呼び起して氣持が鬱ぐのである。

而して自分は眼を遮るものもない、廣々とした武藏野の景色を眺めて、つく／＼と永劫の寂しみを感じたのである——山や、杜や、草や、木や、昔ながらの自然の面影と、怨み、痛み、やがては死、別れては涙に暮るゝ、戀する人の身の上とを思ひくらべて、犇々と悲みが胸に湧いて、もう堪られぬ寂しさの身に迫るを感じた。而して自分は遠くに漂ふてゐる白雲を眺めて、あゝ、人生は孤獨である。自分は孤獨であると思つた。あゝ、やはり彼の雲も孤獨であるのだ。

寂しさうな白雲。それを眠と眺めてゐると、だん／＼自分の神が遠くなつて、いつしか其の雲が自分であるやうな氣持がした。漫々たる大空を戀もなく、愁へもなく、獨りあてなく寂しさうに迷うてゐるのだ。

あゝ、柔順さうな孤獨の白雲、惠み深ひ、涙を湛へてゐるやうな綠色の空、其の綠色の空が慕はしうて、白雲はだん／＼と舞ひ上るのであらうか。それとも他に憧るゝ故鄕があつて、彼のやうに落付こと

も出來なく、漂うて、何處へか行かんとするのであらうか。……………

自分だと思ふてゐた、圓い、柔順さうな白雲は消えてしまつた。

空は漫々として惠み深い、光澤のある綠の色の見入れば、底ひなく思ひも遠くして慕はしい。いつしか自分は其の裡に溶け込むやうな、恍惚としてしまつたのである。

自分は思つた。空も、雲も、やはり自分と同じやうに寂しい孤獨なのであらう。つく／＼と思へば思ふほど、雲も空も同じい自分其物であるやうな氣持がする。

空の色は益々澄み渡つた。心の裡は寂しいけれど自分は平和な溫かな春の光を浴びて日陽に横はつたまゝ、芝生の上から遠く東海の天に聳えてゐる富嶽を望んだ。其姿は雄々しいけれどやはり女性だと思つた。

そよ／＼と青々とした麥の若葉に戰ぐ風の音色を聞けば、沈鬱になつて、故郷の田園が目の前に浮き出て流れ行く里川の姿が見えるやうな。暫時は仄暗い空想の世界にさまよふて、何を考ふるともなく氣持も沈んでしまつた。

而して眩しい日の光を仰ぐと、遽かに物忘れをしたやうな氣持と變つて、くよ／＼としてゐた空想の霧も晴れて、何を今迄自分は思つて、考へ込んで鬱いてゐたかといふやうに、爽やかな風も始めて肌觸り心地よくさながら接吻するやうに感じたのである。

* * * * * * *

其時、戸山の練兵場から、薄黄色な服を着た一隊の兵士が、廣野を横ぎつて西郊の方へ行くのである。靴で刻む歩調荒く、黄色な畑のやうに塵沙がむら〳〵と大地に起つて、うら〳〵と舞ひ上る陽炎にやがて其の一隊の姿が包まれて霞むと、佩劍や、鐵尖にぎら〳〵と日の光が映るのである。其の閃めく光も星のやうに小さく遠くなッてしまつた。

* * * * * * * * * * *

月日の小車は夢のうちに幾たびかめぐつた。今では眞の血や肉を分けた二人の子さへある身の上、されど幼き昔のことを考へると今でも寂しい、慕はしい氣持がする。

もはや白雲や、綠色の空を見たとて何の感じも起らぬやうになつた。――寧ろ生活の苦みに其日〳〵を追はれてゐる。

あゝ、人生は凡そこんなものであらう!!

（完）





妙音

與謝野寛

還城樂

里を過ぐ。――
あゝ聲どよみ浮べり。
哀婉雅亮、衆妙の
歌、また樂の音。
川挾み菜の花さける
畑より、また
霞たつむらさき空、
また桃さける林の間
茅屋見ゆるあたり。

こを誰れ云ふや、揚雲雀、
庭つ鳥、唸く黄牛、
麥粉ひく石の大臼、
くろがねの鋤の音ぞとは。

市を行く。――
また聲どよみ浮べり。
哀婉雅亮、衆妙の
歌、また樂の音。
八ちまたの大路の上に、
また地の下、
商人のよろづの店、
また工場のくろがね窓
煤けぶり立つ方。
こを誰れ云ふや、車馬、
汽車、人のはげしき吐息、

時惜み長泣く汽笛、
鐵を裂く砲の音ぞとは。

樂しきは
あゝわれら若戰士。
「安執」の阿修羅、「小我」の
羅刹の國、皆
征服けて、今ぞ歸れる。
彼の聲こそ
凱旋の「還城樂」――
わがふるさとの立樂なれ。
太慈悲の軍は
驕らず、「忍辱」の鎧に、
「慧」の旗、「戒」の白眞弓。
麗ら日の大歡喜地を
ねり足に歩みゐるかな。

磯の香

微にこそ香りたれ、
潮が寄せし海松の房。
春の日の上總の海の白濱を、
貝ひろひ、君とつれだち行きぬれば。

微にこそ香りたれ、
潮が寄せし海松の房。
濱づたひ、夕月させる歸り路に、
君またも身に沁む言をのたまへば。

垣間見ぬ

祭の夜、

祇園に近き山の家、
まろうど達は醉ひ戯れ、
わが父母に送られて
車に召しき。
殘れるは、宇治に住むなる
わが從兄、（名は健樣と。）
父とし二人しめやかに
語りぬ。更くる夏の夜を。

夜は明けぬ。
わが居間ながらしのび足、
そとのみ寄りて垣間見ぬ。
あゝこの朝の常ならぬ
心化粧よ。
垣間見ぬ、わが居間ながら。
こゝにこそ（花の塗室とも、）
わが優しきはづかしき
男の息の香は籠れ。

ふたなさけ

戀すてふ我名はまだき世に立ちて、
そは無き名ぞと云ひも得ぬ頃としなれり。
げに奇しく妙なるものはわが心。
浪華の人の憎くしもあらぬかたはら、
まだ更に吉備なる人を思ひ居ぬ。
われ誇りする才の姫、文書きちらし、
風雅男の中にまじれどしめやかに
人知れずこそ泣きぬれて、吉備なる人よ、
命死なむと云ひければ、いかで後れむ
我身もと、われも涙に言交し。
茶を汲みし祇園の梶を慕ふとて、

ほつれし髪に歌よめど、あゝ情熱は
火の如し、われを焼かむず、浪華びと、
今は君こそ命なれ、棄て給ふなと
云へば、又、共に生きむと契りにき。
わりなしや、おのづからなる縁ゆゑ、
ふたつの方に、ふたなさけ、思ひこがれぬ、
何れをか淺し深しとわかたまし。
青玉の香の爐のぼる煙こそ
ふたすぢ靡け、妙香は一つのにほひ。
こを誰れ云ふや、たはれ男のうかれ心と。
また誰れ云ふや、わかうどの花の心と。
ふたなさけ、二つの龕に仕へては、
束のまも不淨懈怠のおもひ無し。
なべて捧げぬ、肉身も、命も、名をも、
白熱の戀の火に炷く不斷香。
日月拜む優婆塞が、麻の衣に
潔齋り、兩手かざせる歸依ごこち、
それにも似るや。我は今斯くこそ告ぐれ。
ふたなさけ、二つながらに僞らず、
こは『眞』の性、智者來てはいてや判ぜよ。
ふたなさけ、二つながらにいそしみぬ、
こは『善』の性、法師達いでや讃へよ。
ふたなさけ、二つながらにうつくしき、
こは『美』の性ぞ、歌人等いでや歌へよ。

歌

村田愛美

○

戀はつらしさらばよ君が玉み手に星ふる宵を捲かれて死なむ

來む世にはわれから弱き戀はせじとあゝ眼を閉ぢぬ萩吹く風に

うつくしき君が情のおん征矢に射られば犧牲も何いなまんや

夕月や銀のやうなる光して島のゆふべを少女泣かせぬ

汐風によき頬のほてり吹かせつゝ磯山小徑ゆくや君がり

落日は太古に似たり寂相に偉僧泣かせて洋に沈みぬ

海ぞひのみ寺の屋根にうす日して神のやうなる人は船より

ゆく秋や妹に似たる美き人に泣かれて胸のさびまさるかな

かくまでにさびしからむや灯のまへにわれに拗ねんのよき子もあらば

花の扉に美き人しばし忍ばせて戯れても見たき春の夜の月

○　吉村苊人

春の夜は金屛七重八重にまき二人の睦み人には見せじ。

歌によき若き皇子を春戀ひてとはに死なばや花ちる夕べ。

三百の警句吐きたる口やせて戀の人なき春の山住み。

○　塚田夕波

旅なれば母が忌日とよすがらを花に泣きたる夕べもありし

いづち來し悲しきものゝ身を捲きて引き行く如し春の日なれど

山寺や鐘も聞えず鳥も來ぬ竹の小椽に花散る日か

にくき人恨めしけれど面影の戀しと云ふに涙流しぬ

○　小谷寒鴉

はづかしと思ふ心をうすがすみ知りたりげにも包むさまかな

京なれど春の夜なれど君なくてあらるべき身と思ぼすかわれを

かくて生れかくてはて行く身と世にはさだめ享け來し人かこの身か

○　擣衣野人

若うして春にそむきし友が歌を誦して泣く夜の雨のさびしさ。

石人の額にうすく夕日さして白楊散りぬ羅馬古寺。

おぼろ夜や髷うつくしき京の子は皷かゝへて大臣(おとゞ)にすねぬ。

鐘の音やそゞろに人の戀しうて歌反古さぐる春の宵かな。

淺野白汀

淡雪や短冊つるす梅のやど小さき沓の主は誰が子か

土産(つと)ざくら君にまゐると黄昏の扉叩けば小雨ふりきぬ

わが胸はひろき海なりそのうへを君は帆あげて走らふ舟よ

麗日や櫓に干されたる衣ゆりて煉瓦船ゆく富士見ゆる川

窓といふ窓はことごとあけはなて微醉の頰を風にうたせむ

吉岡夕舟

春風や彼岸櫻の片枝は花もたずして病むけしきかな

今よ花凋まむとする臨終(いやはて)に胡蝶よ何の樂しき舞ぞ

つばくらは百四十里をすぎてこし旅人めぐり柳の雨に(北佐久の岡にて)

蕭條と雨ぞふるなる河添の蘆の枯生に鴫わなはれば

春の雪小牕をしめて文机に春曙抄よむよき閑居かな

經了へて沙門ゆあみす山寺の夜氣ひややかに星高照るも

油さしまだ來ぬ神のおん庭の闇にあかるき糸ざくらかな

桶

繞石選

漬物の桶動かせば鳴く蚊かな　桃村

張板を桶に渡して門涼み　同

百日紅桶屋の庭の夕日かな　萍水

桶一つ抱えて少し泳がれぬ　香風

風薫る寺の玄關やかざり桶　紫殘

石置いて鮨桶沈む清水かな　鳳梧桐

川狩の桶に生かせし小魚かな　石羊子

噴水のたばしる桶や心太　燕雫

鮨桶の桶に一句をものしけり　四緑

灰汁桶に紫陽花の花こぼれけり　竹馬

灰汁桶の灰汁の濁りや雲の峰　方外

（寒骨、天仙、磨劍その他十數氏の應募句は總て春季なりし爲め乍遺憾沒書としたり）

六月分課題　桐の花　五月十五日限
七月分課題　簟　六月十五日限

應募俳句は東京市本郷區曙町十一番地大谷正信宛の事
應募和歌は東京市小石川區原町百卅三番地尾上柴舟宛の事
應募川柳は東京市本郷區西片町十番地反省社宛の事

川柳選評者の多忙なりしと、應募投稿者の割合に少かりしとにより本號丈け川柳を休載することゝなりしは編者の遺憾とする所なり。次號よりは必ず引續き掲載すべきにつき、ドシ／＼御投稿あらんことを乞ふ。

評論

清國教案事件

XY生

清國楓亭に於ける本派本願寺の布教場は破壞せられたり、是れ亦彼の教案問題の一にして、齊しく頑迷なる排外思想の迸發したる其の餘波を受けたるものに外ならず

今や清國の教案問題頻々として踵ぎ至り、而して我が佛教の如き將さに大に清國內地に弘傳せられて、四億の生靈を濟度し文明福祉の利果を與ふるの因緣を啓かんとする今日、此の問題決して冷眼に視るべからず、

日本政府亦相當の善後手段を執らざる可らざる也

吾人の見を以てすれば、教案事件の續出する第一の理由は、清國に國教なきに拘らず、信教自由の頗ぶる不明確なるにあり、清人の多くは孔孟の仁義教（嚴格に宗教と稱し得ざるも）を尊奉するも、尙ほ若干の佛教あり、回々教あり、喇嘛教あり、耶蘇新舊教まで處々に行はる、別に國教なく、また禁止若くは制限さるゝ宗教あらず、隨つて信教の自由あるが如きも、當路の大小官吏等動もすれば外教（耶蘇教の如き）を忌み、其の宣教師に目を側て、往々信徒（教民）を迫害するに至る、乃ち國法上制限さるゝことなき宗教も事實に於て大に束縛せらるゝは免かれず、若し信教自由の事、明確に定められて官民共に之を遵奉するを則とせば、教案事件の如き多く起ること莫きや必せり

第二宣教師の我が信徒（教民）を視るや、猶ほ己が宗教の如く善良なるものなりとする傾向あり、甚だしきは多少の邪曲あるものも其の教門の威嚴を明示して衆民の尊信を得んと欲するがため之を曲庇することあり、茲に於て狡智に長たける不良の清民等、邪曲の行爲ありて官憲に逮捕せられんとするや、殊に趨りて教門に入り、宣教師の保護下に隱れんとするあり、蓋し官憲の威力能く宣教師に及ばずと信ずるが故也、而して教民等また宣教師の威嚴あるを恃みて、動もすれば官憲を蔑如して不逞の行爲を恣にす、茲に於て清國官民等多く外教の跋扈を憎惡し、憎惡の極、屢々紛爭を生じ、竟に群起して教會堂を燒燬し、宣教師教民を併せ殺傷するに至る、然るに外國政府多くは此の事情を熟知せず、其の宣教師を監督する途を過まり、動もすれば清國政府を苦め、宣教師をして其非を遂げしむることあり、而して彼我の嫉視益々甚だし、現にチャイナ、インランド、ミッションの如き宣教師のみの集合團體にして監督政府を有せざるものが、清國官民と感情上の衝突を來すことなきは其の一反證に非ずや

故に我が政府は楓亭布教場破壞の案件を處理するに方つて、能く機宜を誤まらず、清國政府をして信教自由の主義を明確に公表せしめ、且つ日本宗教を清國内

地に弘布するとを承認せしめ、併せて其の安全を保證せしむべし、清國條約上未だ我が宗教の弘布を認むるに至らざるは一缺點也

吾人は更らに我が政府に望む、政府が清國に至るべき布教の人物を認許するに方つては、先づ眞實宗教の本義に適する智德兼備のものなるや否やを審議して、總て管長の任命するものに限り、且つ其の責任を擧て一切管長に負はしむべし、次に布教地に於ける我が領事及び外交官をして、嚴に布教師を監督せしめ、公明正大に進退して、清民をして寸毫も疑惑を懷かしめざるとを努むべし、一方には清國の政府をして其の官憲に命じて之を保護せしめば更らに妙也、官尊民卑の習慣尚ほ甚だ盛なる清國內地に於て、斯の如くすると最も便法なれば也

晉唐以後宋に至るまで、佛教支那に盛なりき、奈良朝以來鎌倉時代に至るまで、我が僧侶の支那に學べるもの多く、彼國の名僧我に來りて其の智德を顯揚したる亦少からず。然れども今や彼の國の佛教大に衰へて諸種の妖教のみ行はる、我が日本宗教の純粹なるものを弘布して、清國の生靈を助け、之をして慈悲の聖光に浴し、宏大無邊の利果を得せしむるは、彼の國民を救ふ所以にして、又文明人道のために外ならず、抑もまた彼れの舊來の情誼に酬ゆる所以ならずや

見神の實驗に對する世評を評す

默笑子

綱島氏の見神の實驗一たび告白せらるゝや、難ずるもの贊するもの、宛ら激水の堤を決つて大野を横流するが如く、急湍の怒號、淺瀨の囁嚅、おの〳〵の聲を弄して新聞に雜誌に、苟も社會の耳目を以て世に立つものは、半頁にもあれ數行にもあれ、一として筆を之に染めざるなく、染めざるを以て恥となすかの觀あり、凡そ靈界の事に於て此くまでの紛議を重ねる近來又稀有の事ならずとせず、然れども論ずるもの皆能く正鵠を射て誤らず、能く氏が文字を咀嚼し、反覆し、翫味し、そが文字を通じて現れたる否寧ろ文字の奥底に潜在して靈あるものには響かんと待ち顫なる靈微なる情慾の聲に觸れ得しもの幾何ぞ、更に露骨にいへば、

評者の評を聞く綱島氏をして能く齒痒からしめざるまでに透徹し居るものあるか否之なり、夫れ他の說を取つて輕重せんには、他の人格を重んずべき上よりしても、極めて嚴肅なる態度を以て深思精察を惜むべからず、況んや事皆にそれのみならず、苟も一般の信仰に關し、一波は万波、波の及ぶところ、或は直に波岸を打つて命と頼む安立の牙城を無何者の境に溟濛し去るものあるに於てをや、更に謂んや高きに在つて呼號すれば聲十里に聞こゆ、位望名聲共に高くして、一世の瞻仰するところとなれるものに在つては、自ら感じて書齋裡の私語と信ずるものも、空氣の波動は次第に高くして、遂には計らぬ方に洪鐘の響を傳ふることあるに於てをや、今の評者にして這般の顧慮あるものそも幾何ぞ、皆からとはいはず、吾人は其多くに於て餘りの淺見陋識が忌憚なく我は顏に跋扈しつゝあるを悲む、更に想へば彼等の中、未だ氏の著の半頁をも讀さずして、唯他の聲を學んで己れも聲を弄する底のものなきか、蓋し斯程に馬鹿げたるものもあらざるべし、唯斯く言ひて自ら慰めんとするにも、猶ほ何となく斯ゝる微響の鼓膜に觸るゝの惑を禁ずる能はざるを如何せん、蓋し其餘りに無思慮、無造作の說の弱なり、吾人の罪にはあらざるなり

熟ら世評の據るところを窮むるに、立論の根底大槪次の數項に盡くるが如し、

一、說の正邪は兎まれ角まれ靈界の典範は淺人の叩くを許さゞるところ、而かも生産的のことにはあらず、今日多事の時に處して、國民特には青年を驅りて此方面に日を消せしむべからずとする、所謂爲政家的見地よりするもの

二、智と信との性質如何、關渉如何、此等の點に於て眼底未だ一皮膜を脫する能はず、從つて綱島氏が重きを信に置く說に合する能はざるより來るもの

三、讀みてか、讀までか、兎に角、其意に通ずる能はず、自己の偏見に附會して、氏が見たる神を幻影なりと速斷するより生ぜるもの

一に就いては予は論者の意を諒す、然れども靈界のことは思はんとして思ひ得、思はざらんとして思ひ止まるべき、さる任意的のものならんか、外人評して吾人を以て宗教心なき國民となす、然れどもそは唯皮相の見に止まり、其宗教的に煩悶し、苦惱するもの乏しきを見て言へるものならんも、其煩悶、苦惱するなきは、實は幼稚ながらも別個傳來の宗敎あり、知識の幼稚なりし過去に於ては、能く兩者の間に破綻なくして濟まし得たるによるもの、想へ、如何に迷信にもあれ、稻荷堂あり、三峯祠あり、辨才天あり、大黑天ある我國には果して宗教心缺如せるか、此等は我見る穢土以外に別に淨土あるを信ぜざるか、我見る人類以外に別に神靈あるを信ぜざるか、朝に初旭に向つて拍手し、夕に落暉に對して合掌するは何が爲ぞ、家々に佛龕を接き、戸々に神棚を設け、香花酒饌絕えざるは何の故ぞ、彼等は現象以外、形而上に想の及ばざるにあらず、想ひて近きに止まり、富は大黑天に謀り、幸は辨才天に求め、山路の避難は三峯祠に祈り、一身の吉凶は稻荷堂に問ふに安んずるのみ、若し彼等よりそれ等の一切を奪ひ去らんか、彼等能く生を樂み、死を恐れざる

こと長しへに今日の如きを得るか、之を稱して一神教的宗敎心なしといはゞ或は可ならん、敢て宗敎心なしといふものは斷じて妄なり、而かも智識の進步は長くさる多神敎的迷信の上に安立するを許さんや、今や豫言者と呼ぶもの神を見たりと稱するもの、比々相踵ぐもの、之を反映して餘りあり、人にして宗敎心なくんば止む、苟も宗敎心あらんか、所詮は止まんと欲して止むべからず之を沮まんとするは隻手噴泉の口を塞ぐが如く何處にか逸路を見出されずんばあらず、強いて抗ぜば却て其弊を釀さんのみ、而かも此心や、世にある多くの劣慾の如きものとは異なり、それに安立の境地を與へば何等の弊もなく心に動搖なきこと、從來吾人が久しく無宗敎的國民と呼ばれし程の狀態に歸らんのみ、吾人は強いて姑息の手段を取らんよりは、進んで信仰の對象を明示し、國民の信念を強固にして再び一大煩悶の現生活を攪亂せざるの域に達せんことを望む

二は其所說を約するに、智の作用する圈内と信の作用する圈内と兩々符節を合する者、換言すれば智識の鍵を以て信の寶庫をも開き得とするに在るが如し、然れども之れ甚だ誤れる見解にはあらざるか、茫々たる大宇宙に對して五尺の體軀能く幾何の權威を値せんや、智識は經驗に立脚して一步一步に地盤を堅め行くが故に極めて正確なりといふ、されど想へ、あらゆる智識は經驗の範圍に入り來るべきか、先づ縱に時間に見よ、吾人の經驗するところは纔に過去と現在とのみ、一瞬の後は既に茫たり、吾人、人と明日を約して能く其約に安んずるを得るは何によるぞ、熟思すれば全經驗の價に一部を知り得て、之に據つて他一切を律せんこと、果して其謂ふところの正確を期し得るか更に橫に空間に見よ、今前に於て机を見る、其刹那は背後に何あるかを知らざるなり、顧みて紙障を見る、其刹那は前の机の如何の狀にあるかを知らざるなり、更に又顧みれば机を見る、而も其時の机は前の時の机なるか否か、吾人は唯其似るといふ以外に、果して其一なるかは、全經驗を有する根據なきに於ては何を以て固執するを得べき、更に況んや、千歲の後と、万里の遠きと、更に〳〵諸衛星の世界と、想へば我頭浮々として氣球に駕するの恍惚境に任せざるなからんや、否々遠きを追はずも之を尤も近きに察せよ、吾人に幾千の感官ありて能く外物を知覺するか、智識の成るは感官より入る個々の感覺を基とするもの、吾人が假に苹果なる概念を作るとせよ、諸の感覺が吾人の腦裡に入りて統一を得るまでは、唯個々の感覺のみ、知覺のみ、苹果なるものは存せざるなり、色の青きは目によりて知られ、味の甘きは舌によりて知られ、不可入性あるは指の觸るゝによりて知られ、臭は鼻によつて知られ、音は耳によつて知られ、此等箇々の色聲香味的の諸感が腦裡に統一せられて始めて渾然たる一個の苹果の體を爲すにあらずや、然らば苹果は決して吾人が想ふが如くに一體としては外界に存せず、吾人の腦裡に攝取せらるゝによりて初めて形體を具するものにあらずや、換言すれば腦裡に苹果はあるにあらずや、之を先づ眞なりとせよ、而して其推論の那邊に赴くべきかを察せよ、吾人を生盲なりとせば苹果の屬性中より青なる色は去らん、更に味覺なしとせば、甘なる味は去らん、指を麻痺せりとし苹果は苦もなく觸かるとせば、不可入性は去

らん、乃至、鼻なしとせば何處に臭あらん、更に耳なしとせば、何處に音あらん、斯くして萃果の全體は此世に存せざるべし、吾人は幸にして人の有せる如き五感を有せり、左れど人の有せる丈なり、若し人以外の生物ありて更に六感七感八感より乃至十感百感ありとせよ、其萃果の屬性は如何に無限に増大せらるべきか、去る生物あるは認め得ずとせよ、而かも之を以て吾人の有する感官が有せらるべき極限に在りとは斷ずべからず、朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず、知らざる所ある經驗を以て一切を爾なりと斷ぜんこと、全智全能の主宰神より見ば如何ばかりチヤンチヤラ可笑しき言分ならんぞ、朝菌に靈氣を鼓入して彼に宇宙を語らしめよ、蟪蛄に智眼を付與して彼に世界を觀せしめよ、一は月に常住の光を認め、一は日に不斷の熱を信ぜん、豈笑ふべからずや、然かも此笑はるゝもの〻中に吾人も亦存することなきを得るか、智は長しへに此の如し、短き狭き經驗に立脚する智は長しへに斯の如し、好し、更に辨を好むものをして吾人は一切を經驗し得ざるも然も推理の力あり、此力能く智識の範圍を擴め行くを得、今日猶は全體を知る能はずとするも遂には其極に到達すべき性質を有するものなりと言はしめよ、そは一部は眞なり然れども前に縷説せるが如く推理の根底を形くるもの、實に限られたる經驗の範圍にありとせば、如何に擴大せらるとはいへ、そは放射線状の擴大なり、末廣がりに廣がり行かんも左右に必ず殘すところあらん、其角度も亦、吾人が進化の理說によつて更に高等の生物となるに從ひ、擴大せらるゝことありとせんも、そは六十度より七十度、或は百度二百度に達する迄にて決して三百六十度の角に達することはなかるべきなり、嗚呼、實に千年万年待つたとて理性がひたと絶對境に付着することの在るべきぞ、憐れむべからずや、若し吾人に理性以外何ものもなしとせば、猶豫の道を行くが如く、左顧右眄、遂に安立の境地はなかるべし、而かも吾人はそれあるを憂へざるもの、幸に別に信なるもの〻存するによるにあらずや、信は凡てを當局に直觀するなり、抽象せずして具體して見るなり、故に絶對境にもひたと行き着き得るなり、否抱き合ふを得るなり、兩者の性質や實に此の如し、前者は皮を拂ひ肉を去つて唯其骨髓を見るなり、後者は骨髓皮肉、あるが儘にして其全形を見るなり、即ち前者は部分を知るのみ、後者は全分を認む、已に部分に止まるとせば、事々物々何れとして能くそは爾なり、こは斯くありと斷定するを許さん、若し精慮の後に語るべしとせば、過去の經驗に照して大概然るべし、然らんといふの外世に一語ある能はざるべし、然かも吾人が人と約しては季父の一諾千鈞より重しとし、今見る机と前に見し机と一なるを疑はず、將た萃果を以て我に全態を示すものと安んじ居るもの、吾自ら究めず、吾自ら識るところなしと雖も實は知を補ふに信を以てし、その上に安立し居るにあらずして何ぞ、これなくんば、現世は夢幻境なり、何一つ確かなるものはあらず、淡靄模糊の朧夜の旅行なり、何一つ明かなるものはあらず、宛ら鉤大井の下、薄氷の上に立つが如く、背を屈め、脚を縮めて惴々焉たるに終らんのみ、それあるは實に吾人に於ける何等の幸ぞ、去ればとて、予は敢て極力智を排して信に縋らんとするに

はあらず、嚴密にいへば假令斷定を下す能はざるものとはいへ、然かも過去の經驗によつて得たる一切は、能く信の行くべきところを指示し、善導するに於て、又大なる力を認めずんばあらず、唯吾人の慊らざるところは、往々此如何にあせればとて他家を覗ふ盜兒の如く、絕對なる主人の居室には終に得迫らざる者を、斯かる果敢なきものに縋りて一向安立の境を得んとするは百年河淸を待つと何ぞ擇ばん、絕對の境は知の力を超越する遑し、之に代ふるに信の力を以てせんこと何等の怪しむべきにあらず更に之によつて神を見るといふも、亦何の權威あつて是非するを得んや、或は神といふに難ありとするか、そは人々の天分、換言すれば人々個々の內的要求の如何によりて、或は絕對を人格化し、或はせざるに止まり、理論の沙汰にはあらず、此を以て他を非とし、彼を以て此を非とするは甚だ謂れなきことなり、予は此點更に智識萬能者の一顧を望む、

三は、こは淺解ならざれば誤解、誤解ならざれば曲解、之を何れとするも、綱島氏の文字は親切なる注意を拂はず、更に言へば氏の人格に對する十分の敬意を欠き、徒に長廣舌を試むるものと見るべきものあり、予をして一讀過の下直に不快を感ぜしむるものは之なり、而かも斯かる淺人の淺說が最も又他の淺人によりて解せられ易きを思へば、默を捨てゝ晏如たるべきにあらず、恐とは知る々々架說も又巳むを得ざるなり、

氏の見神を以て一向幻影を見たるものとせるが、別に據るところあらば兎もあれ、唯字義に泥んで直に然りと斷ぜしものならば甚だ其斷の妄なるを責めざるべからず、然り、見は見るなり、月を見る、花を見る、多くは是れ感覺の上に用ひらるゝ文字なり、然れども感覺以外別に用ふるを許されざるか、由來精神狀態は、手の觸れ足の踏むが如く、感官を以て感ぜらるべきものにあらず、之に對して別に一々の變化を明示すべき文字あらば格別、なくば勢前者を借り用ふる亦巳むべからざるの數ならずや、試に想へ、吾人は一事に潛念するに當つて思を凝らすといはざるか、凝らすは凝るより來り、元來液體の固結する樣を現すものにあらざるか、又予は今巳に潛念なる文字を用ひたり、此潛なる字も別に潛水器など用ふる如く、元來水底に深く沒入するを現すものにはあらざるか、心裡幺微の變化は往々此等の語を借りて現さるゝに獨り見の字に於て怪まんや、否それにも既に慣用せられ、毫も怪まれざるまでに熟したる語あるにあらずや、恨といふそれなり、恨はうら見るなり、うらは心なり、他人の心を忖度するまでなり、心果して見るを得るか、則、既に痴なるべし、さらば神とは如何、然り、久しく偶像を見るに慣れたる眼、偶像以外に神なきまでに思ひ慣れたる眼には神とし言へば八十種好圓滿なる相を具して、白象に悠駕するか紫雲を驅つて浮遊するかとも想ふべし、そは無理にもあらざるべけれど習性より來れる僻見たるのみ、或は神とは絕對を人格化したるものといふを聞きて、直に縱目横鼻の人間と同じとなすものあらんか、されどそも誤れり、人格化といふこと、必ずしも我と等しき四肢五體を具ふるの謂にあらず、一言にして言へば生ける絕對、血あり涙ある絕對といふに止る、言ふを聞かずや神は眼あれども內に閉

く、耳あれども内に傾くと、鼻や口や手や足や其他は言ふを用ひず、之等は何を意味するか、吾人は小なるが故に外界あり、神は至大なるが故に外界なし、外界あるものは外に向つて用ふるの感官あるべきも、外界なきものは何の用あつて外部に感官を有せん、若し有するの必要ありとせば其神は至大にあらざるなり、神の性質に於て缺くるところあるなり、從つて全智と全能とにも疑はるゝところあるなり、疑はるゝところあるは、吾人の亞なり、牛の牛づれ、馬の馬づれ、神の尊嚴何處にか存せん、更に想へ佛といふにも三身あり、其中の報身佛とは何ぞといふに、身に無量の色あり、色に無量の相あり、相に無量の好あり、所住の依果も亦無量種々の莊嚴あり、示現するところに隨つて即ち邊あることなし、窮盡すべからず、分齊の相を離るとす、即ち假に目ありとなし、耳ありとなさんも、そは無限大に大なるなり、目ありとするもそは無限大に大なるなり、而かも目は耳を妨げず、耳は目を妨げず、一々の色相皆法界に徧して互融無碍なるもの、誠に化身分齊の色に異なりとすれば、之れ直に形の上に於ける耳目を否定すると同じからざるか、何となれば無限に大なるものは絶對のみ、然るに一々の色相皆此の如しとせば空間的位置を定めて固着せる吾人のそれとは全然異なるにあらずや、然り、神といふも佛といふも、達者の眼には皆此の如く認めらるゝのみ、神必ずしも形體あること吾人の如きを要せんや、

然れども征夫萬里の途にあり父母を戀ふるに當り、僅に一葉の小照を探り見れば、思慕の情一層なるが如く、如上の如き人格化の神に更に吾人の如き形體を具へしめて考ふることも又決して理なきにあらず、彌陀を刻み、毘盧舍那を刻むも豈此意に外ならんや、かくて信が打ち込むの極、遂には想像と現實と相混じて、主觀客觀の限界明ならず、其處に幻影と現ずること古來其例乏しからざるなり、綱島氏の見たるは前者か後者か、予は假に之を後者とせんも猶ほ、直に氏を以て精神病者なりとする如き一部の論者の妄に與する能はず、由來幻覺なる者は精神病者に限らるべきにあらず、人爲の催眠術によりても能くそれに誘ふを得べく、然らざるも、現に品川彌二郎氏の如き常に菅公と語りしといへる話もあり、又カーテンに病母の姿歷々と映じ、こは夢か錯覺かと怪しみ、近きてそれに觸るれば、觸れたる部分は微動しつゝも病母の姿消えやらず、慄然として飛び上りぬといふ話もあり、病體ならざるも、思慕の切なる往々此の如きことあるもの、唯其幻覺を幻覺と知りつゝも、そこに現れたるは菅公或は慈母なるを認めば、腔子裡一點の慰めなきを得ざらん事、寢ねて昔を夢に見ん哉と喞つ夜もある情に想及せずや、况んやこは只予が冗説に過ぎず、綱島氏の見神の實驗一篇を取りて、仔細に查察するに、何處にも幻影を見たり哉覺しきところあらざるをや、蓋し幻影を見たりとせば何處にか神の形體を説かざるべからざるに、其眉目の如何、其衣冠の如何、篇中杳として一字の尋ぬべきあらず、否更に用意の周密なる自覺に現れし光耀の神を示さんとて如何ばかりか文字を案ぜられたるぞ、予をして暫く之を拾はしめよ、「爾時優に朧ろなる、謂はゞ醉依の醉ひ心地ともいふべき歡喜ひそかに心の奧に溢れ出てゝ、やがて徐ろに全意識を領した

り。この玲瓏として充實せる一種の意識、この現世の歡喜と倫を絶したる靜に淋しく而かも孤獨ならざる無類の歡喜は凡そ十五分がほども打續きたりと思ぼしきころ、ほのかに消えたり」、「吾れは天地の神と偕に同時にこの森然たる眼前の景を觀たりてふ一種の意識に打たれたり」、「唯だ忽然はつと思ふやがて今までの我が我ならぬ我と相成、筆の動くそのまゝ、すべて一々超絶的不思議となつて眼前に輝きあるを感じたり」、「されば予をして今一度最も嚴密に件の意識を言ひ表はさしむれば、今まで現實の我として筆執りつゝありし我が、はつと思ふ刹那に忽ち天地の奥なる實在と化りたるの意識、我は沒して神自らが現に筆を執りつゝありと感じたるは意識とも言ふべき歟」、「予はわが深き至情の宮居にわが神在しぬと感じて幾たびか心躍りけん、吾見たる神は最早向きの因襲的偶像、又は抽象的理想にはあらざりし也」等、一々舉げんに限りもあらじ、而かも何處にか所謂幻影と見るべきものある、特に最後の數句に至つては如何に心地よきまでに文字の明晰なるぞ、因襲的偶像とは何ぞ、抽象的理想とは何ぞ、神的に見る實在ならぬと同時に迷信的偶像、それにもあらず、信の輝くところ、一草一木皆摩尼珠の妙光を放つ。そこに神の姿を觀じて心跳を禁ぜずといふまでにあらずや、猶ほ二三句、引かざらんとして止まれざるものあり、「基督の信は常に裏に神を見、神の聲を聽けるより來り」、「こゝに謂ふ見るの義がかの基督の一弟子が手もて再生の基督の肉に觸れて、さて始めて彼れを見たりとせるが如き官覺的淺薄の意味ならざるや論なきなり」と、噫ましの徒よ、須らく眼を括つて過教の文字に對せよ、更に次なる文字に見よ、「吾が見たる神は、常に吾れと偕に在まして其見えざるの手を常に打添へたまふにあらずや」と、予は筆に疲れたり、多くは言はず、唯それ咀嚼し反芻し、翫味せよ、「其見えざる手を常に打添へたまふにあらずや」の一語、予が見たる神は如何。

斯くも所説は明瞭なるに、精讀して義を誤らず、細察して眞に至るを勉めず、一概にそが見たる神は幻影なりとし、中には我は醫家なりと名乘りて、精神病理的に論斷しさらんとするものすらあり、輕卒も亦甚しからずや、或は氏が病者なるよりして漫に推斷し、病者の宗教は自ち偏見あり、豈以て健康者に強ゆべけんやといひ、或は病者は成功を急ぐものなりとて暗に氏が已み難き心響以外何者かの爲に動かされしが如く誣ひ、或は氏が見る神は普遍的性質を有する實在の人格化にして、神といひ佛といふ、元名詮の沙汰なるを氏は見神といひ、近角氏は見佛といふ、此を以て彼を否定し、見神のみが世界の奥底に達し得たる狀態とは言ひ得ざるべし。或は基督の見たる神と氏が見たる神と同じといふ事何によつて證せらるゝかといひ、氏が神と我との相即微妙の關係を親子の二字にて言ひ現せば、己れ一人神の寵見なりとするが如き口吻は何ぞと罵り、信は情の上に立つもの、情は一高一低一起一伏の波動あり、其最高潮に當つて現ずる神の姿極めて赫奕の靈光を放つは當然なるに、大悟の境には常住の見神なかるべからずと嘲る等、囂々紛々聞くに堪えざるものあり、何すれぞ爾く輕躁浮薄なるや、

而も千言萬語盡く空中に向つて空丸を放つが如きもの、氏が所說に對しては蚊虻の鐵牛に於けるが如く、又何等の痛痒をか感ぜん、唯夫れ天下幾多の人士の之に由つて誤らるゝことなきかを恐る、輕躁浮薄の說、十年去つて更に氏が病間錄一篇の文字に參し來れ。



獨歩論

文學士 沼波瓊音

余はこゝに敬んで文士國木田獨歩子を論じようと思ふ。蒙昧にして人の數にも數まへられない余の如き者が、子のやうな偉大崇高の人を論ずるのは、いかにも僭越至極のとではあるが、余が子に對する崇敬、熱烈なる崇敬の意が自ら迸發してこの論を成したのである。余は小學の兒童の頃から總べての文藝の中で最も小說を酷愛し來つて今日に至つた。小說に養はれ小說に醉ひ小說に敎訓され小說に慰藉されて今日に至つた。ところが近頃になつて實は小說に飽きが來た。面白いと思ふのは澤山ある、巧く書いてあると思ふのは澤山ある。併し余はたゞ面白いたゞ巧いといふだけては滿足が出來なくなつて來た。それぢや何んなのならば良いのかと問ふ人があつても、余は注文を出すとは出來ぬ、たゞ〳〵物足らなくて、慊らなくて、淋しくて耐らなくなつて來たのである。然るに去年の八月一友人を訪うた時、其の友が「君、獨歩も良い所があるよ」と言つて獨歩集を示した。余はそれまで國木田獨歩といふ名はよく雜誌なんかで見たとはあつたが、まだ其の作物を讀んだとが無かつた、讀むべき價値も無からうと唯思つて居たのだから、今獨歩集を手にしても、たゞ輕くパラ〳〵ッと般若經の轉讀のやうに手まさぐつたが、其時ふと、八十二頁の第一行、「宇宙の不思議を知りたいといふ願では無い、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です!」といふのが目に着いた、目に着くといふよりは胸に響いた。この時是非獨歩集を讀まうと思つたのである。この語が第一行にあつたといふ偶然の事實は余にとつて大なる天惠であつた。この爲に忽ち余をして注意せしめ、獨歩集を讀ましめ、

運命を讀ましめ、而して余の感じた小説界の淋しみを拂ひ去らしめたのである。

余は獨歩集を讀んだ。運命を讀んだ。熟讀した。再讀した。三讀した。或篇の如きは四度も繰返して讀んだのである。爲に余は大なる滿足を得た。滿足とばかりでは言ひ足らぬ。實に有難く感じた。信徒が其信ずる所の神佛の前に禮拜して涙に咽ぶのと同じだと思はれる感がむら〳〵と湧き出てた。崇敬の意を表する爲に肉體を欠損する事が必要であるならば、余は獨歩子の前に喜んで腕を斷ち喜んで脚を斷つ者である。紅葉の小説も立派だ、露伴の小説も立派だ、併しそれを讀んでる時、紅葉が斯く言つて居るのだ、露伴が斯く書いて居るのだ、といふ事を覺えて居た。それは當然の事であるが、獨歩子の小説を讀む時は獨歩子の語獨歩子の文たるを決して覺えない、其の作中の人物出來事を直に事實の如く感ずるといふのでも無い。余は實に余自身の語余自身の文たるを覺えるのである。余の腦中に或想の如きものが煙の濃いやうな有樣でまだ一の塊まつた想になつて居ないのが種々ある。それが、その同じ物が、子の作中に明なる形を具へて居る。これに感じて煙の如きものは忽ち凝つて同じ形の想を成ず。讀むに從つて煙が凝つて行く快味妙味は云顯はすとが出來ない。讀み了へて始めてそれは獨歩子といふ余以外の人の作といふ事に氣が着く。この明なる事實が時には解せられぬ、信ぜられぬのである。或一箇の人が分れて、その大なる高い部分が獨歩子となり、小なる低い部分が余瓊音になつたのだといふやうな妄想が、理の當然の事のやうに感ぜられるのである。獨歩子がこの世に存在し獨歩子が小説に筆を執る間、余は總べての世の不快總べての不平に堪へ得るのである。余は斯る人士の作物を了解し得る日本人たる幸、斯る人士と時代を同じくして生を受けた幸を天に向つて深く〵感謝する者である。

余は獨歩子に遇つたとは無い、子の言行も知らない、子の履歴も知らない。たゞ獨歩子に就いての余の知識は獨歩集と運命の二書のみである。この二書のみに依

て子の如何なる人たるかを明に知り得たと信ずるのである。

獨歩子は自然の刺戟を非常なる度にまで受ける人である、受け得る人である。自然の刺戟を強く受けるといふのは詩人の必要なる資格である。苟くも文藝の述作に從ふ人は誰しも多少この資格を具へては居る。併し獨歩子の如く非常なる刺戟を受ける人は他にはあるまいと思ふ。「酒中日記」の今藏が、拾つて隱して置いた提革包を取りに出た時の夜景を叙して、「この寥々として靜肅且つ壯嚴なる秋の夜の光景が身の毛もよだつまでに眼に沁みこんだことである、今も其時の空の美しさを忘れない、そして見ると善にせよ惡にせよ人の精神凝つて雜念の無い時は外物の印象を受ける力も亦た強い者と見える」と記したる。「空知川の岸邊」の汽車の窓から林を見たる感想を「斯る時、人は往々無念無想の裡に入るものである、利害の念も無ければ越方行末の想も無く恩愛の情も無く憎惡の惱も無く失望も無く希望も無くたゞ空然として眼を開き耳を開いて居る、旅をして身心共に疲れ果てゝ猶ほ其身は車上に搖られ、縁もゆかりも無い地方を行く時は、往々にして此くの如き心境に陷るものである、斯る時はからず目に入つた光景は深く腦底に彫り込まれて多年これを忘れないものである、余が今しも車窓より眺むる處の雲の去來や樺の林や恰度それであつた」と記したる、同篇の「怒濤暴風疾雷閃電は自然の虛喝である、彼の威力の最も人に迫るのは彼の最も靜なる時である」といふ所、及び「日の出」に日の出の光景を教訓とせる學校を描きたる等を見れば、子は唯自然を見るのに、客觀の位置に立つて其れを賞するとか愛するとかいふ人では無くて、眞に自然其者に接し得て、自然の無聲の語を解し得て、或は自然に叱られ、或は自然に敎へられ、時として自然と我と全く一つに融合つてしまふ人である。斯る子であるから、自然そのものゝみに感じて涙を落す事がある。「惡魔」に、「斯くて又少時、われ卒然眼を轉じて四邊を視たり、あゝ何の力ぞ、我は此刹那に於て君子（きみこ）を忘れ一切を沒了して、たゞ夫れ天地悠々

我が生の此無窮なる空間に繫がれるを感じ、堪へ難き哀愁泉の如く湧きぬ」とあるは直ちに是れ獨歩子の或時の感と信ずる。この文にある哀愁といふ文字はよくこの折の感を其儘に顯し得るものでは無いが、人間の造つた文字の中で全く恰當のものが無いので、より近いこの文字を借りて推想せしめたのと思ふ。哀愁といふやうな、人が深く不滿足を感ずる折のものでは無い、世間内のもの丶總べてが決して起させ得ない一種の感てある。芭蕉が出雲崎から荒海を望んで「魂けづるが如く腸ちぎれてそゞろに悲び來れば草の枕も定まらず墨の袂何故とはなくて絞るばかりになん侍る」と言つた、その時の感が是れてある。何故とはなくて涙が流れ出づる時の感である。この感、この感を獨歩子の如く痛切に起こし得る人が今果して他にあらうか。

獨歩子は宇宙の不思議なることを知得して居る人てある。こゝに不思議といふのは普通の奇といふ意てはなくて、文字通りの「思議すべからず」といふ意てある。宇宙が不思議だといふ位のとは詩人て無くても殆誰ても知つて居るては無いかと言ふ人があらう。併し多くの人はたゞ不思議だと言放つだけのとて、よく其の不思議に安んじて居るので、天一の手品の不思議さと大差なく思つて居る位なので、その不思議を耐へ得られぬまで感ずる程世間を超脱し得る人は決して多くは無い。天を仰いて不思議の感に堪へずして半時許も泣いた六歳の山陽はこの人てあつた、しかし彼はたゞ天、星そのもの丶みの不思議を知つたに留まる。獨歩子は天、星、といふやうな狹い定まつた對象ので無く、全宇宙の不思議なるを知り、耐へられぬまで知つて居る人てある。不可解を叫んて五體を轟々たる華嚴の瀑に碎いてしまつた藤村操はこの人てあつた、しかし彼が宇宙不可解の煩悶を死によつて癒し得ると信じたのは淺薄だ、又其の煩悶に負けてしまつたのは小さい弱い。わが獨歩子は死と生の間に其處に大なる差違あるを認めて居ないのてある。「惡魔」に、「自殺して終に如何、生と死に何の相違ぞ、宇宙はあらゆる法則なり、死するも生くるも我等この法則の外に脱がる丶能は

ず、死は吾等を運びて宇宙の外に持去るかの如き感想を懐くことは自殺者及び死を輕視する者の總べての誤謬ならずや、われ此處に嚴存す、宇宙は全體なり、あゝ我れ此存在を如何すべき、死するも生くるも遂に此存在の事實は人の力もて打消し能ふべきに非ず、在るものは如何しても在るなり、あゝ我、不思議なる哉」と言うてあるては無いか。故に獨歩子は無益なる自殺をしない、宇宙の不思議を耐へ得られないまで感じつゝ、その耐へ得られないのに耐へ得て居るのである。「牛肉と馬鈴薯」の岡本誠夫をして、「惡魔」の淺海謙輔をして、獨歩子は遺漏なく宇宙に對する己が感想を縷述せしめて居る。「必ずしも信仰そのものは僕の願ではない、信仰無くしては片時たりとも安んずる能はざるほどに此宇宙人生の秘義に惱まされんことが僕の願であります、寧ろ此使用ひ古るした葡萄のやうな眼球を剜り出したいのが僕の願てす」、「ヤレ月の光が美だとか花の夕が何だとか星の夜は何だとか要するに浴々たる詩人の文字はあれは道樂です、彼等は決して本物を見ては居ない、まぼろしを見て居るのです、習慣の眼が作る處のまぼろしを見て居るに過ぎません」（以上岡本誠夫の言）、「山を下れば社會あり、天地生存を自覺せる余も社會に入ること分秒、忽然として社會の一員となり了しぬ、しかも遂に我靈を震動したる痛烈なる感想を忘るゝ能はざるが故に苦惱する余は悲慘なる哉」「アヽ不思議！此處は何處だ、宇宙だ、自分は此大宇宙の一部分だ、生命よ生命よ、此生命は此宇宙の呼吸である」、（以上淺海謙輔の言）、等その外拔萃し得られない程澤山の會心の句がある。余はこれ等を讀んで余は實に會心の快に感じて涙の滂沱たるを禁じ得ないのである。しかもなほ岡本をして「矢張り單にさう言ふだけですよ、矢張道樂でさア」と言はしめ、謙輔をして、「說教を止めよ云々されど之れも亦た余が說教にあらざるか」と言はしめたのは、莊子に「いかんぞ吾が所謂知るの知らざるに非ざるを知らんや、いかんぞ吾が所謂知らざるの知るに非ざるを知らんや」とあるのと同一の意義ては無いか。予の斯く感じたるは余をして

愈益崇敬を拂はしめた所以である。

獨歩子も總べての詩人が然る如く、戀愛の偉大なるとは認めて居る。併し一度眼を放つて宇宙の大觀を見、其の秘義に接する時には、眇たる戀愛の如きは振捨てゝ顧みないやうになる、といふことを主張する人である。進歩した明治の文壇でも、小說家の多くは（若年の人であつた故か）、人生即戀愛、戀愛即人生、人間はたゞ戀をする爲に生れて來たものだといふやうな思想を臆面なく其作物の上に露はして居る。だから失戀の結果としては、死若しくは狂、然らずんば自暴自棄の生活を描くのである。時に理性の滿足の爲に戀の煩悶を忘れた人を描いた作家はある、事業に獻身して戀の煩悶を忘れた人を描いた作家はある、併し戀の煩悶から對宇宙の煩悶に飛び移り得た人を描いたのは、實に吾が獨歩子を以て嚆矢とするのである。「牛肉と馬鈴薯」の岡本誠夫、「惡魔」の淺海謙輔、布浦武雄は實に斯る人であるのである。その中、岡本は飛び移りたいと踠く人であるが、岡本の如く踠くのは既に〱對宇宙の煩悶に移り得て居るのである。謙輔は戀愛と宇宙の爲に兩面から同時に動かされて居たが、彼が宇宙に其顏を向ける時には他面の戀愛は全く忘却してしまふのであつた。武雄は戀愛に對しての煩悶を深く嘗めないうちに、謙輔の感化を受けて對宇宙の煩悶に飛び移つてしまつた而してその煩悶を得たことを決して悔いないのである。これ等の人物は直ちに過去及現在の獨歩子其人であるに違ひない。恐らく獨歩子は斯る經驗を自らした人であらう。嘗ては戀愛から湧いて出る甘みを味ひ、又苦みをも嘗め盡して、而して戀愛から解脫し、世間の人たる境遇から解脫して、全く大宇宙の人となり得た人である、と信ずる。それで無くては「牛肉と馬鈴薯」「惡魔」の如き小說はとても出來ない。作らうと思つても作れない。獨歩子が小說を書く動作を、「作る」といふ語を以て顯はすのは甚だ不當である。

獨歩子は己が就いて居る業に大なる趣味を以て、眞面目に、獻身的に、其れを成す人に對して多大の同情多大の尊敬を拂ふ人である。「非凡なる凡人」の桂正作、

「日の出」の大島伸一先生等に對する獨歩子の熱誠なる態度は明かにこれを示して居る。「巡査」の山田銑太郎と「酒中日記」の大河今藏との性行の或部も亦た桂、大島と同じである。巡査、小學敎師といふやうな、外見は卑い位置に居ても、其業務に着實で、確乎として眞誠なる者を、獨歩子は高しとし大いなりとするのである。「巡査」の部屋を寫して、「疊は黑い、障子は煤けて居る、成程むさくるしい部屋であるが、これ又何處となく掃除が屆いてサッパリして居る」と記し、「非凡なる凡人」の部屋を寫して、「疊も黑く、壁も黑い、けれども云々、周圍の物總べてが皆な其處を得てキチンとして居る」と記した、この部屋の、外見は汚なくても其處に儼たる秩序があるのは、頓て獨歩子が尊む人物の心の狀態ではあるまいか。

獨歩子は大體に於て女性を冷やかに見下す人である。日本では明治になつて女性を見上げるといふ傾向が出來かけて居たが、昨今になつては、また女性を見下す思潮が顯はれたやうである。歐洲でも近頃この思潮が認められるやうである。余は思ふに、日本人は昔から女性其者をよく／＼知悉して居て、女性に對しても甚自然な正當な態度を取つて來たものである、明治になつてからの見上げる傾向は單に歐洲の模擬を一時して見たに過ぎない。歐洲は昔から女性其者を買冠つて來て無暗に崇め奉つて居たが、近頃になつてやつと目が開いて來たのではあるまいか、これは余の憶測である。それは兎に角余は今日に於ては子の女性觀に同感の聲を擧げる者である。「牛肉と馬鈴薯」の近藤は「女といふ奴が到底馬鈴薯主義を實行し得るもんじやアない、先天的のビフテキ黨だ、恰度僕のやうなんだ、女は芋が嗜好きなんていふのは嘘サ」と放言して居る。「第三者」のお鶴は其最期を遂げる時の外に於ては、普通女性の代表者として繰反し侮られて居る。「惡魔」の君子の如きは默々の裡に痛快に罵られて居る。余は女性には男子に得なれない美質のあることを確に認める、併し先づ女性の見下げるべきものなることを十分に悟つた後でなくては其の眞の美質を認めることが出來ない。こ

れは不合理に似て決して不合理で無いのである。

獨歩子は文章に於てまた大に特色を持て居る。慣用の語を假りて言へば直截である。非常なる直截である。小氣味のよい直截である。子は文の修飾の爲に想を枉げるといふやうな愚劣な事は斷然しない。余は嘗て三宅雪嶺氏の演説を聽いたことがある。氏は實に訥辯で辛々つと三音四音位づゝしか一口に言ひ得ぬ人である、しかも一口言うて次の一口が出るまでは可なりの時間がかゝる、だから語に文（あや）を附けるとか聲を抑揚するとかいふとは迚も出來ぬ。然るに氏の發することの語の斷片は一々大なる意味を成して響く、聽衆は實に身を躍らせて喝采するを禁じ得ないのであつた。或人は氏を訥辯なる雄辯家と評して居た。カーライルの演説も斯くの如きものであつたといふとである。余は獨歩子の文章を讀んで雪嶺氏の演説を直ちに想起したのである。飾り氣の無い短文の連續て、しかもその一字一字悉く靈があつて讀者の肺腑を貫くのである。行き倒れの掲示見たやうに人相服裝持物を審らかに列べ立てることを獨歩子は更にしない。眼目とする所と何等の關係も無く、全く不必要な事柄を、唯々自分の在る事柄に通じて居るを誇示する目的のみの爲に、敘述するといふやうなことを獨歩子は更にしない。獨歩子の文は實にキビ〳〵して居て、厭味といふものは藥にしたくも無い。豐富絢爛の文を作る人は決して少なくないが、子の如き直截簡素な文を作る人は他に見ることが出來ぬ。

獨歩子の小説中余が絶大の作と信ずるのは、實に「牛肉と馬鈴薯」であつて、これに次ぐのが「惡魔」である。それから「富岡先生」「第三者」「少年の悲哀」「酒中日記」「空知川の岸邊」「非凡なる凡人」「日の出」いづれも秀でゝ居る。すべてこれ等の小説は或は小説以上のものかも知れない。余の一友は「小説は美術である。事を描くに必ず美化しなければならぬ。獨歩はこの美化といふ事に注意せぬ。小説は慰籍である。煩悶を描いても必ずこれに解決を與へなければならぬ。獨歩はこの解決といふとに注意せぬ。だから獨歩の小説は讀んで不

快の感の殘るのが多い」と。余は言つた、「美化は欺きだ。欺かれて居るといふとも愉快には違ない、欺く作家も必要に違ない。併し我々は欺かれ通して居るとは不滿足である不平である不快である。三歳の小兒でも似寄つた方法によつて、いつまでも大人に欺かれては居ぬ、况んや我々に於てをやだ。欺きなるとを認識して居ながら、なほ欺かれるとを、いつ〳〵までも愉快に思ふとは出來ぬ。こゝに於て眞摯なる欺かざる作家を要求したくなる。この要求に應じたのが即ち獨歩子であるのである。君は解決を叫ぶ、解決によつて慰籍されようと思ふ、淺い哉。解決も亦欺きではないか。凡そ自然といはず人事といはず、宇宙に解決の出來るものが何がある。霞雲說によつて諸星運行の狀態を解決し得たといふやうな、そんな解決を君が望むなら、そんな解決で無理遣りに森羅萬象を、小さな君の腦に押詰めようとするなら、そんな容易い希望は無い。そんな解決は道傍にても轉がつて居る。僕は、少なくとも僕は、そんな解決は顧みぬ。獨歩子が解決を與へない、それこそ眞の大解決と僕は思ふ。君は孔孟の言に明かなる解決があつて、老莊の言に更に解決が見出されぬといふ輩(てあい)か」と。たゞ面白くてお慰みになるものでなくては小說とは言へぬならば、余は獨歩子の作物を小說以上の作物と言ひたい。

以上數ヶ條余は口を極めて獨歩子を讃嘆した。しかし條をいかに重ねても到底余の所感の斷片に過ぎぬ、全體では無い。人の言語、人の文字は全體を顯すには不適當なものである。この論を讀む人はこの斷片から全體を推して貰ひたいのである。去來の「應々と云へど叩くや雪の門」の句を見て、木節が大に驚き、手を打つこと數十、跳り上りて狂するが如し、近來の耳を洗へり絕唱々々と稱したとある。余が獨歩子の作を讀んだ時には、まさにこの通りであつた、といふことを自白する。

世には人の性行に非難すべき點があるが故に其人の大論名作をも棄てゝ顧みない者がある。哲理論の大著を成した某氏が頃日賭博をしたといふので、其大著を

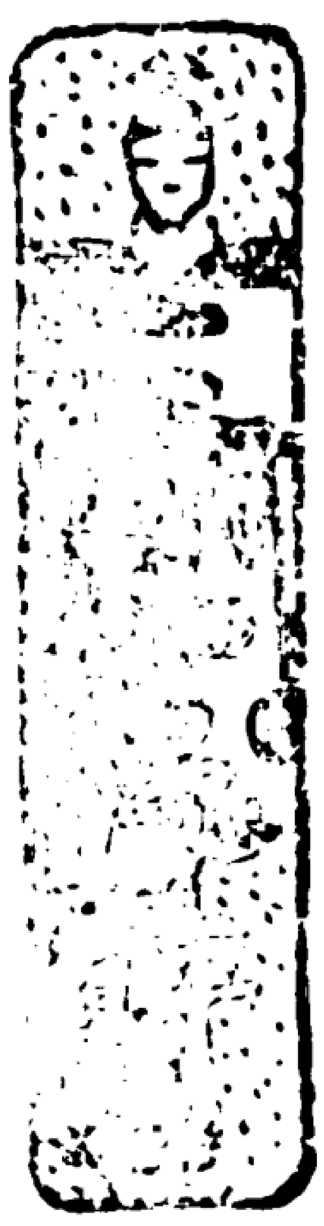
有難くないものだと言つた者があつた。余は斯る偏狭なる態度を斷じて取らぬ。今日に至るまで余は獨歩子の性行に就て何事も聞いた事は無いが、若し今後子が泥棒をしたといふとを聞いても、强姦をしたといふとを聞いても、放火をした、人殺しをしたといふとを聞いても、獨歩集、運命、の作家たる獨歩子に對する崇敬の意は更に〱動かぬといふとを此處に誓つて置く。

眼識の廣い諸先生は、泰西の文學の盛麗なる事を說いて、日本などは駄目だと仰せられる。併し余は嘗て文の人井原西鶴翁を生み、今想の人國木田獨歩子を生んだ日本の文壇の光榮は、全世界に誇るべしと斷言して憚らぬ者である。

（をはり）

僕の好きな俳優

醉美生



はしがき

此頃は大分俳優熱が盛んになつて來た。「都新聞」は本月十五日から「俳優三傑の投票」を募り、「毎日新聞」は仝廿日から「日本俳優投票」を初め、何れも日々之が爲めに新聞の半面を割いて居る。このやうなことが果して俳優の奮闘、劇界の刷新を促し得るや否やは疑問であるが、兎に角演劇に對する社會の注意を喚起するといふ功德は確かにあることゝ信ずる。又若し投票にして眞によく手腕のあるエラ物を選擇することが出來たならば、俳優共も社會の藝術眼の盲ならざるに氣が附き、從て藝道を勵むやうにならぬとも限るまいと思ふ。然るに實際の投票の状態如何と見るに、今日迄の所では實にアキレル程見當違のことをやつて居る。殊に「都」の方はテンデお話にならぬ。下町あたりの教育もなき通がり連が、嘗て手拭の一筋も貰うたことある緣に引かれて運動でもするのか、頻りに大根や人[illegible]の投票のみが殖える。「毎日」の方は「都」よりか、いくら上手のものゝ投

頭もあるが、それでも僕等の見る所を去る頗る遠い。僕は所謂劇通てないから古い型とか何とかいふ細かしいことは一向に知らぬ。が芝居は田舎に居た時分から好きて、東京へ來てからも可なりに見た。のみならず自分ては兎に角一個の藝術眼を以て見て居ると已惚れて居る。だからどうも新聞の投票を見ると齒痒くて堪らぬやうな氣がする。こういふ時に僕の好きな俳優の短評か試みて、讀者諸君の所見と一致するや否やを問うて見たいのも、决して無理なことてはあるまいと思ふ。

(一) 高田實

今の俳優の中て僕の一番に好きなのは此人だ。曾ては新派中の成田屋といはれた此人も、此頃は頓と評判を惡ろくして、「高田の藝の底が見えた」「千遍一律だ」「銅像式だ」「ヌーボー式」などの惡口も頻りに聞えるが、僕はどうしても此人が好きだ。勿論高田にゝ多くの缺點がある。餘りに唯我獨尊的て、他の俳優を屁とも思はず、常に相手を呑んで了うて、自分の一人舞臺にしやうといふ野心は確かに宜しくない。又餘りにやり過ぎて却て滑稽の感を起させる所も間々ある。且つ所謂腹藝を見せんとして餘りにヌツキラペーになり過ぎて、却て其腹がわからぬやうになつて了ふ時も决して稀てはない。如何に高田贔屓の僕と雖も彼に多くの缺點のあることは充分に承知だ。けれども缺點は缺點て、長所は長所だ、缺點あるの故を以て長所までも葬らんとするのは確かに暴なざれば愚だ。況んや高田の長所は高田獨得の長所て、新舊兩俳優を通じて何人と雖も及ぶべからざるの長所てある。是をしも認めぬといふ人があらば、僕は其人に向て直ちにいふ。汝は盲目だ、汝は到底演劇か批評する資格なしと。眼を開いて高田の藝か見よ。彼は必ず時に其扮して居る眞の人物となつて、腹のドン底から絞り出すやうな聲を出し、胸の眞底から自然に湧き出るやうな感情が、其動作の上にありありとあらはれる。涙が妙に腹の中から込み上げて、芝居を見て居るといふ感が何時の間にか消えて了ふ。かく人の頭を抑へ、胸を抑ふるコンマンヂング、パワーある、權威ある技藝を演ずるものは、高田の外に斷じてないてはないか。勿論彼と雖も常にさう甘くはやれない、之をやり損つた時は所謂高田式となつて、批難者のいふが如き嫌やな感を起さしむる時も少くない。けれども一日の中一度ても、一幕の中一言ても眞によく其人物の性格をあらはすことが出來れば大に褒めてやつてもよいと思ふ。彼の失敗は失敗と雖も恕すべきの失敗てある。之を何の工夫もなく、己れが扮して居る人物の性格も分らず、鸚鵡の如く人形の如くいひ且つ動いて居る紛々たる今の俳優中にあつては大に恕して可なりと思ふ。否大に褒めてやつて可なりと信ずる。彼は自ら標示すること頗る高く、傲然として一世の俳優を眼下に瞰下して居るやうな男てあるから、若し「部」の三傑中に入らなくつても、「毎日」の幌馬車を貰はなくつても、彼は別に不平もないてあらう。百年則ち公論あるべきを信じて靜かに世評を傍觀して居るか、今も何處にか眞の知己あるべきを信じて居るか、若くは今の見物人のまだまだ目の低いのを笑て居るか、何れにしても彼は左程力を落すまいと思ふが、我社

會の觀劇眼が甚だ幼稚で、山口定子とか、坂東一鶴とか、中野信近だとかいふ連中（僕の書きつゝある日には此三人が「都」の俳優三傑である）の人氣ある世では、理想劇場も何もあつたものでないと思ふ。若し細かに高田の藝評をやつて、一役／＼について批評を加ふれば雜誌の十頁位は譯なく書ける。がそれは其役々を見た人でなければ面白味が薄いし、役々を見た人には以上の總評で充分であらうし、又餘り長くなり過ぎて他の人との釣合がとれなくなるからこれでやめる。

（二）市村羽左衛門

今の舊派の中で一番見應へのあるのは此人である。彼の近來の上達は眞に驚かるゝ許りである。僕が三年前初めて彼を見た頃には科白が餘り悠長に失し、所作が餘り緩徐に流れ、高麗藏よりは遙かに見劣りせらるゝやうに思はれた。が彼の手腕は一役毎にメキ／＼と上つて、科白の角々は抑揚緩急の妙を極め、今では悠長が却て其抑揚緩急を引立たしむる功があるやうに思はれ。動作の角々にも型がキチンと極まつて、今では緩徐が却て其極まつた型を目立たしむる助をなすやうになつた。高麗藏は妙に金太郎の地金を出して、セヽコマシク、窮屈で、餘情も餘裕もなくなり、舊俳優としての彼の前途は到底發達の見込がないやうになつた（新俳優となつた所であの高濱男や川島武夫のやり方では駄目であるが）に引き代へ、羽左エ門はズン／＼腕を上げて舊派のクラシカルの美を發揮し。大きいことは大きいが働のない八百藏を凌ぎ、達者なことは達者だが別段旨味のない猿之助を後にして、殆んど立役としては彼に及ぶものなき有樣となりつゝある。彼の身體の作りが華奢に過ぎて頭が少く、顏が細いといふ體格上の缺點は、高麗藏の苦み走つた、男らしい容貌と體格とに比ぶることは出來ぬが、技藝の點に於ては確かに二三段の差異を生じて居る。のみならず今日までの有樣で進めば全く比較にならぬ程の相違を生ずるに極まつて居る。彼の勘平を見、彼の實盛を見、彼の源太を見たものは恐らくは僕と全感であらうと思ふ。只彼に惜むのは形に於て成効して居る割合に人物の腹が少しくわからぬ所あるらしく思はるゝ所にあるが、然し完きを人に求むるのは酷に失するのであるし、又彼尙春秋に富むの身であるから、長い間には此點に於ても其足らざるを補ふの道を講ずるであらうと樂んで居る次第である。

（三）市川女寅

今の舊派の女形で僕の最も好きなのは此人である。眞に人物の腹がわかつて、技藝以外人を感動せしむる力を有して居るのは此人である。僕は青柳有美氏の如く彼を以て日本第一の俳優であるとは斷言は出來ぬが、少くとも今の女形の中で僕の一番好きな人であることは誰憚らず公言して居るのである。今の女形の中には見所のあるものが決して乏しくない。芝翫は淀君とか、政岡とか、重の井とかいふ御殿物をやつて坐て居れば確かに充分の貫目と品格のある點に於て日本第一の女形である。然しながら彼の長所は人形的長所であつて一度聲を擧げ、一度手足を動かせば到底形に添ふやうな藝をなし得る力がない。源之助は傳法肌の役を演じては是れ亦日本第一の人である。彼の藝者かしくを見、切られお富を見、

般若のお数を見たものは其粋な、物凄い程艶な、且つは仇つぽい藝風に感心せざるを得ぬことゝ思ふ。が長く淺草邊に居つて源ちやんなどゝおだてらるゝせいか、何時の間にか藝が俗受けになつて、左程熱心にやらぬやうになり、僕等から見ると慊らず思はるゝ事が澤山ある。のみならず彼は悲哀悲壯などゝいふ狂言になると丸て駄目て、到底人の涙を要求する力がない、だから僕の如き寧ろ悲劇の方に多くの興味を有して居るものから見れば左程贔負にする譯に行かぬ、梅幸も確かに侮るべからざる腕がある、彼の累は確かに僕をして感心せしめた、又色ぼい、粋なものには時として成効する。けれどもよく人物性格を呑み込まぬ爲めか、どうも僕は好きだといふことが出來ぬ。其他訥升もさうわるくはあるまい。あのねば／＼した調子とジャラクラした態度とは僕の好まぬ所てあるが決してわるい女形とはいへまいと思ふ。然しながら要するに以上の數人は只々藝の人てある、多年磨き來た藝が素人の及ぶべからざる妙に達して居るといふ丈けてある。たゞ夫れ丈けてある。だから彼等を見て居る時は、あの役者は旨い、彼所はよく出來たといふ感情に過ぎぬ。眞に人の肺肝を動かし、身はさながらに劇中の人物となつて、劇中の人物と相抱擁し、彼は我か、我は彼かの境に至るやうなことは殆んどない。其處に至ると我市川女寅は確かに今の女形中唯一のエラ物てある。若し彼と角すべきものを求むれば只一人の澤村宗之助あるのみてあるが、宗之助のことは後にいふ積てあるからこゝにはいはぬ。女寅の戸浪を見、千代を見、宮城野を見、相模を見、時姫を見、お関（酒屋の）を見、蜻蛉を見て居ると涙頻りに落ちて我は芝居を見て居るといふ氣がなくなつて了ふ。是れは彼がよく其人物となつて、技藝以外眞に其人物の感情を以てやつて居るといふ理由に外ならぬことゝ信ずる。彼の顔骨は高くて決して美貌てはない、又一體の様子が貧相に見える。宮城野の時などは安格子の女郎のやうに見えるとの批難があつたが、これも左程否定せられぬやうに感ぜられる。けれども彼の演ずる處を見て居ると、何時の間にか人心を魅し去て少し位の缺點は目に映ぜぬやうになる、僕は常に彼をして袖萩やお谷のやうな役をやらして見たいと思うて居る。聞く所によれば彼はなか／＼の慷慨家て、成田屋のものてあつた歌舞伎座が、今や音羽屋派の勢力の下にあるのを憤慨して居るとのことてある。彼が歌舞伎座を脱したといふのも恐らくは此邊の消息があるてあらう。彼は今明治座に入て莚升を助けて居るのは多少の義俠心にもよることてあらうが、東京座と掛持をすることを廢して、何れかの一方て腕を揮うた方が彼の爲め、且つ劇壇の爲めてあらうと信ずる。

（四）伊井蓉峰

僕は眞砂座に行て見ることが極めて稀なので、伊井については詳しいことは知らぬ。が高田を成田屋とすれば伊井は音羽屋てあるといふ一部の批評は確かに動かすべからざるものと信ずる。僕が見た丈けの三四の役について考ふるもこの批評が當て居ると思ふ。彼が技藝に細かに意を用ひて居るとはどの役を見てもわかる。注意して見れば一擧手一投足悉く細心の工夫を經て居るもの丶やうに思はるゝ。のみならず彼の藝風に

は、しつこい、臭味な所がない、非常に工夫を凝らした技藝でもアッサりと餘り目立たぬやうにやるのは感服の至りだ。藤澤などは十段も廿段も違ふ。僕をして言はしむれば藤澤などは全く俳優の資格がない。彼が今日の名を成したのは僕にとつては奇蹟の一つだ。木村周平はチョット見所のある俳優であるがまだ〳〵第一流とはなれぬ。佐藤歲三の「野火」の邦磨は彼にしては絕世の上出來であつたが、其外にはカラ駄目な俳優だ。村田正雄はたしかに手腕のある第一流の俳優で一度見たならば全く惚れ込んで了ふ人であらうと思うて居るが、不幸にして僕未だ一度も彼の技藝を見ぬ。見ぬけれども僕の友人で目の肥えて居る連中は皆彼を賞讚して居るからキット見所のあるエラものに相違ないと思ふ、相違ないとは思ふが見ないことだから何ともいふことが出來ぬ。僕の見た中では高田に次ぐのは確かに伊井だ、殊に彼には些かの慢心なく、常に研究的態度をとつて着々として進歩の道を講じて居る相ぢや。若し日本に大劇場の出來ることがあらば、彼は高田と一所になつて各自特得の腕を揮はしめたいと思ふ。只彼に惜む所は高田の如き天才的、電光一閃目を射る的の、天馬空を驅ける的の技藝なきにあるも、是れ彼の如き資質の、彼の如き藝風の人の當り前であつて、之を難ずるのは即ち音羽屋を難ずるのと全一である。其慊らぬ所は慊らぬ所として、彼の長所は充分に認めて、充分に讃めてやつてよいことゝ思ふ。

(五) 河合武雄

伊井を女形にして之に少しく源之助臭味を加ふれば直ちに河合武雄が出來る。河合の藝には伊井のそれと全じく細心精緻なる研究のあとがありくと現はれ、又源之助風の粹な、仇つぽい風も少からずあらはれる。只彼近來少しく得意になり過ぎて、おれでなければこう出來る者かと云樣な風の見えて來たのは甚だ惜むべきことゝ思ふが、何と云ても今の新派女形中の第一等であることは爭はれぬ。又伊井に比ぶれば諧謔の態度が乏しい代りに天才的の面影は伊井よりも多いやうに思ふ。彼には時に技藝以外閃として眼を射る所が出ることがある。「フランチェスカの悲戀」の久香でも、「野火」のおかよでも「目黑巷談」のお龍でも、「伯爵夫人」のルイサでも確かに學んで出來ないと思ふ所が少くなかつた。木村操はなかなか見所のある役者であるとの評があるが、此人も僕は未だ見たことがないから知らぬ。兒島文衞もまだ二三回しか見ぬので大膽に評する譯にゆかぬ。石田信夫とか關清見とかいふ者に至ては、あれでも俳優かと靈かる位だ、僅かに木下吉之助があるが、彼の藝はやさしく、いやみがない丈けて、寧ろ平々凡々であるとの非難を免れない。だから新派の女形は何しても河合を筆頭にせざるを得ぬ。川上夫人貞奴は確かに其夫音次郎君に優る數等で、女性としては九米八お婆さんと共に認めてやつてよい人であるが、河合に比べると矢張り見劣りせらるゝのは是非もない。河合は此頃體弱に綴て今は坂地に赴いて居るが彼の居ぬ跡の本郷座は何となう物淋しさに堪へぬやうな感があるを見ても、彼の力量の尋常に非ざるを知るに足らうと思ふ。兎に角彼が己の力量に慢心して進歩向上を怠るやうなことがなければ益々見應へのある俳優となるべきを信じて疑はぬ。

(六) 中村吉右衛門

去年の十一月頃であつたか、歌舞伎座に於て彼の名題披露があつたとき、口上の役を勤めた八百、梅、羽左の諸優は皆口を極めて此少壯俳優の技藝及び其藝道に熱心なるを嘆美した。口上の時に其俳優を讃めるのは彼等の紋切形であるが、吉左衛門の時に至ては其形式的の言葉以外眞に嘆美して居る情があらはれた樣に思れた。又彼が市村座に於て由良之助を演じた時であるが、此時「熊の櫃」連の批評が實に面白かつた。日く「市川吉右衛門」曰く「十代目」曰く「成田屋」悉く彼を以て第二の團洲に擬して居た。僕は壽美藏、八百藏、芝翫等の由良之助を見たが、之を吉右衛門のゝに比較すると到底物になつて居ないと思ふ。四段目の驅附けのときに判官の切腹した樣を見て、ハツト驚き、ベタリと座た形のよさ、僕は思はずも涙が込み上げて、彼を仰ぎ見ることか出來なかつた。あの時の出來榮えは確かに天才の面影が充分にあらはれた。又判官の死骸を葬る時でも甚だ自然で、どうしても芝居とは思はれなかつた。菊五郎も年の若さに比してはたしかによい役者というてよい、殊に近來の進歩は格段に目につく。けれども吉右衛門に比べるとどうしても見劣りするを數等だ。榮三郎に至ては平々凡々到底見るに堪へず。不肖此上もなき子である。然るに新聞の投票を見ると、今日までの處では兩新聞とも、三人中榮三郎が最高點を占めて居る。アキレテ物がいへぬ。吉右衛門の將來はたしかに十代目團十郎たるべきものと思ふ。今の若俳優中、彼ほど重味があり、又腹のある藝をやり得るものは只の一人もない。年が若いから藝の旨味にかけては未た羽左衛門に及ばぬが、其發達し得べき餘地は到底羽左衛門の及ぶ所でない。若し由良之助とか、松王とか、熊谷とかで男子の涙を要求し得る資格あるものはといはゞ彼の外に一人もあるまい。彼たるもの自重自愛、大に劇壇の爲めに努て貰ひたい。彼が歌舞伎座に出ると、未た餘りよい役の當らぬのは氣の毒であるが、然し其中には重く用ひらるゝであらうと思ふ。淺草あたりの小芝居で花か咲かせるよりは矢張り、木挽町の本場で靜かに腕を磨いた方が彼の爲めである。僕は彼が未來に於ける若俳優の首領であるべきを信じ、且つ其日の一日も速かに來らんことを祈りつゝあるのである。

(七) 澤村宗之助

澤村宗之助が宮戸座又は其他の小芝居に出勤して歌舞伎座の如き大舞臺を踏み能はざるは實に遺憾の極みである。近來時として東京座に出勤することあるのは些か喜ぶへきてあるが、時々立役などをするのは非常の不心得である。「女形ばかりしか出來ぬ俳優とは種が違ふ。これでも訥子の息子だ、立役でも此位立派にやれます」といふ自慢でするのかも知れぬが、それは非常にわるい野心で、芝翫の立役と同樣到底物になるものでない、こんなことは速かに廢して本職の女形專門に勵むがよいと思ふ。又何とか彼とかして速に歌舞伎座あたりに入る工夫をしたらよいと思ふ。僕の見る所によれば宮戸座あたりではどうしても見物人が俗で、眞にしつかりした藝風は却て喜ばれぬ傾があるやうに思はれる。見物人は大抵宗ちやんだとか、長ちやん(彼の弟長之助のこと)だとかいうてつ

まらぬ所でワイ〳〵いふが、眞實に旨い所になると、之を見てやる丈けの見識がない。だからいくら本氣にやつても不知不識の間に俗化し易くなるのは人間の免れ難い弱點である。僕は以れ〳〵も彼が淺草あたりの足を洗うて木挽町邊に向はんことを希望する、宗之助は今の若い女形の中では第一番の俳優である。彼は恰かも立役に於ける吉右衞門と比すべきものである。吉右衞門と宗之助とは全一の座に於て夫婦役となるべきものなりとは僕の年來の持論である。實際今の若手の中で人物の腹を知て居る者は吉右衞門と宗之助の外にはない、吉右衞門は時藏の實子で、宗之助は訥子の實子である。時藏はたしかに手腕のある。俳優であるが、其缺點は餘りに俳優クサイ所にある。吉右衞門は流石に天才だ。此俳優クサイといふ親爺の缺點はスツカリとれて了うて其影だに止めぬ。訥子も亦決してわるい俳優ではないが其缺點は餘りに動き過ぎる所にある。宗之助は不幸にして未だ此動きすぎるといふ親爺の缺點を全く脱するとが出來ぬ。「岸姫」のおそよでも「白石噺」の信夫でも、朝顔でも、忠臣藏の小浪でも充分人を泣かしむる丈けの技藝はあるが若し完きを求むれば、餘りにキクシヤクと動き過ぎる所が疵だ。然しこれは全く淺草邊に長く居つた爲めに自然につき纏ふた病である。若し大劇場に出てやるやうになれば自然に直るべきものと思ふ。俳優間には種々の軋轢があり情實があつて容易に他の座へ移り行くとが出來ぬものとの話であるが、眞に劇道の振作を願ふ有力なる人があつたならば、何故宗之助を木挽町邊に引張るとに骨を折らぬかを怪むのである。彼は未だ女寅程に落ちついた、餘情のある藝は出來ぬ。然しながら今の若さにあの位に腹のある藝をやるのは大いに褒めてやつてよいし、又將來の發達は大に見るべきものあるを信じて疑はぬ。僕は將來此人が吉右衞門と一所になつて、吉右衞門が松王をやれば千代となり、由良之助をやればお石となり、熊谷をやれば相模となるの日あらんことを希うて止まぬのである。

そへがき

以上述べた所を約して見れば、新派の中で僕の好きな俳優は、高田、伊井、河合の三人、舊派では羽左衞門、女寅、吉右衞門、宗之助の四人である。

而して其中でも高田、女寅、吉右衞門、宗之助の四人は主として人物の腹を演ずるといふ點で好きなので、羽左衞門、伊井、河合の三人は技藝に秀れて居るといふ點で好きなのである。團菊逝いて劇界偉人なしといふと雖も、若し新舊兩派を合せて之を見れば決して腕のあるものが少くないと思ふ。以上の七人は主もに僕の好きな俳優について書いたのであるが、前に述べた如くに芝翫でも源之助でも或方面に於ては日本第一の俳優である又片岡市藏の如き、尾上松助の如き、其老練、其熟達、或役を演じては其藝神に入て居る。市藏の權四郎の如き、松助の女衒の善六、やり手の万野の如き今僕の眼の先きにちらついて居るやうな氣がする。又盤十郎といひ、勘五郎といひ、新十郎といひ、皆或點に於ては老巧他の及ぶべからざるものがある。けれども此等の人はどうしても脇師であつて仕手ではない。

且つ何れも老人であつて彼等の技藝は寧ろ過去のもので將來發達の見込がない。だから感心はしても贔負にするといふ氣は起らぬ。僕の好きな俳優といへば矢張り以上の七人である。僕の見る所を眞直に白狀すれば斯くの如し。謹んで讀者諸君の御判斷を乞ふのである。

（四月二十四日稿）



弱者の別天地

白眼子

帝國の頭腦、首府としての東京、之を仔細に觀察すれば、其處に、雜多の光景や不可思議なる現象が常に映じて居る。

或る、皮肉な觀察者は、東京を人間の掃溜と罵倒して居る、又或者は、錦を飾つた光明の舞臺と稱へて居る、勿論、組織が複雜して居るだけ、從つて觀察も種々ではあるが、併し、一言之れを盡せば、表面は美しき都會、裏面は醜き東京なのだ。

と言つたら、嘗つては將軍がお膝元の繁榮を誇つた氣の早い江戸ッ兒連は、一口に花の都と啖火を切るか知れぬが、曷ぞ知らん赤毛布を擔いだ田舍者にすら、生馬の眼を拔く東京なる嘆聲を漏さしむるに至つては、既に都會の物騷なることを說明し盡して居るのだが、若し夫れ、更らに銀座日本橋の如き華麗なる街衢の一歩を轉じたその裏面に到れば、其處に、醜穢見るに堪へざる貧街が到る所に散在して居るではないか、茲に於てか、花の都もあつたものではない、僕は之を鍍金の都會といふ、天麩羅の東京といふ、而もその醜穢なる光景が啻に外觀に於けるのみではなく、その內部の生活狀態が却つてそれなのだから、鍍金の都會といふよりは寧ろ腐つた東京と言ひたいのだ、それも、多年この都會に生活して居る僕の如きでさへ、その光景や眞相を目擊してはさすがに啞然とした程であるか

ら、況んや之を田舍者に見せしめたなら、彼等はそも如何にぶッたまげることであらう、これはハア……と呆るゝこと半時、必らずや茫然として眼を廻すに違えがない。

と言つて、僕は從來知られて居る都下の三大貧窟などに驚いたのでもなければ又之をかつぎ出さうとするのでもない、若し果して、その醜穢なる光景や不可思議なる現象が單に以上の三大貧窟にのみ止つて居るなら、別に文句を言ふ所もなければ假りにも首府と名の附く東京を而く罵倒するのでもないが、情けないことにはその如き貧窟が今は十五區各區の到る所に建設せられて、甚しいことには寧ろ知名の三大貧窟を壓倒する程の一大貧窟が今現に都下の片隅に形造られて居るのだから仕方がない、事、些々たる出來事として一顧の値なしとせらるればそれまで、苟も、社會の暗面を歌はんとする文人小說家、乃至は社會學者とか名乘りを上げるそれ等の人々に向つて、聊か參考の一助ともならば之を望外の幸榮として、玆に筆を起して見やう。

小石川は西丸町の片隅、巢鴨街道に面して、其處に、俗稱百軒長家なる一廓がある、問題は即ち是れて、言ふまでもなく界隈に知られて居る著名の貧民窟なのだ。

けれど、それと相距る數十歩の所に、天下の富豪岩崎男の別邸を守るが如くにずらりと並列して居る同名異性の百軒長家が、同じく巢鴨街道に面して軒を列べ、て居るのだから、知らぬものはそれと之れとを取り違える恐れはあるが、併し、一は富豪岩崎の所有に係るものと、一は社會の舞臺から跳ね飛ばされて玆に弱者の別天地を形造つた吹けば飛ぶ連中のそれであるから、一目瞭然、固より同日の論ではない。

九尺二間と言へば未だしも體裁は好い、手ッ取り早く言へば豚小屋にも劣る棟割長家、それも、朽ちて腐れて風雨にだも堪へぬ一戸僅かに六疊の一室、それが、一棟十戸から十二三戸、之が見事に十有餘列に並んで、即ち百數十戸の堀ッ立て小屋が途の片隅に拗ねた如く全然一區畵をなして自ら別廓を造つて居る、て、その

外觀の憐れに小さき、憐れに醜き、之を何れの點よりするも、實以つて間然する所なき貧窟なので、他の三大貧窟にも斯る純然たる見事なのは決してないのである、早い話が、諸色高直の今日、一日の家根代僅かに四錢といふのを見ても、以てその一班を窺ふに足るのであるが、更らに今少しくその外觀體裁を寫實的に描いて見るならば、

兎に角、家の古く腐つた工合から觀察するに、この一廓は既に十有餘年前の建築たるは疑ひなく、それも、細民の需要に向つて建てた體裁だけの家屋であるから、家と言ふよりは寧ろ小家といふのが適當なので、室内の體裁と言へば、百有餘の豚小屋、戸毎を通じて疊と名の附くもの殆んどなく、多くは蓆や薦を代用にして、家具は單に炊事道具の二三個ある外には、屑屋に値踏みをさせても恐らく十錢の上を出る代物は一ッもない、家の廣さは純然たる三坪、それも、入口に半坪の土間があつて、この土間が昇降口兼臺所である、窓はたゞ一個所、便所は一棟共同て、路地口と言へば僅かに四尺の途、それを、兩側から長家で蔽ふて居るのだから、言はゞ隧道の形、光線は無論遮斷されて、晝尚ほ陰氣に薄暗いのだが、之れが、夏と言はず、四時常に異ならぬ臭氣を發して居るので、試みにこの附近を通行すれば、誰れとて嘔吐を催さずには居られない、が、この一廓に生活して居る約五百の細民、彼等はこの豚小屋に平然として豚の如くに生活して居る。

尚ほ、この百餘戸の細民、之を仔細に觀察すれば、言ふまでもなく生存競爭の舞臺に痛手を負ふた落武者の集合團體であるが、兎に角この中でも二樣の別がある、一は因襲的の細民で言はゞ古參のもの、他は一朝に零落して止むなくこの一廓に身を隱した新參者、と言つて、身一度この一廓に陷つては容易に浮み上ることが出來ないのだから、少きも二三年、多きは五年六年と經つて、遂には新參古參の區別もなくなつては居るやうなもの丶、尚ほ、一年でも永く生活すればする程それだけこの一廓に巾を利かして居るのだから滑稽なのだ。

[illegible]更らに、之等のもの丶職業を見るに、その尤も多いのが人力車夫、下つて、日傭人足、土方、立ん坊、車力、紙屑拾ひ、下駄の歯入、納豆賣等を始め、女の内職としては、巻煙草の賃巻、状袋張り、マッチの箱張り等の外には、各工場に通勤する女工も少くはない、が、職業は斯くいろ〳〵に異なつても、その收入には決して大差はないので、男は平均四十錢、女は平均十五錢内外なのだ、而も、家族と言へば一戸少くも三四人から、多きは七八人、之れが、六疊一室に轉々雑居して、一家の所得僅かに五十錢内外で生活して居るのだから、敢て多くを言ふまでもなく、直ちにその一班を窺ふに難くはないのだが、兎に角その生活の悲慘なこと丶言つたら全く言外に絶して居る。

けれど、その收入が少なければ少ないだけそれだけ凡ての機關が準備して居るのだから、その遣り繰りの巧妙なるは眞に驚くの外はない、て、彼等が唯一の困難として居る衣服の如きは、之を調製するに容易ならぬこと丶思へば强ち左までの苦痛ではなく、試みにこの貧窟の附近なる古着屋や夜見世に就て價格を聞くに、子供のものなら四錢でも買へれば五錢でも買へ、十錢奮發すれば優に立派なものが調へるので、大人のものでも尚ほ二三十錢から三四十錢を投ずれば先づ普通のものが調へられるから驚くではないかと言つたら、讀者は之れを大袈裟の言と聞くであらうが、確かに他所て二三圓の代物もこの附近では僅々七八十錢で得られるのだから不思議なのだ、勿論、それにはいろ〳〵の原因がある、作り直し物、或は拾ひ物の直し、疵物の直し、或は不正品等、之等は言ふまでもないが、兎に角古道具屋の店頭にさへ雑多の衣類が吊されてある程なのだから、之を得るには決して世人の豫想する如く困難なのではない、と言つて、斯く容易に得らる丶途のある癖に、彼等の服裝と言つたら又甚だしい、と言ふのも、彼等の生活として口に贅澤はするもの丶服裝には一向お構ひなしてあるからでもあらうが、冬は兎も角夏にでもなると、家族の人數だけの着物は大概なく、夫婦の間に兼用の單衣一枚、三人の子供に二枚と

いふが如く、各戸を通じて皆之れである。尤も、この一廓に生活して居る以上は、決して見えもヘチマもあつたものではない、男や子供は無論のこと、姫御前のあられもない腰巻一ツで夏中を押し通す如きは珍しくもなく、巡査の不平も馬耳東風と聞き流して、平氣で跣足にもなれば裸體にもなるのだから遣り切れない、て、肝腎の衣類さへ夫婦兼帶の有様なのだから、况んや蚊帳などの贅澤なものが先づ容易にあらう筈はない、と言つて蚊が居ないのかと思へばさうではない、場末の而も不潔な場所と來て居るのだから、どんな寒中でも一二疋は居り、白晝尚ほ人を刺して遠慮がない、それを、平氣で蚊帳も釣らずに、たゞ、多少の蚊遣火と風呂敷一枚に凌いで居るその呑氣さ加減に至つては、如何に習慣とは言ひながらも眞に驚嘆するの外はないのである。

蚊帳もなければ既に衣類もない、更らに况んや入浴の如きは、絶對に不可能のことゝ言つても差支はないが、併し、不思議のことには敢て行水を怠らない、それも、その手段方法と言ふのが甚だ面白い、彼等の長家には二棟三棟の共同財産とも言ふべき据風呂がある、それを、各戸から燃料を出し合つて幾棟幾十人のものが交みに行水を使ふのだが、その燃料としては、或は古下駄、或は杭、或は板戸と、凡そ、燃料となるべきものは、柱であらうが戸であらうが、窮する時にはどし／＼それを叩き壞して毫も假借する所はない、されば、之等の長家の一日四錢といふ比較的高い家根代も、要するに之等の原因があるからで、假りにも疊や建具のあらうものなら、片ッ端から賣り飛ばして飲み且つ食ひ了るのだから、百有餘の戸毎を通じて凡そ疊建具といふものが更らにない。

夏の行水はこの野天の据風呂で濟むが、冬になればさすがにそれも出來兼ねると見えて、止むなく附近の湯屋には通ふもの丶、その癖せ、十中の七八は必らず湯錢を踏み倒すので、或は湯錢を忘れたとか、次ぎには持つて來るとかと、勝手な口實の下にづう／＼しく入り込むのだから、湯屋も之等の細民にかけては手が

附けられない、尤も、近來はそれを防ぐ手段として、入口に。

湯錢の時貸しはお斷はり申候

といふ貼札をするやうになつたのだから、彼等細民に取つては大打撃であるが、兎に角湯錢の時貸を店頭に斷つて置くなどの珍事は、都下廣しと雖もこの界隈の湯屋を除いて他に決してないであらう。

夏の生活は斯かる無雑作で濟むもの丶、冬になればさすがにこの手輕では終へないのだが、その癖せ、冬の嚴寒に一枚の煎餅布團で親子三人雜子寢をする如きは未だしも、甚だしきはその煎餅布團さへなく、燃え殘りの竈の前で豚の如くに横はることや、或は五厘の炭團二個で一夜を明かすなどのことも又決して珍しくはない。

て、次ぎには彼等の食物であるが、之れも、衣服の求め易きが如くに又甚だ求め易いので、たとへば、甲の長さの五六寸もある大きな烏賊が、三疋で三錢から四錢、五人前にもなる鮪が一切れ三四錢大きな太根が二本で一錢、鰹節の如きも一本買ひの出來ぬものの爲めに削つて賣つて居るのだから、二厘三厘は通例のことで五厘一錢となれば威張つたもの、凡てが甚だ輕便に出來て居る、といふのも、之等の細民を目的とする商人が。賣れ殘りや癈物を巧みに利用するからで、夜店の如きは殆んど之等の細民が重なる顧客となつて居る、されば、彼等が日常の生活として、先づその日の收入は擧げて口腹に充されるので、或は亭主が居酒屋に一醉の快を買へば、女房は子供と買ひ食ひをするといふが如くに、たゞそれ食慾のみが彼等に取つて唯一の慰籍でもあれば娯樂でもある、けれど彼等は元來勞働者である、時に收入のある代りに時には絶無である、殊に、雨天の二三日も續かうものなら、忽ち腮が干上るので、斯る場合には一日一食は未だしものこと、甚だしきに至れば一日二日を斷食して親子抱き合ひながら饑に泣くなどのことも殆んど常事なのだ、殊に、物價益々騰貴して收入益々減じ往く今日となつては、彼等の生活次第に慘狀を極めて、又當時の面影はない、殊

に於てか、彼等の生活上今現に唯一の力と頼みつゝあるものは、この貧窟に面して別に三十軒長家なる一棟内に營業されて居る殘飯屋で、其處の親子は朝夕必らず、二回、一年三百六十五日雨が降らうが槍が降らうが、遠く青山の聯隊まで商品を仕入れるべく荷車を曳いてたゞの一日とて休んだことはない、それで、歸り來れば店頭山を築いて、幾桶の殘飯殘汁は瞬く間に賣れ盡して一粒一滴も止めないのだか、尚ほ、その恩惠に浴し漏れた幾十の細民、或は桶或は岡持ちを手にして悄然と歸り往く姿と言つたら、酸鼻と言はうか、悲痛と言はう、殆んど形容の言葉はない。

が、殘飯殘汁尚ほ購ふだけの餘裕あるものは未だしも幸福なので、甚だしきは一片の麵包一本の燒芋に漸く空腹を凌ぐものさへあるのだが、更らに甚しくなると、その一本の燒芋すら購ひ兼ねて、果ては商業用の半天被布は言ふまでもなく、釜や鍋の類から土鍋摺鉢まで、之を融通機關の質屋に運搬して、辛くも一日二日を支へつゝあるのである。

日常の生活が之れであるから、更らに家賃の如きになると、百餘戸の豚小屋を通じて之をキチヨウメンに納付するものなどは一軒もない、と言つて、差配の藥鑵頭が彼等を遇することは極めて酷なるもので、最初の契約は敷金二ッ、家賃一圓と言ふのであるが、その日〳〵を辛くも送つて居る彼等に固より十錢は愚か一ケ月の前家賃すら不可能のことであるから、多くは一日四錢の日掛けて、その取り立てはと言ふと人力車夫の如きは朝の六時頃に必らず廻つて來る、そは、前夜徹宵して働いた勞銀を目當にするので、その際若し憐みを乞へば、更らに正午、尚ほ否けぬとなれば夕刻といふ如くに、日に二三回は必らず廻つて來て、嚴重の督促をする、されば、彼等細民の差配を見ること、恐らく警察官吏を恐れるそれよりも尚ほ甚だしく、現に、差配の藥鑵頭を見れば、戰々として低頭平身、只管にその鼻息を窺ふとにのみ之れ勉めて居る、殊に可笑いのは、藥鑵の娘に美しからぬのがある、之れが日々仕立屋通ひをして居るのだが、彼等細民は之を呼ぶにお孃樣を

以てし、お孃樣なるもの又お孃樣然として常に氣取つて濟して居る、勿論、お孃樣など言はるべき柄でもなければ身分でもない。

斯く、彼等の居常は慘憺たるものであるから、彼等の社會を見ることと如何に執拗にして且つ悲觀して居ることかと思へばこは又意外で、到底吾人の想像だも及ばぬ程呑氣に平氣なのである、夫は日々の勞を慰すべく一椀の濁酒を唯一の慰籍とし、妻は家に在つて内職といふのはたゞ表面のこと、四隣合壁刻々時々に往來して、世間話や近所の穴探しに短かい日足の傾くのも知らず、亭主が粒々辛苦の勞銀幾錢かを割いて茶受けの燒芋に化し去る如きは殆んど日々のこと、子はたゞ買食ひのみを能事として可惜學齡をぶら〳〵と遊び暮らすは未だしも、良家の兒女を强迫して小使錢を胡魔化す如き、店頭の駄菓子を掻つ浚つて平氣で居る如き、若し夫れ之れを世の兒童敎育家なるものに見せたら彼等は何んと言ふであらう、恐らく呆然として言ふ所を知らぬに違ひはない。

更らに之れをそれ等の者の娘や悴に見るに、多くは職工と女工であるが、悴は勞銀を擧げて酒色に棄て、娘は虛榮を事として衣服頭飾に憂身を窶し、たとへ一家が饑に泣かうが事に悲まうが恬として顧みる所でない、親は親、子は子、同じ一家に起臥しながら犬猿尙ほ啻ならざるのである、のみか、醜聞到る所に流れて界隈は殆んど之等の男女工に橫行跋扈されて居る半夜、試みにこの界隈を逍遙すれば、妙齡の處女紅粉を施して到る所に喃々の語を漏して居るが、何んぞ知らんその影の沒する所は外ならんこの百軒長家なのだ、玆に於てか家、單に貧民窟として知られて居たこの一廓も、やがては一種の魔窟と化し終るに違ひはない。

が、それは兎も角、全然一區劃をなして玆に別天地を形作つて居る彼等五百の細民、固より周圍のものに、敢て迫害とまでは往かないまでも、少くも別天地の人種として自然排斥されて居るのだから、彼等は又自から周圍のものを白眼視して、玆に自然の團體を結び、全然別天地の生活を營んで居る、狀勢旣に如此である

から、その團結心の如きも自然鞏固に、若し一廓内に何等の變事がありとすれば、廓内の細民擧つてその急に應じ難に趣く如きは、彼等下層社會の狀態として意外といふよりは寧ろ稱ふべきの美風を有して居る、事は數日前、偶々書生の二人連れ、この一廓を橫斷して、醜穢見るに堪へぬその豚小屋に膽を潰ぶし、更らにそが中に轉々豚の如く橫臥する細民を見て、我れ知らず。

『之れでも人間かなア』

と、ふと口走れば、端なくもそれを耳にした山の神、憤然として立ち上ると見る間に。

『やいッ、この書生ッポー、生意氣なことを言ふないッ』

恐ろしき權幕に書生が口を噤めばそれまでゞあつたが、面白半分一言二言冷嘲すれば、山の神更らに憤然として。

『オーイッ皆んな來て呉れッ』

言ひ終らぬ中、周圍の豚小屋より躍り出した一廓の車夫や若者の一群、忽ち二人を取り捲いて袋叩きにした珍事は、幸ひ新聞雜報の種にもならなかつたが、この一事に見て兎に角居常の一端を窺ふことが出來ると思ふ』。

（終）

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲一時的精神病者

本鄉　漫性患者、

春に成て氣候が陽氣になると、精神病患者、即ち氣違いが多くなると云ふ醫師の言は確だ、試みに櫻の咲く時分上野や向島へ行て見給へ、一時的急性精神病患者が殆んど數へ切れない程澤山居る、あれは只一日限りて直に全快するので世人の注意を引かないけれど、若しあの態度が數日乃至數十日續いたなら、即ち立派な完全無缺な氣違ひと成て巣鴨の蘆原將軍のふさはしき相棒となるのだ、彼等は只時日の長短の差があるのみて病院行を免かれて居るのである、

▲恩知らず

荏原郡　犬の子

人樣から恩を受けて、之に相當の報ひをしないのは、たとひ向ふて禮を受くるの心がないにしろ必ず爲さればならぬ事である、先頃電車値上げの際に反對運動をして、其目的を達するに有力なる働きをした、西川山口其他の諸氏が、今其爲めに罪に問はれて居るのに市民は其目的を達しさへすれば、自分等の爲めに働いて呉れた人がどうならふと構はないとは、俠を以て任じて居る江戸子としては甚だしき恩知らずの所爲である、

▲陰德か狡猾か

神田　道行く人

小便無用や通拔無用の貼札は、即ち小便や通拔けの適所を示す極めて好い方法だ、田舍漢や馬鹿正直な人は兎も角、苟も其土地の生活に馴れた

る人は皆其必要に應じ、各欲する所に從ひ其貼札の意味を反對に活用しつゝあるは動かすべからざる事實なり、札を貼れるは通行人に陰德を施さんか爲め其便なる故を暗に教ふるの好手段なるか、或は通行人か札を利用しての狡猾手段か、はてさて

▲代議士虐待　　横濱　虐待防止會員

文明の世の有難さ動物虐待防止會などが出來、德禽獸に迄及んでる今日此頃、奇怪なるかな、人間しかも一國の撰良たる尊敬すべき堂々たる代議士を鞭韃するとは虐待も亦甚だしいてはないか、曾て鐵道國有案が議會に提出せられたる時、地方の有志は各自撰出議員の軟化せんを恐れ、上京して代議士を鞭韃し盲從を防がんとす、と當時都下各新聞に記載せり、鞭韃か鞭韃か、牛馬の如く鞭韃せらるゝ迄墮落せる代議士閣下の多きこそ嘆かはしけれだ、

▲不相變云々と　　牛込　變物

手紙の消息に普通書いてるが、之はちと間違た話だ、生きてる人間が、一時間でも一日でも經過すると相當に變化するのは爭はれない事實だ、子供なら大きくならふ若い者なら年寄にならふ年寄なら老衰もしよう、單に肉體ばかりでない頭腦に於ても、日に月に進歩し變化してるのは確だ、吳下の阿蒙求君や舊との平六君ならいざ知らず、普通の人間が長い間に少しも相變らずは甚だ不合理だ、宜しく眞正の所、即ち相變た所を書いたらどうだらふ



妻君の手帳

飛燕客

世界…と云ふ、大きなものから云つては、殆んど說明が出來かねる、唯此の、地球儀に、ボツ〳〵と、インキがはねた位にしか、顯れて居ない、日本と云ふものから見ても、吾輩なる法人は、戶籍面に、四千幾萬かの內に、一樣に記入されて居るだけであるから、其勢力たるや、甚だ以て微々たるものであるが、然し、これでも一戶の主人である、假令蝸牛(でゝむし)の殼のやうな、

或はマッチの箱のやうな、吹けば飛びさうな家てあつても、兎に角一戸は一戸てあつて、又主人は主人てある、主人の權力は、帝王の權力と同じてある、唯だ僅かに、大きいと小といとの、差があるばかりてある、天下に於て、吾輩の名を知るものは無くも、我家に於て、吾輩の名を知らぬものはない、それが證據には、妻が吾輩の名を呼んだからとて、三毛は、決して驅けて來て、妻の足元にからまりはせん、即ち吾輩の名は、三毛と云ふ名てないと云ふ事を、獸類の三毛てすら心得て居る、又、吾輩は、社會の何人からも、些の尊敬を受けずとも、我家の何人からも、總て尊敬を受けて居る、然り我家の家族は、妻と猫とのみてある、

妻は吾輩の、最も忠實なる下臣てある、時には參謀官てある、時には生徒てある、又時には信者てある、

賢明なる王者の命令には、民は喜んて服從すると同様に、吾輩の命令には、妻は喜んて服從する、又吾輩の言行は、社會の何人よりも、最も信じて疑はぬ一人てある、又吾輩の學識は、非常に深遠なるものと信じて居る生徒てある、然して非常に質問を好む生徒てある、知らぬ事は知らずとして、ドシ〳〵質問する、決してハニカム事をしない、又時には、難問を持ちかけて、大に先生を困らせる事もある、斯う云ふ時には、しらべにや解らんと云つて、二三日の後に答をする、けれどもこれが爲めに、少しも吾輩の學識を疑はぬ程、彼はしかく善良なる生徒てある、

先生は、隨分膠だめの說明をする、が生徒は少しも疑はぬ、熱心に之れを筆記して置く、そしてよく復習すると見えて、急ちの內に暗んずる、先生は忘れて了ふ、時には反つて生徒から、說明を聞かされる事もある、

この間、妻がお湯に行つた留守に、妻の手文庫から、「覺え」と云ふ、帳面を見出した、豈計らんや、これは先生の講義の、筆記であつた、一寸一つ二つ轉載すると、

○川柳と云ふものが、たいへん流行りますやうてす

が、どんなのが、可いのですかと問がつたら、旦那様の曰く

川柳と云ふものは、其起りを知らなくては、能いも悪いも知れやう筈がない、今の若い人達が、やたらにへんなものを作つて、川柳のなんのと云つて居るが、あんなものは川柳でもなんでもない、自分では新聞へても出れば、スバラシイものを作つたと、思つて居るだらうが、大きな間違いさ、今に目がさめると、耻しくなつつく来るだらうさ、

往昔ね、前句附と云ふものがあづた、起りは何時頃か不明たが、多分延寶の頃らしい、その以前には狂連歌と云ふものがあつた、これは足利時代に起つたのだらう、豊臣時代にも盛て、一人下の句を云ふと、一人上の句を附けたのだ、宗鑑と云ふ人の、犬筑波集に、こんなのがあるよ、

きりたくもあり切り度くもなし

盗人を捕へて見れば我子なり一

尊くもあり尊くもなし

飛ぶ鳥を祈り落して喰はれけり」

それから、今踊りと柄て名高い、お前も知つて居るだらう、元祿さね、この元祿頃には非常に流行して、終には博奕のやうなものになつた、それから前句附、冠附、が變じて三笠附と云ふものになつた、これはまるで博奕だと云ふので、享保の末に禁じられて了つた、處が寳暦頃から、前句附が又盛になつて、江戸中に行はれたが、其頃、柄井八右衞門と云ふ、淺草新堀端の町名主で、號を無名庵川柳と云ふた人が、非常に歡迎されて、點をした、そして、月次萬句合をやつて、其秀逸を出版した、これは半紙五六枚に刷つたものさ、これが後の柳樽の基だ、即ち呉陵軒可有と云ふ人が、斯う出版された多くの內から、面白いのを拔いて、明和二年の五月、始めて俳風柳多留と云ふ、小さな本にした、それから、前句ばかり獨立して、一の體をなすに至つた、然して川柳が點をした故、川柳點と云つたのが、終に川柳と云ふ名稱となづたのである、そうして、よく下世話の下帯を穿つたものだ、それから川柳

は、一世二世三世と、だん／＼續いて、今日は九世の綠亭川柳と云ふ人が居る、

さあ、斯う話したら、川柳とはどんなものが佳いのかゞわからう、今日の新聞にあるやうな、

みいちやんは蜜柑むき／＼笑つてゐ

汽車の窓電柱后へ飛んで行き

なんかゞ、川柳づらがあるものか、馬鹿々々しくつてものも云へない、

とおつしやいました、

先生自身は、實は、こんな怪焔を吐いた事が、あつたか奈何か、忘れて居たのさ

すると、又其次ぎには、

○へなぶりとは、奈何云ふわけてすかと、問いましたら、旦那樣の曰く、

それはね、明治三十四年七月一日に、牛込の白鳩社から出版した、躬治と云ふ人の歌集の迦具土と云ふ本があるが、この歌をおちやらかして、今の久良岐社の大將の、酒井久良岐君が、へなづちと云ふ小冊子を出した、これは、躬治だの、鐵幹だの、晶子だのの歌の、句調をまねたり、語呂を合せたり、おちやらかしを極めたものである、へなづちの中には隨分面白いのがある、

三番は牛でお酒臺六番は

しんこおかわり五番のお立ち

あんたはんこちら向かんせと引張れば

おらはアいやだと堅くなつて云ふ

お互に手と手をにぎり合ひまして

露が赤いとか何とか云ひました

・みづからをおたふくなどゝ云ひますか

たんとおつしやいあらよくつてよ君

なんて色々あるよ、まだ澤山あるが忘れたがね、隨分手ひどくやつたものさ、處が後に、この今樣の狂歌らしいのをまねて、作る人が出來た、てへなづちに似せたと云ふ處から、へなぶりと云つたのさ、だから、へなぶりは矢張狂體の滑稽なのが面白いのさ、近頃のへなぶりは、古今調の下手な歌か、鐵幹調の下手なも

のゝやうになつて、とんと面白くない、あれてはいかん、矢張下世話の人情を穿つがよいさ

とおつしやいました

などゝ書いてあつた、この筆記帳中々面白ろいと思つてだん〳〵と讀んでみると

○宗教の中には、熱心に神を信じて、熱心に祈禱をすれば、如何なる病氣も、少しも藥を用ふる必要がないと、云ふのがあるさうですが、ほんとてしようかと問ひましたら、旦那樣の曰く

あるとも、而かも天理教だの何だのと、宗教と云ふに足らぬものでなく、邇れ文明國の宗教、世界三大宗教の隨一たる、基督教の一派にも、そう云ふ信仰を以つたのがある、誠に理屈のない話さ、奈何も這ふ云ふのは、信仰とは云ひかねる、臆面なく云へば、迷信だね、尤も信仰と迷信とは、何を標準にして區別するかとか、或は或る程度の迷信は、宗教的に幾何の價値があるかとか云ふ問題は、無論局外漢の論定し得べき事てはなからうが、然し、祈禱て病氣が癒るなどゝは、奈何しても迷信と云はねばならぬ、何故かと云ふと、先づ病氣とは奈何云ふものてあるか、醫藥とは奈何云ふものてあるかを說明すれば、自ら明かてある、お前達にはわかるまいが、先づ簡略に云ふなら、人間の身體が、病氣になると云ふことは、組織上に或る變化を起すことてある、之れに藥物を投じて之れを醫するのは、其化學的作用に依るのてあるぞ、故に化學の實驗が誤らぬ以上は、藥物の効も亦誤らぬのてある、昔ヒポクラテス時代には、液體病理學が旺盛てあつた、即ち病氣は、體内にある一定の液が、其調和を失ふに基因するものてあると說いた、然るに近來、ウヰルヒヨー氏の細胞病理說が出てから、今日總ての學者は、皆この說を取るやうになつた、即ち病氣は、或る部分の細胞が、變化を受けるのてあると云ふことになつた、そこて其變化された細胞を、藥物を與へて、化學的作用て醫するのてある、然し藥物は總て同一の細胞に同樣に作用するものてはない、或るものは專ら神經細胞にのみ作用するし、又或るものは筋肉細胞にのみ作用す

るのである、が悲しい事には、今日の處では、未だ總ての藥物の効力が、悉く明亮であると迄はゆかない、そこで治療の仕方にも從つて色々ある、即ち直接に病源を除くものと、對照的に治療の効を奏するものとある、こんな事は簡略にしやう、で藥物の効力の明亮となつたものは、即ち特効藥である、例ば梅毒の特効藥は水銀劑、ヂフテリーの特効藥はヂフテリー血精の如きものである、これ等は實に、サルチール酸溶液に、過鹽化鐵溶液を加ふれば、紫青色を呈すると云ふことが、信仰でも何んでもなく、確實に顯れると同樣に、明かなる効力を有するのである、もつと分り易い事を云へば、玆に火傷をしたものがあるとして、この人が、非常に熱心に祈禱をした所で、其全癒には、必ず相應の時日を要する、其上癒つた所で、多くは跡痕を殘すだらう、けれども、如何に無信仰でも、何んでも、よく其部分を清潔にして、之れに(重傷でなくば)硝酸銀水をぬれば、必ず前者よりも早く癒つて、且つ跡痕は輕微である、モルヒネは誰が飮んでも、痲睡の効を奏するし、アルコールは誰が飮んでも、酩酊するにきまつてゐる、火事や洪水が、祈禱で止められぬ内は、病氣も祈禱では癒る筈がないのである、この位明かな道理がわからぬとは、寧ろ氣の毒な話さ、だから傳道でもしやうと云ふ人は、總ての方面の智識がなけりやいかぬ、そうでないと、學者の一笑にも價せぬ事を、靑筋を立てヽ說き回つて居る樣な、馬鹿げた事が出來上る、

又生命は、神の借し給ふ事であるから、生死は一切、神の御心に委するのだと云つて、病氣になつても、ほつたらかして置くとすれば、不都合千萬である、川の中へ落入つた人を、生死は神の御心であるて、見物するものがあつたとしたら、社會はこれを何と云ふ、よしそれ程手ひどく攻撃せんでも、神樣は譽めはすまい、人は與られたる智識を、出來る丈け磨いて、一のものは十倍又は三十倍たらしめて、人命も社會も、益大切に、永く保つやうにするが、可いではないか、かくてこそ、汝等善且つ忠なる僕ぞ、と云はるヽやうになる

のではないか

とおつしやいました、

おや／＼、とんだ宗教談まであるぞ、甚だ柄にない事をしたものだつけ、宗教談が醫學の講義のやうになつたは滑稽である、然し滑稽と云ふ言葉は、非常に亂用されて居る言葉である、

新刊批評

▲碧潮

樋口龍峡著
嵩山房發行

思想の色は碧なりといひけんショーペンハワーの言をとり、思想の潮流（ソートカーレント）といふ意味にて碧潮と名けたるなりといふ。一卷分て「思潮評論」「文藝小觀」「筆のすさび」の三部となし、第一の部には故樗牛氏の說を駁したる「美的生活論を讀む」を初めとし、久しく萬朝に連載して本能主義個人主義を攻擊したる「新思潮論」及び其後に帝國文學？に出てし「續思潮論」等を收めたるが、著者の本領は最も此第一部に於て見らるべきが如し。文に躍るが如き天才的面影なきも、稍々暢達にして流麗の域に進し、思想亦理と情との調和を保てる所、是れ氏の長所なり。「文藝小觀」にもなか／＼に氣が利きたるものあり、「筆のすさび」の「歌舞の曲」はツアラツストラに擬して作れるもの一寸面白し。吾人は此書を以て思想界を風靡する程の大作とは思はざれど、世間が氏を評價しつゝあるよりは遙かに優れたる作物なることを斷言するに憚らざるなり。（定價六十五錢）

▲烏水文集

小島烏水著
本鄕書院發行

明治三十一年から仝三十八年に至るまでの烏水の文を集めたものだ、一卷を人間、社會、歷史、文藝、美文、拾遺等に分ち、總計四十篇三百七十頁で可なりの量がある。五六年前までは烏水の文章は非常に喜んで讀んだものだが、此頃になつては左程感服することが出來なくなつた。素より多年筆を執た氏のことであるから、中にはすら／＼とよく出來て居るものもあるし、又才氣の充分に迸て居るものもないではないが、概していふと推敲が足らず、洗錬が足らず、疵が隨分多くある。中年以上の人が何か新らしいものを得んとして讀んだならば失望するかもしれぬが、青年文士が筆を自由に動かす手本としては大に益のあることゝ思ふ。（定價七十五錢）

▲ダンテ研究

柏井園譯
敬文館發行

ロングフエローやローエルと親友で、多年文學の研究、殊にダンテの研究に潜心したノルトン氏の著を譯し、附するにダンスモアー氏の「ダンテ研究の友」の一部の譯を以てしたものである。譯文は處々直譯臭を脫せず、且つ日本の語格に合はざる處、テニチハの誤用せる所なども少くないから、文章として確かにまづいものである。然しながら原著が原著丈けに思想がコンデンスされて含蓄が饒かに、考へて讀めば非常に有

益なる書である。又譯文もまづいとはいひながら、忠實にやつた仕事てあるから、一知半解の者が、ゴマカシテ譯したものなど丶は素より全日の談でない。唯一つ上田敏氏の「詩聖ダンテ」より外にダンテに關する書物を有せざる我國には大に有益なる書であることはいふまでもない。(定價四十五錢郵税六錢)

▲白すみれ　夕星會編　鵜聲堂發行

與謝野晶子、山川登美子を筆頭として外數十名夕星會の才媛の短詩を集めたものである。何れも清新にして奔放、充分に明治女性の思想感情を窺ふに足るべきものであるが、どうしても晶子、登美子兩女史の作が最も見所があるやうに思ふ。和歌に趣味のある人は是非一讀すべきものである。(定價三十五錢)

▲花の詩　小原無絃譯　本郷書院發行

西洋には花の詩とか、海の詩とか、一つの題の下に澤山の詩人の作を集めたものがあつて、非常に便利でもあり、且つ趣味も多いのである。此書は其花の詩からでも選んで譯したものであらう、四十篇とも皆有名な西洋詩人の作である。たゞ譯詩が一向文學的價値がないので折角の金玉を瓦礫に近いものにして了ふたやうの憾みは免れない。然しながら由來譯詩は至難中の至難事であるから、餘りに完きを求むるは酷に失するのであらう。讀む人はこれによつて西洋詩人の思想丈けでも知ることの出來るのに滿足せなければなるまい。(定價五十錢)

▲壺中我觀　田岡嶺雲著　嵩山房發行

嶺雲の文を集めたものだ。「青年文」時代の嶺雲は時代の急先鋒に立て一部の青年の崇拜を得たものであるが、時代の進歩が、嶺雲のそれよりも速かなりし爲めであらうか、今では到底世間を動かす程の力ある文章と思想がないやうに思ふ。勿論中には豪壯なるものもあり、慷慨なるもあり、哲學的なるもあり、詩的なるもあり、科學的なるもあり、決して平凡なるものではないが左程隨喜渇仰する程の作はない。が嶺雲の如き人物と文章と思想とは、餘りに形式的、餘りに平凡化せんとする社會には確かに一讀せしめておく必要があるだらうと思ふ。(定價四十錢)

▲野菊之墓　伊藤左千夫著　俳書堂發行

今年正月の「ホトヽギス」の卷頭に出た小說で、所謂小說家の作の如く、忌味がなく、且つ野趣に富み、詩趣に饒かで、讀んで面白い作である。が定價三十錢とは甚だ高か過ぎると思ふ。

▲國運と信仰　姉崎正治著　弘道館發行

姉崎博士が日露戰爭中に國運及び信仰問題について書かれた文を集めたものである。一卷を「戰爭と國運」「理想と信仰」の二部に分ち、各部二十餘篇、合せて四十餘編の文章から成て居る。博士が國を憂ふるの至誠と見識、思想界に對する態度と抱負、略ぼ此書によつて察知することが出來、又讀者の此書によつて啓發せらるゝことも少くはあるまい。只難をいへば少しくクド過ぎて、痛快奔放の筆づかひの乏しい所にあるが、徹頭徹尾、眞摯で且つ研究的の態度を失はぬのは容易に及ぶべからざる博士の長所である。苟も思想界の問題について興味を有する人は一讀す

ろの價値は充分にあることゝ信ずる。(定價一圓)

▲寫生文集帆立貝

虚子四方太著　俳書堂發行

一圓といふ定價は無法に高い。どうしても七八十錢位の本としか見えぬ。定價が高いので實行のわるいといふことがあれば誠に殘念な次第だ。こういふ本は成るべく多くの人に讀ませて、清新にして靈妙なる趣味を普及したいものと思ふ。矢張り「寒玉集」とか、「寫生文集」のやうな體裁にしてズツト價を廉くした方がよかつたらうと思ふ。然しながら默語と不折の繪を添へたのは全く有難い。若し此爲めに高くなつたのなら、高くても矢張り附けた方がよいと思ふ。殊に僕は默語の繪が非常に好きだ。「飛鳥山」の花見の口繪の如き、遊人遊妓皆動き、近くの人物は眞に歌ひ且つ騷いで居るやうに見える。「幻住庵の跡」の繪は幽靜、淡遠、「湯河原日記」の繪は筆力超凡一線一劃悉く面白い。不折の繪も非常に奇抜であるが、強て奇抜ならんとして却て興味索然たらしむる恐なきにあらずと思はるゝのもある。然し「中禪寺」「花車賣」「野分」の揷繪は面白く、殊に「芋明月」の手水鉢に月の影を寫して、天上の月をきかしたのは實に非凡と思ふ。文章の方は嘗て本誌で大に之を賞讃したことがあるから今は餘り詳しくいふまいと思ふ。折があれば今一度文藝時觀でゞも書いて見るかも知れぬ。四方太氏の「飛鳥山」「横町」「實家」「向島」や、虚子氏の「影法師」「蠟燭」等にあらはれた寫實の技量は到底今の何人と雖も及ぶべからざるものと思ふ。又四方太の「痛鉾の響」や、虚子の「野分」「屁」等は只の寫生以外特殊の趣味がある。僕は近來稍々多忙であるので、一卷悉く讀了することが出來なかつたから、讀んだことのある分だけ紹介した。詳しいことは折を見て評する。兎に角此種の文は僕の非常に愛讀するもので、何人にも必らず讀ませたいと希望するものである。(樗生定價一圓)

▲朝思暮想

加藤咄堂著　東亞堂發兌

咄堂居士の興趣に動いた文字や、感慨に迸つた文字を集めたもので、中には宗教談あり、倫理説あり、藝妓論あり、更に宿屋哲學あれば高利貸に對する意見もあり、俳句の、茶の湯のと色々出て來る、居士が世に評ある辯の人たると共に、八面玲瓏の才の人たる事も知れる、が想に格別奇警なところあるでもなく、又識に超過なところもない、そこが又何人に讀ませても害の無いところかしれぬ、文品も濃艶にあらず、蒼古にあらず、先づ清麗とでも評すべきもので、清淺の水、日華底に透りて遊鱗石に映ずといふ趣である、居士は更に文の人である、短編のみであるから頭も疲れず、時節柄新緑の下石榻の上で讀むにはよかろー(定價上製七十五錢)

▲新撰渡米案内

内外出版協會發行

此種類の著述は前に渡米協會からも出た樣であるが、國民が最早蟠居的でなく、遠利の多い北米地方へは隨分志して居るのも少くないから、時節がら必要なことであろー、附錄に旅券や移民に關する諸規則が集めてあるのは親切である。(定價三十錢)

▲女玉手筐

博文館

女學世界の定期增刊として出たのであつて、模範、思潮、なか〱に見處が多い、中にも修學の栞、家の寶はあらゆる方面に渉つて、女子の日常の指南たらんと勉めて居るので、其名の玉手筐たるに負かない(定價二十錢)

▲小說破戒

島崎藤村著　定價七十錢

の批評は來月の文藝時觀内に揭げらるべし。

中央公論

陽春號

四月一日發行

定價　本號限　三十二錢

新内閣の經過
政界の勢力者（常に穩健の說をやるに着實なる態度を てす眞に是れ公論の名に背かざるもの）……社論

文藝の將來（自然主義と理想主義との眞相を闡明して將來 我文壇の執るべき針路を示す十三頁の大論文）……金子筑水

社會主義論（社會主義の呼聲徒らに高くして世は未だその何を意味 せるかを知らざるもの多し此篇通俗に之が說明を試む）……安部磯雄

聖者を論ず（宗教心理學のオーソリチーたる福來氏が當今の思想界に感ずる 所あり心理學的立場より見神見性を論議す堂々廿餘頁の大論文）……福來友吉

外交の現狀（銳利なる批評眼、暗黑なる外交界 の現狀を照破すること燃犀の如し）……竹越與三郎

伴食宰相論（博士もと是れ血性男子、加藤久保田二大臣の出所 を論じ政治的道德の衰頽を攻擊する所氣焔万丈）……建部遯吾

藝術としての哲學（自然科學の立場より哲學を論じ、哲學は畢竟藝術としての外價値 なきを斷ず、痛快の論、嶄新の說必ずや思想界の波瀾を釀さん）……丘淺治郎

蛇の說（主として文學的見地より蛇を論ず、文、和漢洋を打して千變万化 の妙を極め交ふるに博士獨特の諧謔を以てす、蓋し絕世の大奇文）……和田垣謙三

俳優養成所の話（大劇場の建設將さに近きにあらんとする時、遙かに書を獨乙に寄せて彼地の俳優養成法を調査し、其結果を報導したるもの即ち是れ）……藤代禎輔

獨逸のオペラ（新たに歸朝したる波多野文學士が彼地留學の際彼地のオペラを書簡を以て叙したるもの趣味津々として盡きず）……波多野精一

新生活（其椽大の筆、嶄新の論を以て東都の文壇を風靡したりし日南氏が海南の地にあつて何事をなしつゝあるか此篇之を叙して詳か也）……福本日南

二人畫工（小說）（醜譯の老手たる魯庵氏が彼のクオーヷデスの著者シエーンキーウイッチの作を譯したるもの、かくの如き趣味あるもの我文壇に斷じてなし）……內田魯庵

驛路（小說）（人世の行路叙し去り叙し來て漫ろに人をして浩嘆せしむ）……中村春雨

ひとり（小說）（一種の變り物的人物が將さに平和なる生涯に移らんとする時思はざる行違ひよりして再び孤獨依るなきの生活に歸らんとするを叙して詩情紙に溢る）……德田秋聲

坦道（小說）（一度紅葉の門下を去つて鳴かず蜚ばざること十年其間牧師の生活を送て深く人生の機微を究む。此篇着想奇拔にして才華筆端に迸る）……村山烏逕

希望（小說）（艷麗の筆、流暢の文これ眉山氏の長所、此篇其長所を遺憾なく發輝せるもの）……川上眉山

信樂（長詩）（有明氏獨特の想と調とを見んと欲するものは此篇を讀め）……蒲原有明

天の岩戸（長詩）（上、中、下、の三段に分れて全篇十五頁の長叙事詩蓋しこれ著者苦心鏤骨の作にして確かに丙午詩壇の白眉）……吉野臥城

予の愛讀書（姉崎博士、戸川秋骨、內藤鳴雪、笹川臨風、佐々醒雪矢野龍溪等の寄稿あり讀書家の參考となること大）

附錄 男女學生交際論（浮田和民、成瀨仁藏、鎌田榮吉、井上哲次郎、中島德藏氏等の說を網羅して廿六頁の長さに達す、全國の男女學生及び其父兄たる人の必ず一讀せられんことを望む）

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋銀座四	東海堂
仝　日本橋吳服町	北隆館
仝　本郷四丁目	文明堂
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋區鎗屋町	良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

中央公論 定價表

一冊	金拾五錢	郵
六冊	金八拾五錢	稅
十二冊	金壹圓六十五錢	共

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵稅六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一弊社は振替貯金（三四一）に加入いたし居り候間振込用紙御入用に候はゞ御申越被下度候

一郵劵代用の場合は必ず壹割增のことと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年四月三十日印刷
明治三十九年五月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衞門
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）　反省社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場